鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(133)

前畑遺跡Ⅱ

二〇〇八年十二月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（133）

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（X）

前畑遺跡Ⅱ

（鹿屋市郷之原町）

2008年12月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

前畑遺跡Ｃ－18区～26区空中写真

序　　文

この報告書は，一般国道220号鹿屋バイパス建設工事に伴って，平成17年度及び19年度に実施した前畑遺跡の発掘調査の記録です。

この遺跡は，鹿屋市郷之原町に所在し，縄文時代早期から弥生時代中期，中世，近世・近代にわたる複合遺跡です。

今回の調査では，縄文時代早期の集石遺構や，弥生時代の焼失した竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑などが検出され，サヌカイト製異形石器や須玖式土器など北部九州系の遺物が出土しました。

これらは，縄文時代早期及び弥生時代中期の本地域における集落構成や交流の姿を知る貴重な資料となりました。

本報告書が，県民の皆様はじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にあたり御協力いただいた国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿屋市教育委員会並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年12月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　宮原　景信

報　告　書　抄　録

ふりがな	まえはた　いせき　に
書名	前畑遺跡　Ⅱ
副書名	一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅹ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	133
編著者名	廣栄次・橋口拓也・野間口勇・吉井秀一郎・元田順子
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　℡ 0995－48－5811
発行年月日	2008年12月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査起因
まえはたいせき 前畑遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやし 鹿屋市 ごうのはらちょう 郷之原町	462039	12-129	130° 49′ 16″	31° 23′ 27″	確認調査 2005. 3 本調査 2005. 5. 23 ～10. 28 2007. 9. 4 ～10. 26	1,600	一般国道220号 鹿屋バイパス 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前畑遺跡	集落跡	縄文時代 早期後半	集石遺構６基	条痕文系土器 山形押形文土器 平栫式土器 異形石器・礫器・磨石	
	集落跡	弥生時代 中期後葉	竪穴住居跡１基 掘立柱建物跡１棟 土坑１基 溝状遺構１条	山ノ口式土器 須玖式土器 蓋・土製円盤 磨製石鏃・磨製石斧・礫器・磨石・敲石・棒状敲石・軽石製品	
	散布地	中世	土坑１基 溝状遺構１条		
	散布地	近世	溝状遺構６条	古銭	
	散布地	近代	掩体壕外壕１条 誘導路１条 土坑１基	銃弾・薬莢・ガラス製品等	

遺跡の概要

縄文時代早期後半の集石遺構が６基検出され，平栫式土器を中心に異形石器や礫器などが出土した。特に平栫式土器については，同型式内における土器変化がうかがえる良好な資料が確認された。共伴して出土した西北九州系サヌカイト製の異形石器からは，同時期における広域交流の様子をうかがい知ることができる。

弥生時代中期後葉では，焼失した竪穴住居跡が１基，掘立柱建物跡１棟，土坑１基が検出された。弥生時代中期後葉における本遺跡の集落構成を捉えることができる。また，遺構内及び周辺域では山ノ口式土器や須玖式土器，磨製石鏃や磨製石斧，礫器等が出土した。外来系の須玖式土器の出土は，当時の交流を知る手がかりになると思われる。

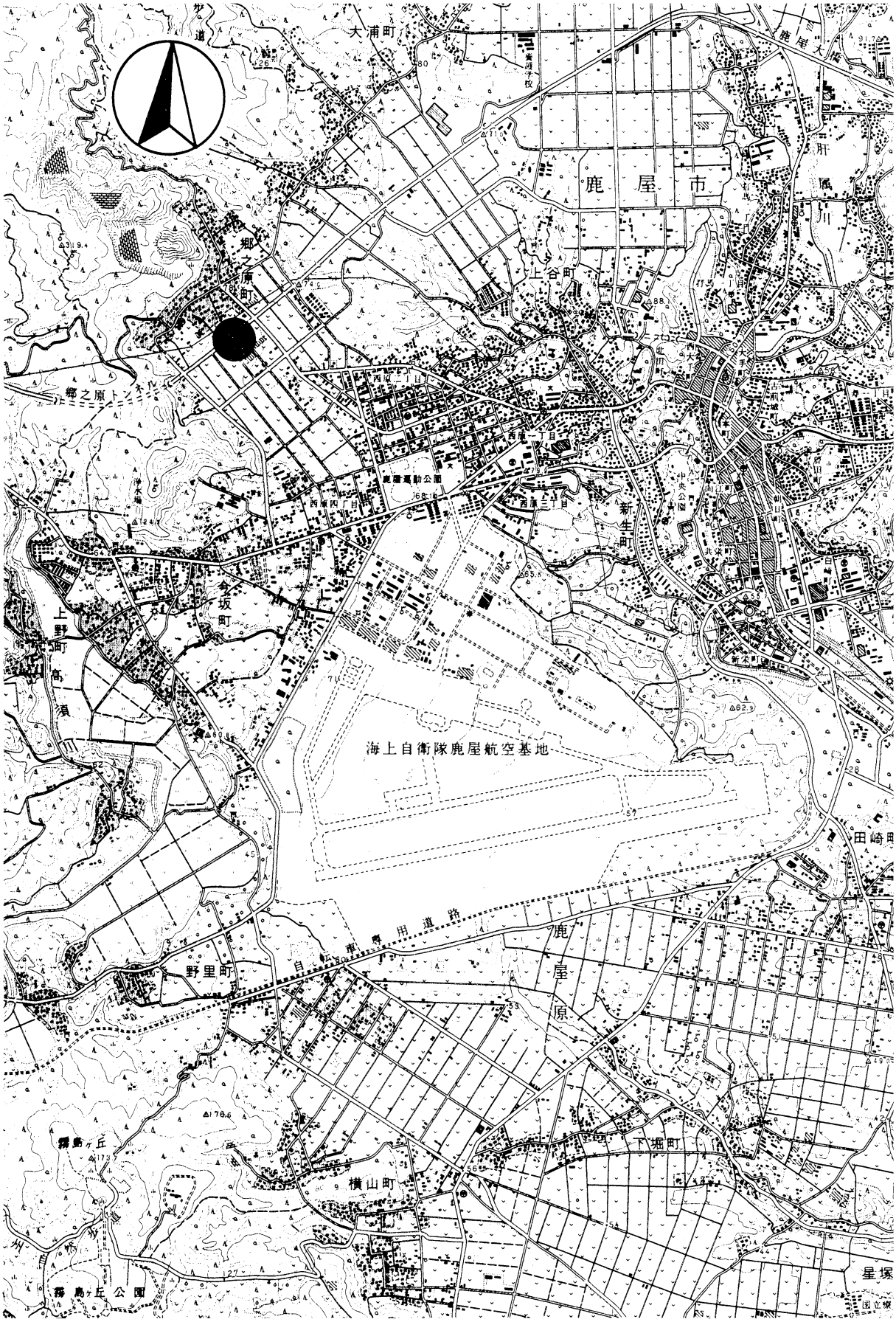
近代では，本遺跡の南隣には太平洋戦争中に特攻基地があり，周辺には掩体壕及び誘導路があったことが知られている。本遺跡内でも，掩体壕外壕や誘導路などの遺構が検出され，銃弾や薬莢，ガラス製品が多数出土した。太平洋戦争中の施設・設備などについては，資料が重要な機密事項のため焼却された経緯等があり，戦中戦後の混乱の中で所在不明になった例も多い。その失われた資料を埋める，貴重な遺構・遺物であると捉えられる。

例　　言

1　本書は，一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う前畑遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は，鹿児島県鹿屋市郷之原町に所在する。
3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
4　発掘調査は，平成17年５月23日～平成17年10月28日，平成19年９月４日～平成19年10月26日まで実施し，整理作業・報告書作成は平成17年11月～平成18年３月，平成20年４月～７月に実施した。
5　掲載遺物の番号は，全遺物（土器，石器等）で通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
6　挿図の縮尺は，各図面に示した。
7　本書で用いたレベル数値は，国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。
8　発掘調査における図面の作成，写真の撮影は，各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は，有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
9　遺構実測図のトレースは，整理作業員の協力を得て吉井秀一郎・廣栄次が行った。
10　土器の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て廣栄次・橋口拓也が行った。
11　石器の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て廣栄次・橋口拓也が行った。
12　自然科学分析は，炭化物の放射性炭素年代測定を㈱加速器分析研究所に，炭化物の放射性炭素年代及び樹種同定を㈱パレオ・ラボに委託した。
13　遺物の写真撮影は，橋口拓也が行った。
14　本書の編集は，廣が担当し，執筆の分担は下記のとおりである。

第Ⅰ章	廣　栄次
第Ⅱ章	廣　栄次
第Ⅲ章	廣　栄次
第Ⅳ章	廣　栄次
第Ⅴ章	廣　栄次
第Ⅵ章	廣　栄次
第Ⅶ章第１・２節	廣　栄次
第３節	橋口　拓也
第Ⅷ章	廣　栄次
第Ⅸ章	廣　栄次
図　版	橋口　拓也

15　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，前畑遺跡の遺物注記の略号は「ＭＨ」である。



前畑遺跡位置図（S＝1／25,000）

本　文　目　次

巻頭図版
序文
報告書抄録
例言
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過　1
　第１節　調査に至るまでの経過　1
　第２節　調査の組織　1
　第３節　調査の経過　2
　第４節　報告書作成業務の経過　3
　第５節　発掘調査と報告書作成業務の従事者　4
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境　5
　第１節　地理的環境　5
　第２節　歴史的環境　5
第Ⅲ章　調査の概要　9
　第１節　発掘調査の方法　9
　第２節　整理作業の概要　10
　第３節　層位　10
第Ⅳ章　縄文時代早期（Ⅹ層）の調査　15
　第１節　調査の概要　15
　第２節　遺構　16
　第３節　出土遺物　20
第Ⅴ章　弥生時代中期後葉（Ⅲ層）の調査　32
　第１節　調査の概要　33
　第２節　遺構　33
　第３節　遺物　39
第Ⅵ章　中世（Ⅱ層）の調査　51
　第１節　概要　51
　第２節　遺構　51
第Ⅶ章　近世以降（Ⅱ・Ⅰｃ層）の調査　53
　第１節　概要　54
　第２節　遺構　54
　第３節　出土遺物　57
第Ⅷ章　科学分析　66
　第１節　放射性炭素年代測定結果報告書　66
　第２節　炭化材の樹種同定　69
第Ⅸ章　発掘調査のまとめ　70
　第１節　縄文時代について　70
　第２節　弥生時代　71
　第３節　中世　72
　第４節　近世以降　72
　あとがき

挿　図　目　次

図１　肝属川及びその他河川と台地群　5
図２　周辺遺跡位置図　8
図３　土層断面図⑴　12
図４　土層断面図⑵　13
図５　調査範囲とグリッド配置図　14
図６　Ⅹ層遺構配置図及び遺物出土状況図　15
図７　集石遺構１・２号実測図　17
図８　集石遺構３～６号実測図　18
図９　集石遺構３・４・６号出土遺物実測図　19
図10　Ⅹ層土器実測図⑴　22
図11　Ⅹ層土器実測図⑵　23
図12　Ⅹ層土器実測図⑶　24
図13　Ⅹ層石器実測図⑴　27
図14　Ⅹ層石器実測図⑵　28
図15　Ⅹ層石器実測図⑶　29
図16　Ⅹ層石器実測図⑷　30
図17　Ⅲ層遺構配置図及び遺物出土状況図　32
図18　Ⅲ層竪穴住居跡実測図　34
図19　Ⅲ層竪穴住居跡遺物出土状況図　35
図20　Ⅲ層竪穴住居跡炭化材出土状況図　35
図21　Ⅲ層竪穴住居跡内出土遺物実測図⑴　36
図22　Ⅲ層竪穴住居跡内出土遺物実測図⑵　37
図23　Ⅲ層土坑実測図　38
図24　Ⅲ層掘立柱建物跡実測図　39
図25　Ⅲ層土器実測図⑴　41
図26　Ⅲ層土器実測図⑵　42
図27　Ⅲ層土器実測図⑶　43
図28　Ⅲ層土器・土製品実測図⑷　44
図29　Ⅲ層石器実測図　48
図30　Ⅱ層遺構配置図　51
図31　Ⅱ層溝状遺構実測図　52
図32　Ⅱ層土坑実測図　52
図33　Ⅰｃ層遺構配置図　53
図34　Ⅰｃ層溝状遺構等実測図　55
図35　Ⅰｃ層溝状遺構内出土遺物実測図　55
図36　Ⅰｃ層溝状遺構６～８号実測図　56
図37　Ⅰｃ層堅坑実測図　56
図38　弾頭・薬莢模式図　58

図39　Ｉｃ層弾頭・薬莢実測図　59
図40　Ｉｃ層掩体壕内出土ガラス製品実測図⑴　60
図41　Ｉｃ層掩体壕内出土ガラス製品実測図⑵　62
図42　Ｉｃ層掩体壕内出土統制食器実測図⑴　63
図43　Ｉｃ層掩体壕内出土統制食器実測図⑵　64

表　目　次

表１　周辺遺跡一覧　7
表２　大浦･郷之原地区の基本的層序と前畑遺跡の層位　10
表３　Ｘ層集石遺構出土土器観察表　31
表４　Ｘ層出土土器観察表　31
表５　Ｘ層出土石器観察表　31
表６　Ⅲ層掘立柱建物跡一覧表　38
表７　Ⅲ層甕形土器口縁部形態分類表　40
表８　Ⅲ層竪穴住居跡出土土器観察表　49
表９　Ⅲ層竪穴住居跡出土石器観察表　49
表10　Ⅲ層土器観察表　50
表11　Ⅲ層石器観察表　50
表12　Ｉｃ層弾頭・薬莢観察表　65
表13　Ｉｃ層掩体壕内出土ガラス製品観察表　65
表14　Ｉｃ層掩体壕内出土統制食器観察表　65
表15　ＢＰ年代および炭素の同位体比　67
表16　暦年較正用年代　67
表17　測定資料及び処理　68
表18　放射性炭素年代及び暦年較正の結果　68
表19　暦年較正結果　68
表20　出土炭化材の樹種同定結果　69

図　版　目　次

写真図版１　前畑遺跡現場写真１～８　75
写真図版２　Ｘ層集石遺構３・４・６号出土遺物　76
Ｘ層出土土器⑴　76
写真図版３　Ｘ層出土土器⑵　77
写真図版４　Ｘ層出土石器⑴　78
写真図版５　Ｘ層出土石器⑵　79
写真図版６　Ｘ層出土石器⑶　80
写真図版７　Ⅲ層竪穴住居跡内出土土器　81
写真図版８　Ⅲ層竪穴住居跡内出土石器　82
Ⅲ層出土石器⑴　82
写真図版９　Ⅲ層出土土器⑵　83
写真図版10　Ⅲ層出土土器⑶　84
写真図版11　Ⅲ層出土石器　85
写真図版12　Ｉｃ層出土弾頭・薬莢　86
写真図版13　Ｘ・Ⅲ・Ｉｃ層出土遺物　87
写真図版14　Ｉｃ層出土ガラス製品・統制食器　88

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局大隅工事事務所（平成13年１月の中央省庁再編により国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所）は「一般国道220号鹿屋バイパス建設事業」の計画に基づいて，鹿屋市に計画した道路拡幅建設工事に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度から文化財課）に照会した。昭和59年４月の文化課による分布調査の結果を受けて，大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会で協議し，昭和60年４月22日～５月25日に文化課が確認調査を実施した。その結果，予定地において約1,600㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認され，昭和62年６月19日～昭和63年３月９日，昭和63年４月19日～９月２日の２回にわたって，前畑遺跡の確認調査及び一部の本調査を行った。昭和63年度に整理作業，平成元年度には報告書を作成した。鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）は平成17年３月にバイパス拡幅工事に伴う計画路線の分布調査を実施し，事業区内まで遺跡が広がることが判明した。その後，大隅河川国道事務所，文化財課，埋文センターの３者で協議を行い，４車線化に伴う拡幅部分を発掘調査する運びとなった。本遺跡の調査は平成17年５月23日～平成17年10月28日及び平成19年９月３日～平成19年10月26日に実施した。

整理作業は，平成17年度発掘調査分については，同年11月～翌年３月まで実施し，平成19年度発掘調査分の整理及び報告書作成作業については平成20年４月～同年７月に実施した。

第２節　調査の組織

⑴　平成17年度　発掘調査体制

事業主体者	国土交通省大隅河川国道事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	上今常雄
		次長兼総務課長	有川昭人
		次長兼調査第一課長	新東晃一
		調査第二課長	立神次郎
調査・企画担当者		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修
		主任文化財主事	繁昌正幸
調査担当者		文化財主事	吉井秀一郎
		〃	元田順子
調査事務担当者		主幹兼総務係長	平野浩二

⑵　平成19年度　発掘調査体制

事業主体者	国土交通省大隅河川国道事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原景信
		次長兼総務課長	平山　章
		次長	新東晃一
		調査第二課長	立神次郎
調査・企画担当者		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修

調査担当者	主任文化財主事	宮田栄二
	文化財主事	野間口勇
	文化財主事	廣栄次

⑶　平成20年度　整理・報告書作成体制

事業主体者	国土交通省大隅河川国道事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原景信
		次長兼総務課長	平山章
		次長	池畑耕一
		調査第二課長	彌榮久志
		主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	冨田逸郎
作成担当者		文化財主事	廣栄次
		文化財調査員	橋口拓也

第３節　調査の経過

調査の経過については，調査日誌をもとに主な出来事を月単位で記載した。

⑴　平成17年度

平成17年５月23日～同年10月28日（実働75日間）

＜５月＞

発掘作業開始（道具搬入，C－４～７区　表土剥ぎ）。C－４～10区Ⅰ～Ⅹ層掘り下げ。C－９・10区表土剥ぎ・Ⅰ～Ⅲ層掘り下げ。C－４～７区Ⅵ・Ⅹ層平板実測・遺物取上げ。

＜６月＞

C－４～７・９・10区Ⅲ～Ⅹ層掘り下げ。C－12・13区整地・表土剥ぎ。C－９・10区Ⅲ層平板実測・遺物取上げ・Ⅹ～Ⅺ層掘り下げ・Ⅹ層遺物出土状況写真撮影・遺物取上げ・平板実測・Ⅹ層検出集積写真撮影。C－12・13区Ⅰ～Ⅹ層掘り下げ・Ⅹ層遺物出土状況写真撮影・平板実測・遺物取上げ。C－14・15区表土剥ぎ・Ⅰ～Ⅹ層掘り下げ。C－４～７区Ⅹ層遺物出土状況写真撮影。C－４～７区平板実測・遺物取上げ・Ⅹ～Ⅻ層掘り下げ。C－12区Ⅵ層上面溝状遺構検出・検出状況写真撮影・平板実測・Ⅴ層上面溝状遺構検出。C－13区Ⅵ層平板実測・遺物取上げ・Ⅹ層掘り下げ・遺物取上げ・平板実測。C－17区表土剥ぎ。C－15区Ⅹ層出土山形押型文土器写真撮影。C－６・７区Ⅻ・ⅩⅢ層掘り下げ・遺物出土状況写真撮影・土層断面実測。C－９区Ⅹ層掘り下げ・遺物取上げ・平板実測。C－10区Ⅹ層遺物取上げ・平板実測。C－16～22区表土剥ぎ・Ⅰ層掘り下げ。C－12区Ⅴ層検出溝状遺構・C－14・15区Ⅹ層遺物出土状況写真撮影，平板実測・遺物取上げ。C－13～15区Ⅹ層遺物取上げ・トレンチ位置図平板実測・掘り下げ。C－16・17区Ⅰ～Ⅲ層掘り下げ・Ⅲ層溝状遺構検出。C－24・25区トレンチ設定・表土剥ぎ。C－13・14区・C－14Ｔ・C－15Ｔ Ⅹ～Ⅻ層掘り下げ・Ⅹ層出土状況平板実測・遺物取上げ。C－16～19・C－18Ｔ・C－19Ｔ Ⅰ～Ⅲ層掘り下げ・平板実測。C－21Ｔ・22Ｔ・23・24・24Ｔ・C－25Ｔ Ⅰ～Ⅵ層掘り下げ。C－16区硬化面平板実測・写真撮影。C－19区土坑（近世墓？）検出。

＜７月＞

C－13・14区Ⅻ層掘り下げ。C－18～20区Ⅲ～Ⅵ層掘り下げ。C－21・22区Ⅲ・Ⅴ層掘り下げ・竪穴状遺構検出・遺物取上げ・平板実測・写真撮影。C－23～25区Ⅰ・Ⅵ層掘り下げ・平板実測・遺物取上げ。C－20区Ⅵ層平板実測・遺物取上げ。C－19区近世遺構Ⅴ層上面検出・炭化木検出状況・Ⅲ層平板実測・遺物取上げ。

＜８月＞

C－14～15区Ⅰｃ層掘り下げ。C－12・13区Ⅲ層掘り下げ。C－18～20区Ⅰ～Ⅵ層掘り下げ・平板実測・遺物取上げ・遺物出土状況写真撮影・掘立柱建物跡検出・Ⅲ層（弥生時代）土坑及び掘立柱建物跡検出・写真撮影・Ⅰ層円形土坑検出及び写真撮影・平板実測・遺構実測・Ⅵ層上面コンター図作成。C

－９区土層断面実測・Ⅲ層掘り下げ。C－９・10区Ⅲ～Ⅹ層掘り下げ。C－11～15区Ⅰ～Ⅷ層掘り下げ・掩体壕溝跡及び外壕写真撮影及び掘り下げ・平板実測。C－15区溝状遺構検出。C－16・17区Ⅰ層掘り下げ・古道検出・掩体壕旧道跡検出・掩体壕外壕掘り下げ・写真撮影。C－４～８区Ⅰ～Ⅶ層掘り下げ。

＜９月＞

C－９・10区Ⅹ層掘り下げ・集石実測・集石写真撮影・平板実測。C－11～15区Ⅷ・Ⅹ層掘り下げ・集石検出・集石実測・遺物出土状況写真撮影・平板実測・遺物取上げ。C－12区溝状遺構実測。C－16・17区Ⅰ層掩体壕実測・写真撮影・Ⅲ層遺物取上げ・ピット検出・平板実測・Ⅵ層掘り下げ・土坑検出・土坑写真撮影。C－18～20区Ⅲ層掘り下げ・平板実測・遺物取上げ・土坑検出。C－19区土坑検出状況写真撮影・土坑実測。C－４～８区Ⅷ・Ⅹ層掘り下げ・写真撮影・平板実測・遺物取上げ。

＜10月＞

C－４区Ⅰ層掘り下げ・誘導路溝検出・写真撮影・掘り下げ・竪抗掘り下げ・竪抗写真撮影・土層断面実測及び写真撮影・Ⅲ層掘り下げ。C－４・５区Ⅷ層・Ⅹ層掘り下げ。C－９・10区Ⅷ層掘り下げ・集石実測・Ⅹ層掘り下げ・写真撮影・Ⅹ層集石実測。C－11～15区Ⅷ層掘り下げ・写真撮影・集石実測。C－５区Ⅹ層掘り下げ・写真撮影・Ⅹ層集石実測。C－13・14区Ⅹ層平板実測。C－14・15区Ⅺ層上面コンター図作成。C－16・17区ピット写真撮影・実測。C－９～12区Ⅹ層集石実測。

⑵　平成19年度

平成19年９月３日～同年10月26日（実働30日間）

＜９月＞

発掘作業開始（道具搬入・C－18～20区表土剥ぎ）。C－18～20区Ⅱ～Ⅺ層掘り下げ。C－20～22区Ⅰｃ層掘り下げ。C－23～26区Ⅰｂ・Ⅰｃ～Ⅲ・Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。C－18･20区Ⅵ層コンター図作成。C－18～20区北側・西側土層断面実測。C－24区Ⅲ層上面大型土坑遺構検出・写真撮影・遺構掘り下げ。

＜10月＞

C－18区Ⅶ～Ⅻ層掘り下げ・完掘状況写真撮影。C－21・22区Ⅰｃ～Ⅻ層掘り下げ・遺物取上げ・平板実測・遺物出土状況写真撮影・Ⅶ層上面コンター図作成。C－24区大型土坑掘り下げ・遺構内遺物取上げ・実測。C－25区Ⅶ～Ⅻ層掘り下げ。C－18・19区北側・西側土層断面実測・写真撮影。C－21・22区竪穴住居跡検出・遺物取上げ・平板実測・写真撮影・実測。C－23・24区Ⅵ・Ⅷ～Ⅻ層掘り下げ・コンター図作成。C－21区土坑検出・写真撮影・掘り下げ・実測。C－23～25区Ⅶ層上面及びⅫ層上面コンター図作成。C－21・22区Ⅶ層上面及びⅨ層上面コンター図作成。C－21～25区南側及び西側土倉断面実測。荷出し・現場終了。

第４節　報告書作成業務の経過

発掘調査報告書作成業務は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで平成17年11月～平成18年３月，平成19年３月～平成20年７月に実施した。月毎の作業工程は，以下に示すとおりである。

⑴　平成17年度

＜11月＞

土器・石器洗い。注記。

＜12月＞

土器接合。

＜１月＞

図面整理。遺構位置図作成。土器等拓本。

＜３月＞

遺構図面トレース。

⑵　平成19年度

＜３月＞

土器・石器洗い。注記。接合。

⑶　平成20年度

＜４月＞

土器実測。遺構トレース。

＜５月＞

土器実測。土器復元。石器実測。石器トレース。

＜６月＞

土器実測。土器トレース。土器拓本石器実測。石

器トレース。レイアウト。原稿執筆。
＜７月＞
　レイアウト。遺物写真撮影。原稿執筆。遺物・図面整理及び収納。
＜８月＞
　入札，文章校正
＜９・10・11月＞
　文章校正

第５節　発掘調査と報告書作成業務の従事者

　平成17年度・19年度発掘調査従事者及び平成17年度・平成20年度整理・報告書作成業務従事者は以下に示すとおりである。なお，敬称は略して記してある。
　幾多の御協力を頂き，改めて感謝申し上げます。
⑴　平成17年度発掘調査従事者
荒川リツ子，有村幸次，内田忠則，尾迫和幸，面高時紀，川井田祐子，川野喜興美，川原時夫，熊迫正弘，兒島治，佐々木イツ子，芝原ツミ子，下村シヅ子，鈴木しまよ，武元正子，谷本一美，富松フキ，中塩屋貞男，長濱邦弘，那須みづえ，西門純行，西ノ原ムツ，橋口スエ子，浜谷敬子，東孝二，東中ムツ子，久永六雄，比地黒美千代，前原百合子，松崎クミ子，宮田順子，八木聡，吉元春義，脇健一
⑵　平成19年度発掘調査従事者
荒川リツ子，荒平明美，有村幸次，内田忠則，内山紘一郎，榎本重利，大久保盛男，大須一善，尾迫和幸，尾迫信義，鎌田道徳，川原時夫，熊迫正弘，藏ヶ﨑勝昭，兒島治，小薗サエ子，小谷ミエ子，芝原ツミ子，清水正治，白濵康子，立本みすず，中塩屋貞男，西小野佳子，西門キミ子，西薗良子，西薗律子，枦山スミ，東孝二，久永六雄，船間修市，松ヶ迫祐一，了徳寺信一，脇健一
⑶　平成17年度整理・報告書作成業務従事者
岩下亮子，児玉さつ子，小薗裕子，中住まゆみ，西村律子，野間尚美
⑷　平成20年度整理・報告書作成業務従事者
蔵元真奈美，瀬戸口良子，福満喜久子，岩下亮子，末原涼子，竹之下ハルミ，野間尚美
　なお，本調査から報告書作成に至るまで多くの方々の御指導・御教示を頂いた。この場を借りて感謝申し上げたい。
新東晃一氏，中園聡氏，小林哲夫氏

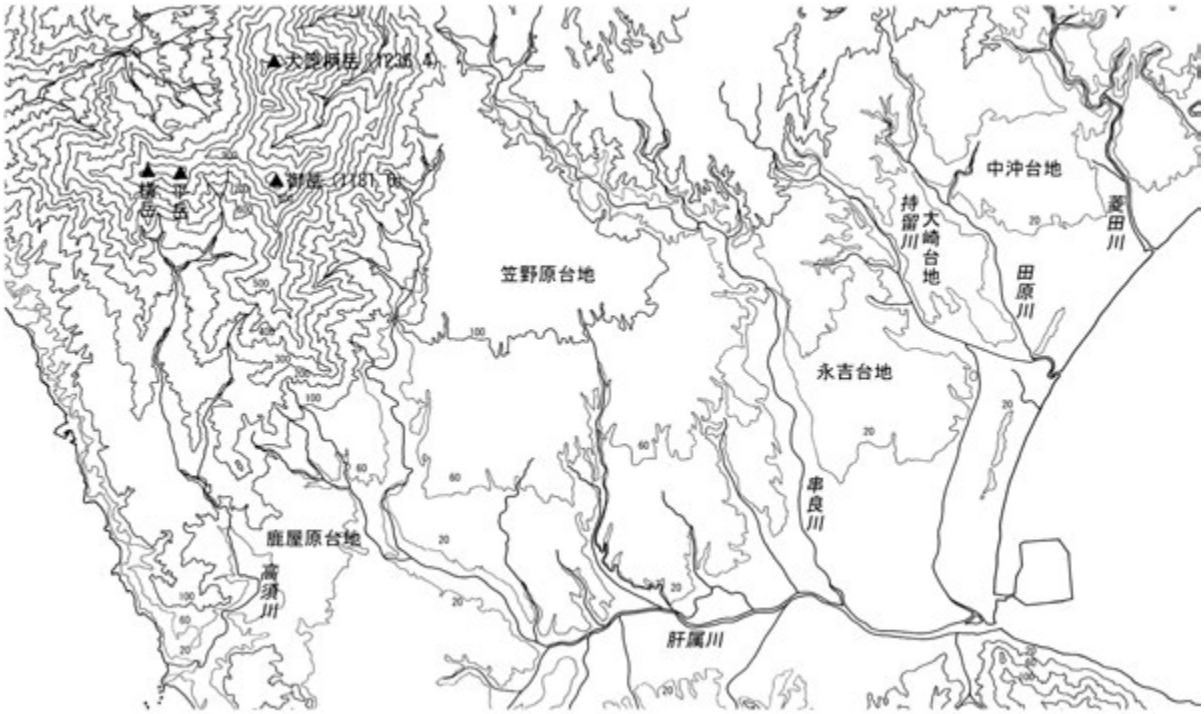
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

前畑遺跡のある鹿屋市は，大隅半島の中央部に位置し，人口10.6万人を擁し，大隅半島の政治・経済・産業・交通・文化の中心的役割を担っている。

本遺跡は，鹿屋市郷之原町前畑に所在し（第１図），大箆柄（おおのがら）岳（1,236m）を最高峰とし，御岳（権現岳：1,181m）など南北を主脈とする高隈山地の裾野から南へ延びる標高70m程度のシラス台地（鹿屋原台地）上に位置する。台地の面積は約24㎢である。台地上は北西側に位置する郷之原付近から南東に向かって緩やかに傾斜している。現在の郷之原町は平坦で，宅地や畑地が広がるが，戦前・戦中の旧日本海軍鹿屋航空基地及びその関連施設の整備や昭和40年に始まる土地基盤整備事業等の造成以前は，２～３ｍの小さな谷が連続した地形であった。また，高隈山地を源流とする高須川まで直線距離1.5㎞，肝属川支流まで直線距離で約0.5㎞と水に恵まれた場所に所在する。

地質について触れると，本遺跡を含む鹿屋市は，四万十層群の堆積岩，及びそれに貫入する高隈山花崗岩（第三紀中新世）で構成される。花崗岩体の貫入を受けた堆積岩は熱変成作用を受けてホルンフェルス化している。



第１図　肝属川及びその他河川と台地群

第２節　歴史的環境

１　旧石器時代

西丸尾遺跡・榎木崎Ｂ遺跡では，ナイフ型石器文化期・細石刃文化期の遺構・遺物が検出され，榎木崎Ａ遺跡・中野西遺跡・木屋堀遺跡は細石刃文化期のみ確認されている。

２　縄文時代

草創期では，伊敷遺跡で隆帯文土器と石斧が，上楠原遺跡では貝殻文土器及び無文土器が，中野西遺跡で無紋土器がそれぞれ出土している。西丸尾遺跡でも遺構・遺物が検出されている。山ノ上Ｂ遺跡では落し穴が確認されている。

早期では，中野西遺跡で岩本式土器の類似土器が，榎木崎遺跡・西丸尾遺跡・上楠原遺跡では前平式土器及び手向山式類似の押型文土器，塞ノ神式土器及び集石が確認されている。岡泉遺跡では前平式土器

と山形押型文が，岩之上遺跡・野里小西遺跡で石坂式・吉田式土器と集石が確認されている。打馬平原遺跡では土坑の６基，集石27基と前平式・吉田式・石坂式・押型文土器・塞ノ神式や環状石斧等が出土している。谷平遺跡や松の岡遺跡では集石や土坑等の遺構に，桑ノ丸式土器・辻タイプ・石坂式・下剥峰式土器等が出土している。前畑遺跡では多くの集石遺構とともに押型文土器・平栫式・塞ノ神式が出土した。石仏頭遺跡では吉田式・平栫式土器が出土している。

前期では，神野牧遺跡・榎木田下遺跡・中ノ原遺跡・榎木原遺跡・中野西遺跡・松山田西遺跡で，集石の遺構に曽畑式・轟式系統の土器が出土している。

中期では，榎木原遺跡・飯盛ヶ岡遺跡で春日式・阿高式土器が，神野牧遺跡で深浦式が，中野西遺跡・松山田西遺跡では船本式・春日式土器が出土している。

後期では，榎木田下遺跡で市来式土器が，中ノ原遺跡で指宿式・市来式・西平式土器が，榎木原遺跡では岩崎上層式・市来式土器等が，鎮守ヶ迫遺跡では指宿式土器が出土している。他には柴立・小薄遺跡でも後期の遺物が，山之頭迫遺跡では古道が検出されている。

晩期では，丸岡・水ノ谷・宮の脇遺跡，榎木原遺跡・中ノ原遺跡・中原山野遺跡・松山田西遺跡等が挙げられる。水ノ谷遺跡では上加世田式土器の時期に比定される６基の円形竪穴住居跡や黒川式土器に伴う孔列文土器等が報告されている。榎木原遺跡・立神遺跡で入佐式土器・黒川式土器が，中ノ原遺跡では入佐式土器等が，谷平遺跡では突帯文系土器が出土している。

３　弥生時代

弥生時代では，榎木原遺跡・水ノ谷遺跡では板付Ⅱ式や亀ノ甲式の甕，榎木原遺跡では西瀬戸内の影響を思わせる縦位突帯を持つ壺などが注目される。王子遺跡は中期末から後期初頭の竪穴住居跡や掘立柱建物跡等大集落地として知られる。石仏頭遺跡でも竪穴住居跡と柱穴が，中ノ原遺跡・前畑遺跡では竪穴住居跡や掘立柱建物跡に加え，円形周溝跡が検出されている。下牧遺跡では前期と中期中葉～後期前半の遺物が大量に出土し，高付遺跡では中期から古墳時代にかけての河内・瀬戸・東九州地方の影響をうかがわせる資料が出土している。

４　古墳時代

西祓川町の円墳３基と短甲と衝角付冑が出土した地下式横穴，野里町の円墳３基，岡泉Ｂ遺跡の円墳３基，大浦町の地下式横穴，中野西遺跡では土壙墓２基が検出され，短刀と鉄鏃が出土している。生活遺跡としては，早山・宮の脇遺跡・上原遺跡・狩俣遺跡・鶴羽遺跡・立神遺跡・小野原Ａ－Ｂ遺跡・鹿屋城址・岡泉遺跡・松山田西遺跡等が挙げられる。小野原Ａ遺跡では竪穴住居跡や古道が，松山田西遺跡では竈のある竪穴住居跡が検出されている。

５　古代

日本書紀によると和銅３年（710年）に日向国の隼人，曾君細麻呂に外従五位下を授けるとの記録があり，さらに和銅６年（713年）大隅国が設置される。養老４年（720年）に隼人の叛乱があり，また天平12年（740年）に藤原広嗣の乱にも隼人が参加しているが，このような数度の抵抗を経ながら，やがて大隅地方を含む南九州は律令政治に組み込まれていく。

平安時代では，飯盛ヶ岡遺跡・榎崎Ａ－Ｂ遺跡，宮の脇遺跡等が挙げられる。宮の脇遺跡では，青銅製の帯金具が出土し，古代官位制を示す貴重な資料として注目される。立神遺跡では墨書土器が数点出土している。

６　中世

中世の大隅半島は肝付氏や，肝付氏を本家とする鹿屋氏のほか祢寝氏，富山氏，大姶良氏，平岡氏等が割拠する。現在の鹿屋市の中央部に位置する鹿屋院は，肝付一族の萩原氏が，続いて鹿屋氏が治めている。

室町時代の大隅半島は下大隅郡・鹿屋院・串良

院・肝付郡・祢寝院・吾平荘に分かれているが，天正年間までに島津氏によって統一される。中世の山城として鷹栖城跡・亀鶴城跡・大姶良城跡・横山城跡・獅子目城跡・西俣城跡・松尾城跡等が知られる。

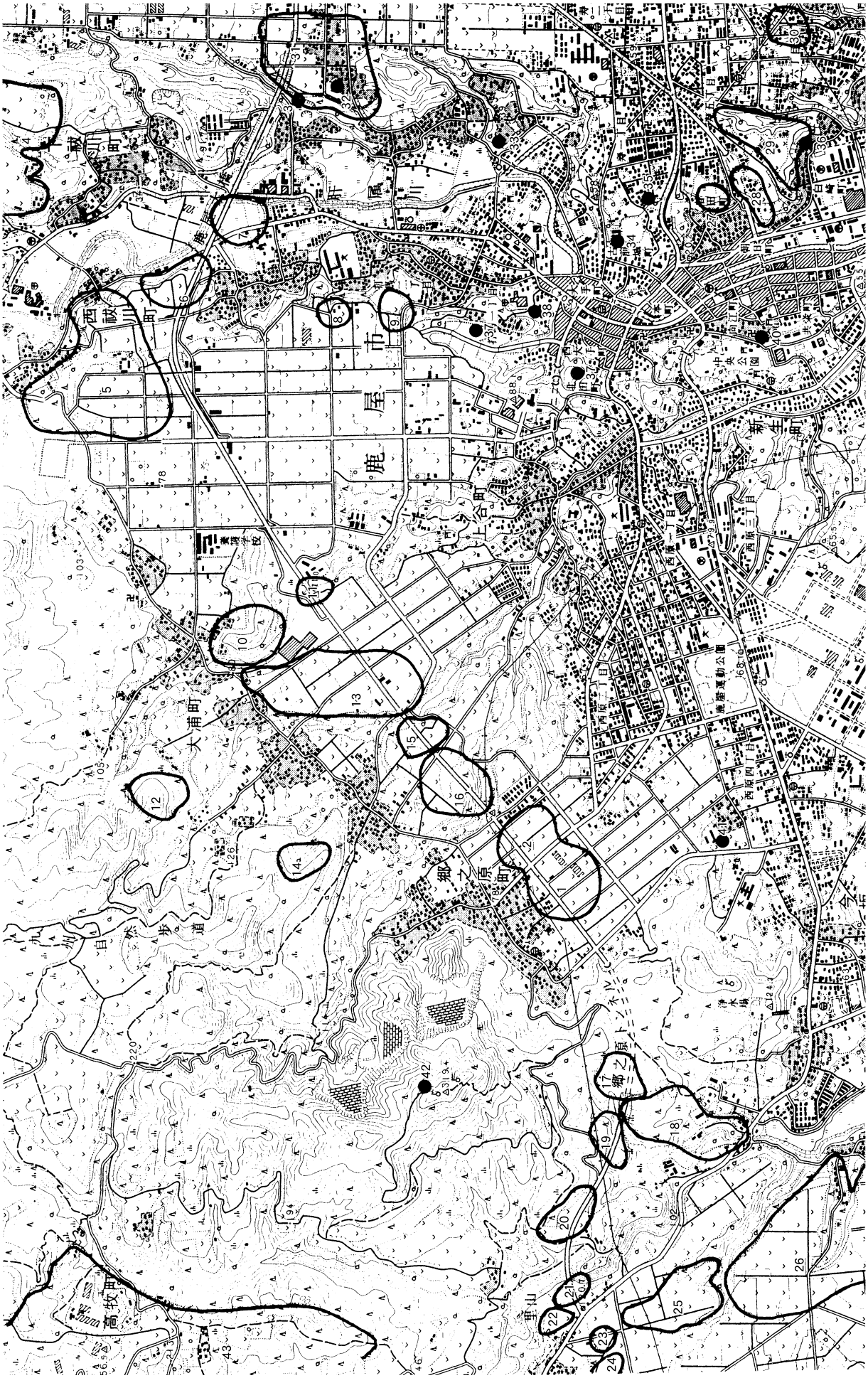
立神遺跡・西祓川遺跡では青磁や白磁が出土し，中ノ原遺跡では中世から近世にかけて，中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡では近世の遺構・遺物が検出されている。

7　近代

鹿屋市には，南九州最大の鹿屋海軍基地が置かれ，特攻隊の出撃基地として知られる。中原山野遺跡や前畑遺跡では，掩体壕跡・誘導路跡及び溝跡等の戦跡遺構が検出されている。

表１　周辺遺跡一覧

	遺跡名	所在地（鹿屋市）	地形	時　代	遺構・遺物	備　考	データベース番号
1	前畑	郷之原町前畑	台地	縄文，弥生，古墳，近世，近代(戦跡)		県埋文報(52)，市埋文報(18)(25)(36)	12-129-0
2	中原山野	郷之原町中原山野	台地	縄文(早，晩)，弥生，古墳，近代(戦跡)		県埋文報(52)，市埋文報(45)	12-128-0
3	王子	王子町王子	台地	縄文，弥生(中)	土器片，中期集落跡	県埋文報(13)(34)，市埋文報(29)(48)(67)	12-25-0
4	堀之牧遺跡群	祓川町堀之牧	台地	弥生(中)，古墳		県埋文報(23)	12-60-0
5	神野牧	西祓川町神野牧	台地	縄文，弥生	石器，石匙，土器片	県埋文報(20)(23)，市埋文報(14)	12-35-0
6	薬師堂の古墳	下中原前	台地	弥生(後)，古墳	円墳３基	別名「薬師堂」，県埋文報(34)	12-90-0
7	西祓川	西祓川町	低地	縄文，弥生，古墳，歴史	土器片	県埋文報(25)(34)，市埋文報(23)	12-65-0
8	打馬	打馬町	台地	古墳	土器片	県埋文報(23)	12-36-0
9	平原古墳	打馬町平原	台地	古墳	墓石５基，五輪塔１基	県埋文報(23)	12-37-0
10	大浦	大浦町	台地	縄文	地下式横穴，縄文土器	県埋文報(23)(48)，市埋文報(16)	12-38-0
11	榎田下	大浦町榎田下	台地	縄文(早，後)		県埋文報(48)	12-125-0
12	耳取ヶ丘	大浦町耳取ヶ丘	傾斜地			県埋文報，市埋文報	12-92-0
13	中ノ原	大浦町中ノ原	台地	縄文，弥生，古墳		県埋文報(48)(51)(52)(102)，市埋文報(34)(35)(46)	12-126-0
14	郷之原	郷之原町	山麓	縄文，古墳	土器片，石器	県埋文報(23)	12-39-0
15	中ノ丸	大浦町中ノ丸	台地	縄文，弥生，歴史		県埋文報(48)(102)	12-127-0
16	川ノ上	大浦町松橋川の上	独立丘陵	古墳	土器片	県埋文報(23)(48)	12-40-0
17	飯盛ヶ丘	上野町飯盛ヶ丘	台地	縄文，弥生，古墳，古代，近世		県埋文報(63)，県センター埋文報(3)	12-130-0
18	高橋	上野町	傾斜地	弥生，古墳	土器片	県埋文報(25)	12-77-0
19	榎崎A	郷之原町榎崎	台地	旧石器，縄文，弥生，古墳，歴史	細石刃，土抗墓	県埋文報(63)	12-131-0
20	榎崎B	郷之原町榎崎	台地	旧石器，縄文，弥生，古墳，古代		県埋文報(63)，県センター埋文報(4)，市埋文報(33)	12-132-0
21	西丸尾	白水町西丸尾	台地	旧石器，縄文，古墳，古代		県埋文報(64)	12-133-0
22	西丸尾B	白水町西丸尾	台地	旧石器，縄文，古墳，古代		県センター埋文報(９)	12-178-0
23	白水A	白水町	台地	古墳，歴史	成川式，土師器		12-135-0
24	萩ヶ峰A	白水町	台地	古墳，歴史	成川式，土師器		12-136-0
25	小野原A	小野原町	台地	縄文，弥生，古墳，歴史	土器片	県埋文報(25)，市埋文報(61)(65)(68)(70)	12-76-0
26	小野原B	小野原町	台地	古墳，歴史			12-171-0
27	曽田A	曽田町	台地	古墳		県埋文報(23)	12-66-0
28	曽田B	曽田町	台地	古墳	土器片	県埋文報(23)	12-67-0
29	白崎	白崎町	台地	古墳	土器片	県埋文報(23)	12-68-0
30	寿六丁目	寿六丁目	台地	古墳	土器片	県埋文報(24)	12-69-0
31	天神社跡	王子町		不詳			12-239-0
32	八幡神社跡	王子町		不詳		「鹿屋市史」	12-223-0
33	鹿屋元城跡	王子町山中	台地	中世(鎌倉～南北朝)		県埋文報(43)	12-176-0
34	古前城跡	古前城町	台地	中世(鎌倉中～南北朝)		県埋文報(43)	12-95-0
35	住吉神社跡	古前城町		不詳		「鹿屋市史」	12-224-0
36	白崎城跡	白崎町	台地	中世(南北朝～戦国)		県埋文報(43)	12-96-0
37	打馬平原	打馬町平原	台地	縄文(早・前)，近世		市埋文報(８)，土地造成のため消滅	12-166-0
38	豊岳山医王院富岡寺跡	打馬町		不詳		「鹿屋市史」	12-184-0
39	鹿屋城跡	北田町	台地	弥生，古墳，歴史		県埋文報(43)，市埋文報(50)(54)(57)	12-93-0
40	池上山安養寺跡	向江町		近世(安土桃山)(1597)		「鹿屋市史」	12-185-0
41	久恵城跡	西原四丁目	丘陵	中世(南北朝初～戦国)		県埋文報(43)	12-97-0
42	世井神社跡	郷之原町		創建天文23年(1554)		「鹿屋市史」	12-225-0
43	小薄町遺跡群(有武・小薄)	小薄町，有武町，高牧町	丘陵	縄文(早，前，後)，古墳		県埋文報(23)	12-41-0



第２図　周辺遺跡位置図（S＝1／25,000）

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　発掘調査の方法

発掘調査は，平成17年度には，５月から10月にかけて隣接する中原山野遺跡と合わせて行い，平成19年度は９月から10月の２か月間実施した。いずれも，一般国道220号鹿屋バイパスの４車線化工事に伴う拡幅部分（昭和62・63年度発掘調査部分の北側車線部分及び一部未発掘部分）での本調査である。

調査は，昭和62年度発掘調査時の設定グリッド（工事用センター杭№415と№420を基準とし，南北方向にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ～，東西方向に１・２・３～とする10m間隔の調査用区割り）に準じて行った。

年度毎における調査区の範囲について触れたい。平成17年度は，本調査区で最も東に位置するＣ－２区からＣ－17まで全面調査を行った。Ｃ－18・20区については，昭和62・63年度の拡張調査の残存箇所Ⅰ～Ⅲ層の調査を行った。Ｃ－21～25区については，歩道側（調査区北側）にトレンチを入れ下層確認を実施し，Ｃ－20・21区に弥生時代相当の竪穴住居跡を確認して終了した。平成17年度の発掘調査の結果を受けて，平成19年度はＣ－18～20区についてはⅣ層以下をＣ－21～26区についてはⅠc層以下の全面調査を実施した。これにより，弥生時代相当の遺構がＣ－21区に及ぶこと，遺物に関してはＣ－24区より西には広がらないことを確認して，発掘調査を終了した。

発掘調査の方法について具体的に述べていきたい。歩道側街路樹の植栽や車道側ガードレール・排水路の除去等の環境整備を実施した後，重機（バックホウ）によって表土や盛土を除去して発掘を進めた。また，沿線民家への進入路及び市道が調査区内を横切る箇所が一定間隔で存在するため，必要に応じて代替措置で仮設道路を設置して該当箇所の発掘を進めた。最上層に相当する表土及び盛土を重機で除去後は，以下のⅠc層（旧耕作土）～Ⅲ層（黒褐色土）～Ⅹ層（茶褐色土：縄文早期包含層）～Ⅻ層（茶褐色土：細石刃相当層）～XIII層（シラス二次堆積砂礫層）上面まで人力（山鍬・ジョレン・移植ゴテ等を利用）による手掘りで発掘を行った。排土については，進入路や市道で分断されている調査区毎に排土仮置き場を設け，バックホウでダンプカーにすくい上げる方法，若しくは，ベルトコンベアーを用いて直接ダンプカーに積載する方法にて，遠隔の排土置き場に運搬して処理をした。

表層（現耕作土）と差異が必ずしも明瞭ではないⅠc層（旧耕作土：戦跡遺構検出面）では，戦跡関連の遺構の検出・遺物取り上げを特に慎重に進めた。昭和62年発掘調査時に遺構・遺物が多数検出・出土したＣ－18～24区Ⅲ層上面では，今回の発掘においても遺物の出土が顕著であり，遺物の取り上げ後，慎重に遺構検出を実施した。検出した遺構については，写真撮影や図面作成を実施した。その後，下層の段階的な掘り下げを進めたが，特に昭和62年発掘調査で，弥生時代包含層とともに本遺跡の中心的包含層であることが明らかになったＣ－９～13区縄文早期相当層（Ⅹ層）においては，今回も多数の集石遺構及び夥しい散礫状況，遺物の出土が確認された。集石遺構については，集石遺構の実測図のほかに散礫状況を平板実測図に収めながら，遺物の取り上げ・調査状況写真撮影・コンタ作成・土層断面実測等行い，遺構・遺物包含の可能性のある最下層のXIII層（シラス二次堆積砂礫層）上面まで段階的に掘り下げを行った。ただし，発掘深度が地表面から２m超えた段階（Ｃ－18～26区Ⅵ層より下層の発掘調査）で，調査区壁面から２m控えて段掘りで調査を進めていったことを付記しておく。

発掘調査上の安全管理対策として，調査区が交通量の多いバイパスに隣接するために，バイパス側にガードレールを設置し，跳ね石防止策として，路面とガードレールの隙間を土嚢や寒冷紗で塞ぐ手段を講じた。調査区内の歩道は通学路でもあるので，調査区の周りに丸太杭を打ち込み，標識ロープで転落防止や侵入防止の安全対策をとり，小・中学校へは，事故防止の依頼をした。

第２節　整理作業の概要

前畑遺跡の発掘調査報告書に伴う整理作業については，平成17年度の発掘調査終了後の11月～３月に遺物の水洗い・注記作業・遺構位置図作成・土器拓本等を行い，平成20年３月に土器・石器洗い・注記・接合を実施した。平成20年の４月～７月にかけて本格的な整理作業及び報告書作成作業を実施した。

第３節　層位

前畑遺跡は高隈山の裾野のシラス台地上に位置し，その層位は比較安定した大浦・郷之原地区の基本的層序（前畑遺跡第一分冊「概要編」第Ⅲ章第１節）に準じている。しかし，上位の層，特にⅡ層（黒色土：中世相当層）については，戦前の鹿屋航空基地関連施設設置や戦後の土地基盤整備事業等により広範囲で削平を受け，残存層が薄い箇所が多分に見られる。前畑遺跡報告書（1990）[1]（以下（前畑遺跡1990）と呼称。）の指摘にあるように，大浦・郷之原地区の基本的層序と比較すると，欠落する相違や若干変容する層位がかなり見られるため，（前畑遺跡1990）に準じて，B－10・11区付近の層位を基準に説明していく。

第２表　大浦・郷之原地区の基本的層序と前畑遺跡の層位

Ⅰ層	a　表土（現耕作土） b　表土（盛土） c　表土（旧耕作土）	現代 農地整備 近世・近代
Ⅱ層	黒色土	中世
Ⅲ層	黒褐色土	弥生
Ⅳ層	a　黄白色土　軽石 b　黄茶褐色土　粘土	無遺物層
Ⅴ層	茶褐色土	縄文晩期
Ⅵ層	黄褐色土	縄文前期～後期
Ⅶ層	白色軽石	池田降下軽石
Ⅷ層	a　赤褐色土 b　黄橙色軽石	アカホヤ火山灰（鬼界カルデラ）
Ⅸ層	灰褐色土	権現山火山灰（？）
Ⅹ層	茶褐色土　粘質土	縄文早期
Ⅺ層	黄褐色軽石粒混暗褐色土	薩摩火山灰（桜島）
Ⅻ層	a　茶褐色土　砂壌土 b　茶褐色土　粘土 c d	
XIII層	淡黄白　砂礫	シラス（入戸火砕流二次堆積物）
XIV層	桃白色土	
XV層	灰白色土	シラス（入戸火砕流一次堆積物）

Ⅰb層は，盛土の他砂利やコンクリート塊が含まれ，戦後の農地整備事業時のものと推察される。Ⅰc層は，下層の黒色土に径１㎝弱の軽石が無数に混じり，近世～戦前・戦中の地層と考えられる。太平洋戦争等に関係する遺構・遺物や近世と思われる古道跡等が確認される層である。

Ⅱ層は，中世の包含層である。僅かに光沢のある黒色土で，場所により微細な軽石が含まれる。層厚は場所により大きく異なる。無遺物層であるが，古道跡が想定される溝状遺構や土坑が検出される。

Ⅲ層は，黒褐色土で，弥生時代の遺構・遺物が検出・出土している。なお，包含層中の炭化物１点の放射性炭素年代測定の暦年較正年代結果では，1380BC～1260BC（縄文時代後期後葉）の値が示された。しかし，この時代の遺構・遺物は確認されていない。

Ⅳ層は，直径約１㎝程度の黄白色の軽石下に黄茶褐色土が層を成す。（前畑遺跡1990）ではⅪ層（薩摩火山灰）の二次堆積の可能性が指摘されている。場所により堆積状況の差異が顕著である。

Ⅴ層は，茶褐色土である。６～９区で確認されるが，他の場所では削平を受けている。（前畑遺跡1990）では縄文晩期包含層と紹介されているが，本稿当該調査では弥生時代の遺物も確認されている。

Ⅵ層は，黄褐色土で固く締まったアカホヤ火山灰の二次堆積層である。下層部分ではⅦ層にあたる池田降下軽石が浮遊した状態で堆積している。

Ⅶ層は，池田降下軽石層に相当するが，層は成さず，灰色硬質の径１㎝程度のスコーリアが部分的に面を形成しているのが確認される[2]

Ⅷa層は，赤褐色土層で，アカホヤ火山灰二次堆積層である。

Ⅷb層は，黄橙色軽石層で，鬼界カルデラを起源とする火山灰（約6,400年前）一次堆積物である。場所によっては，ブロック状に確認される。通常，アカホヤ火山灰と呼称される。

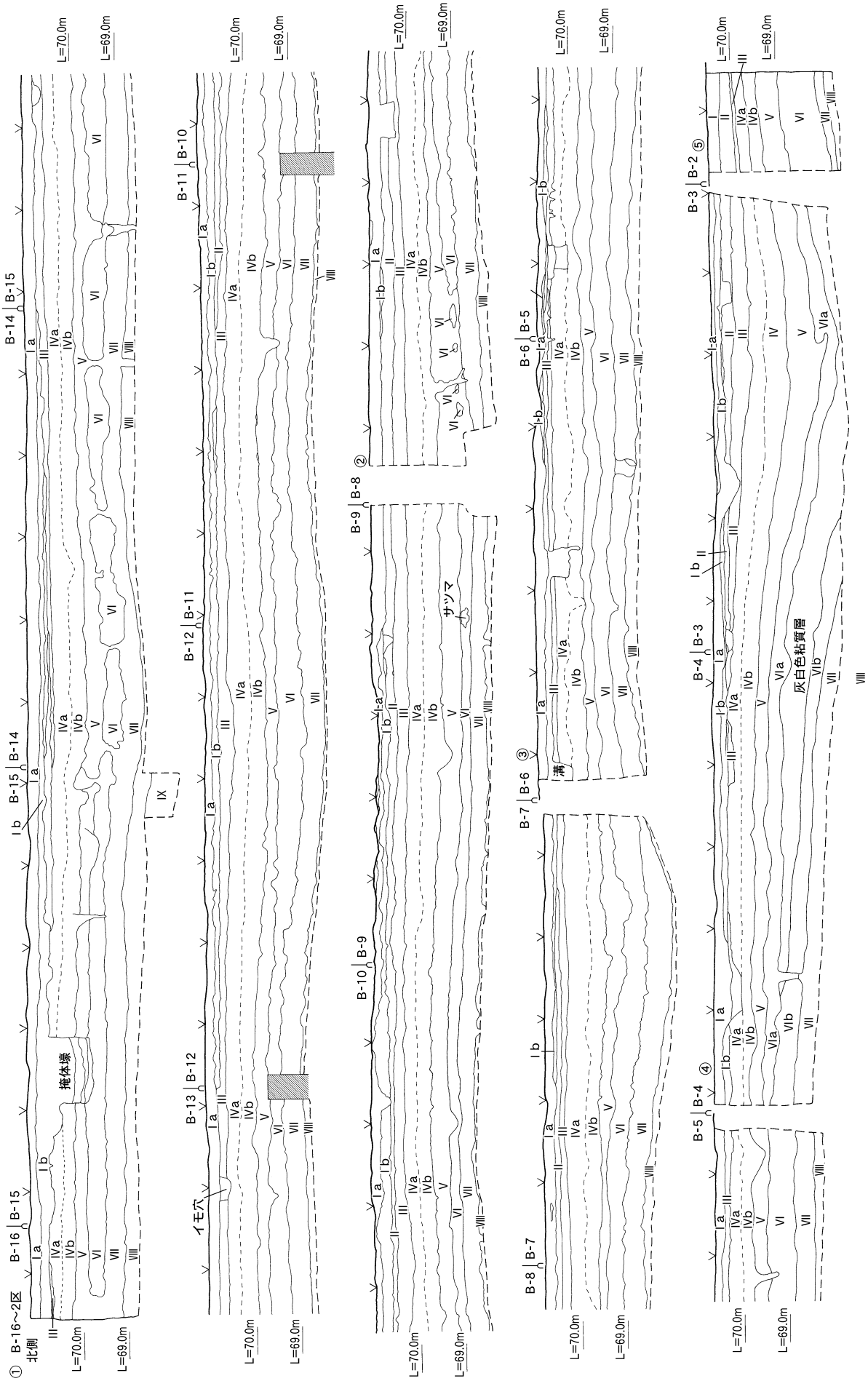
Ⅸ層は，灰褐色土で，（前畑遺跡1990）では権現山起原の火山灰の可能性が指摘されている。層位的には，権現山火山灰の堆積はⅪ層より下層であるが，本遺跡の北西方向に位置する高隈系山地の土砂崩れ等による二次堆積の可能性が想定されている。今回の調査区から検出されなかった。

Ⅹ層は，茶褐色粘質土層であり，縄文早期の包含層である。本遺跡では，縄文時代早期後葉相当の集石遺構及び遺物を中心に，極少数の条痕文系土器押型文土器も出土した。なお，集石遺構や土器・石器製品等が確認されない箇所でも，礫が散在していた。

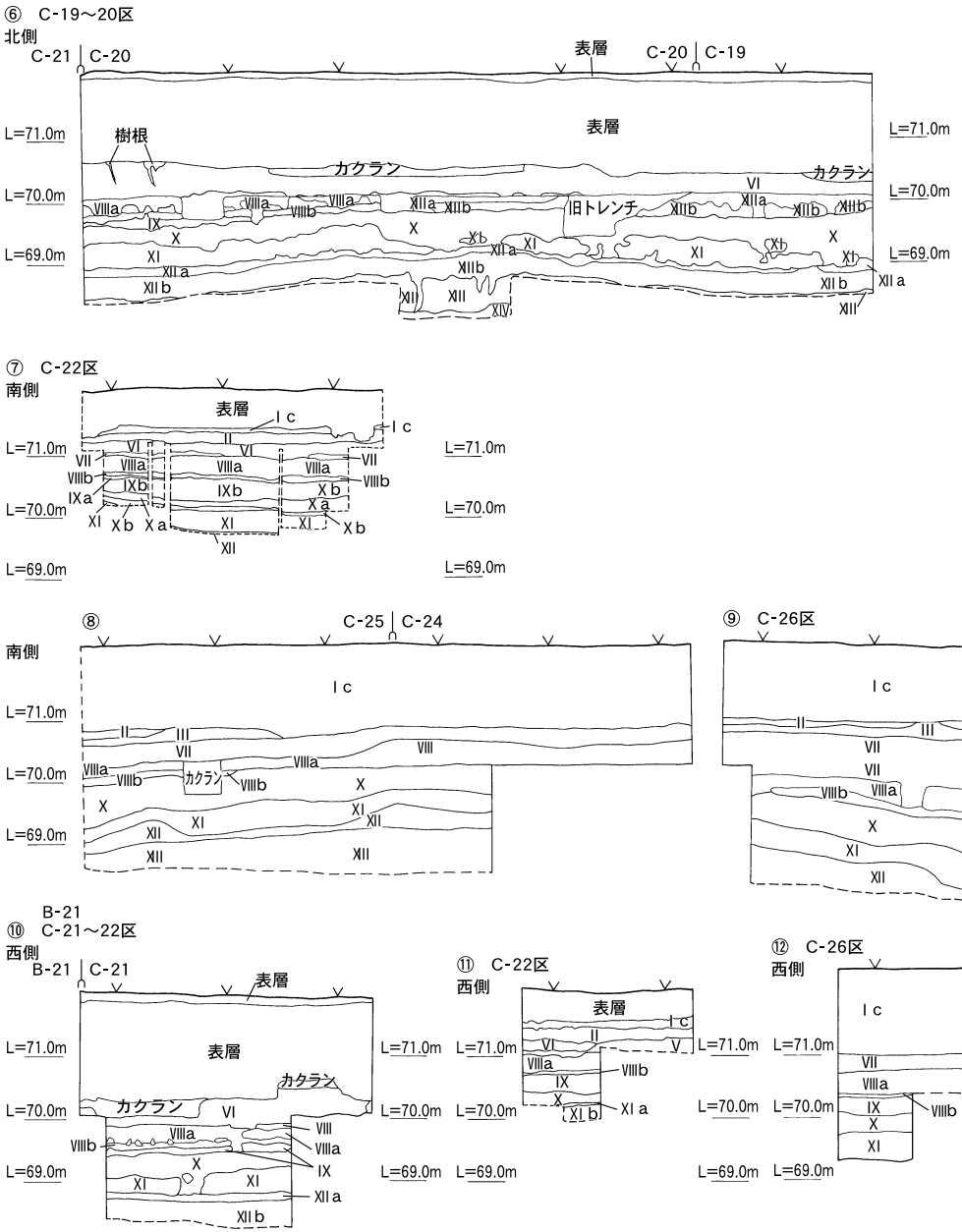
Ⅺ層は，直径１㎜程度の白色の粒を含む堅く締まった暗黒褐色土に，黄褐色軽石が混じる層である。軽石は薩摩火山灰（約11,500年前）に伴うものである。発掘区の一部では，この軽石層がブロック状に確認される。

Ⅻ層は，茶褐色の砂壌土及び粘土層である。一般的には細石器文化相当層であるが，本遺跡では細石器文化期は確認されていない。

XIII層は，淡黄白色の砂礫が層を成す。シラスの二次堆積層である。平成17年度及び19年度の調査では，本層までの発掘調査で終了した。


① B-16～2区
北側
B-16
B-15
B-14
B-13
B-12
B-11
B-10
B-9
B-8
B-7
B-6
B-5
B-4
B-3
B-2
②
③
④
⑤
L=70.0m
L=69.0m
掩体壕
イモ穴
サツマ
溝
灰白色粘質層
Ia
Ib
II
III
IVa
IVb
V
VI
VIa
VIb
VII
VIII
IX

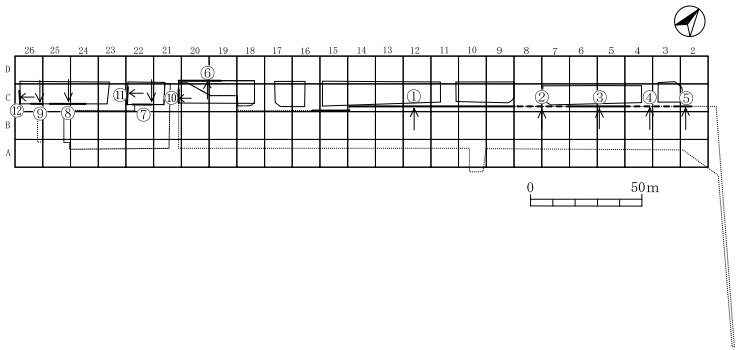
第３図　土層断面図(1)

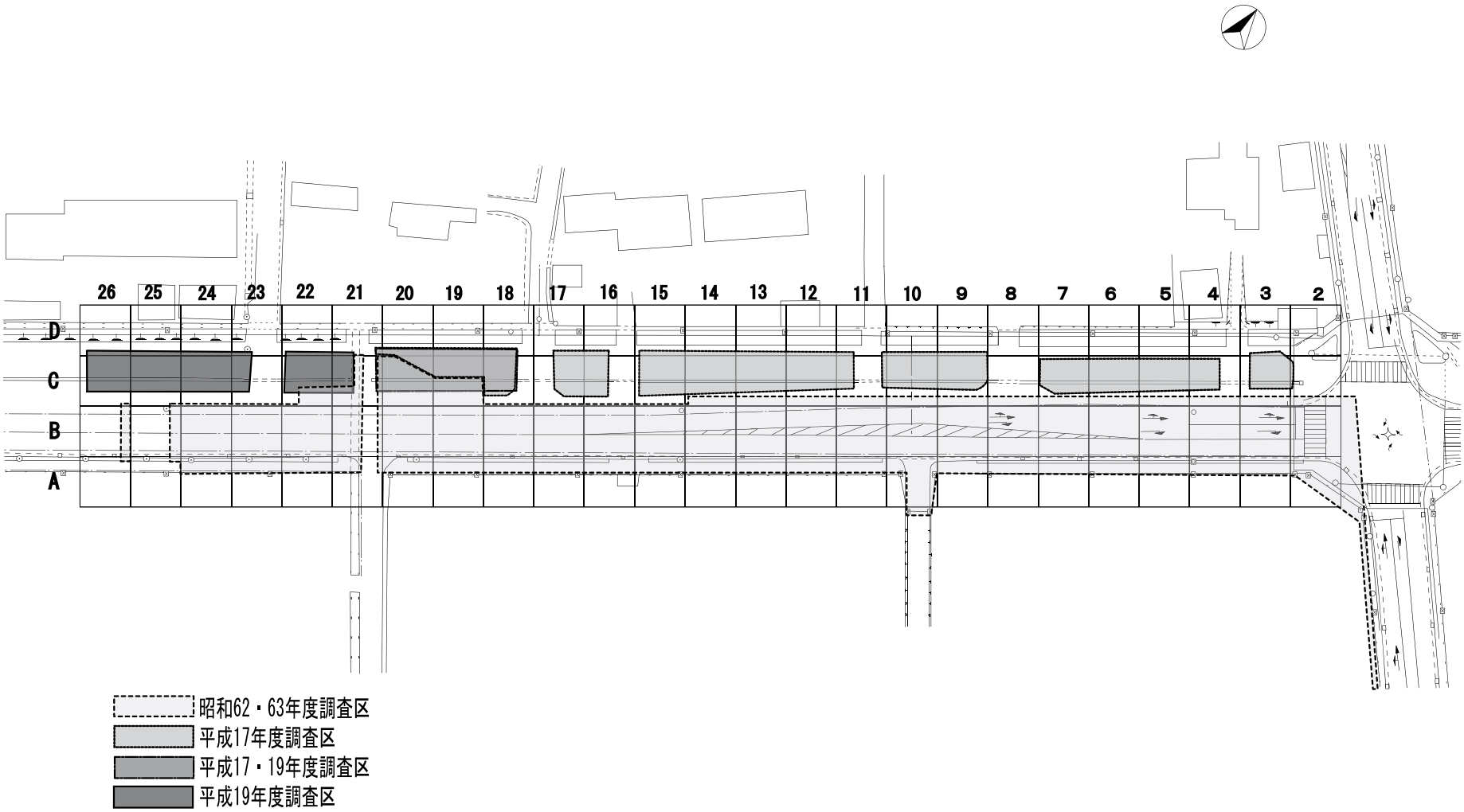


第４図　土層断面図(2)

Ｃ－22区　南側土層断面

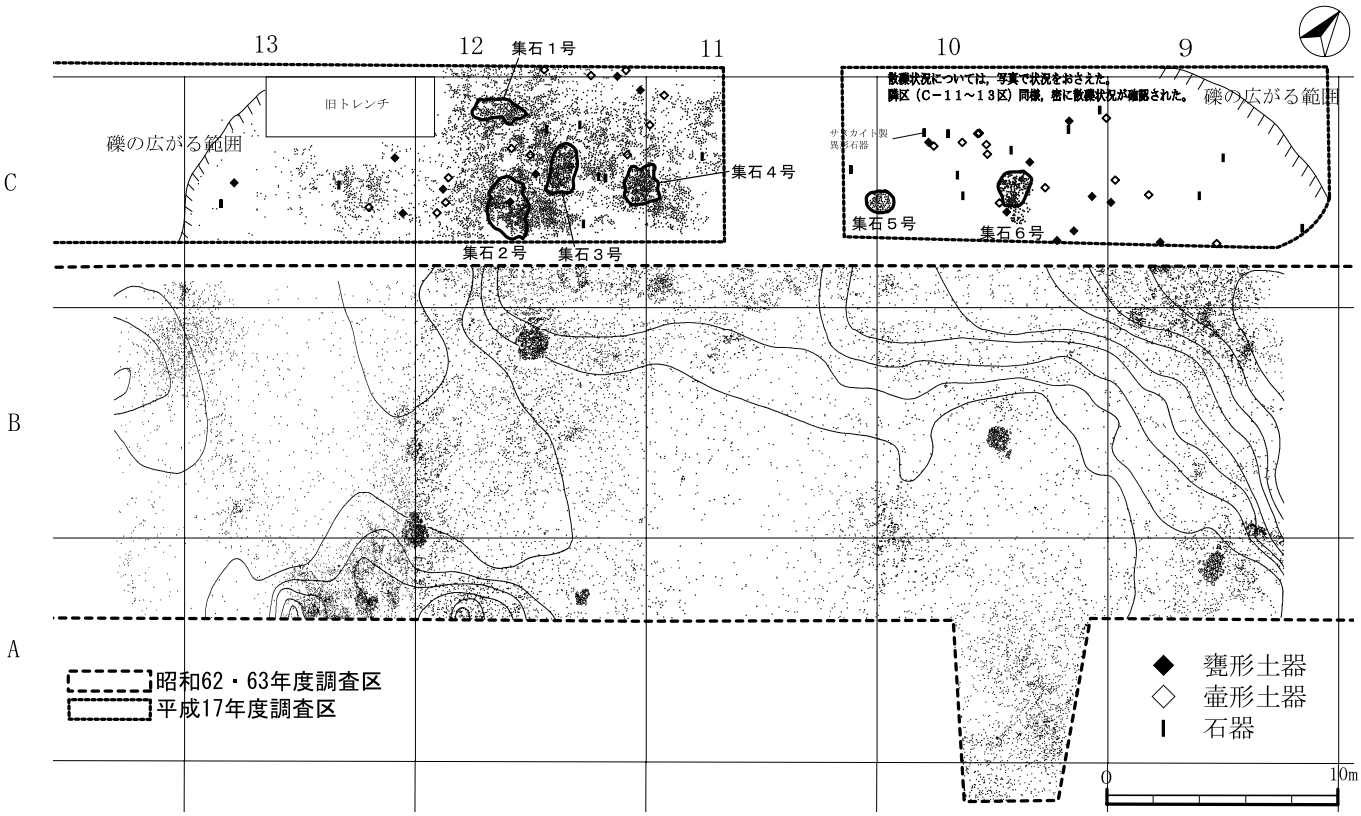
Ｃ－19区　北側土層断面





第５図　調査範囲とグリッド配置図（S＝１／1,000）

第Ⅳ章　縄文時代早期（Ｘ層）の調査



第６図　Ｘ層遺構配置図及び遺物出土状況図

第１節　調査の概要

縄文時代の調査は，C－２～17区については平成17年度に，C－18～26区については19年度に実施し，近世・近代（Ｉc層），中世（Ⅱ層），弥生時代（Ⅲ層）の調査終了後に行った。

（前畑遺跡1990）では，Ｘ層（早期相当層）以外にＶ層（晩期相当層）の２時期の包含層を確認しているが，今回の調査では，縄文時代については早期（Ｘ層）のみを確認し，特に遺構については，C－９～13区にかけて集石遺構の集中を検出した。これは，（前畑遺跡1990）確認の集石遺構の北側隣接区に相当する。また，集石遺構検出周辺区を中心に，集石同様C－９～13区で平栫式土器等が253点，石器が14点出土した。Ｘ層（早期相当層）では，集石遺構を中心とした集落構成の一端が捉えられる。出土した土器型式や形態は（前畑遺跡1990）と類似する資料が殆どで，（前畑遺跡1990）出土分と５点が接合した。石器では，（前畑遺跡1990）掲載の石鏃や石匙が確認されなかったこと，１点異形石器が出土した事が相違点として挙げられる。極少の平栫式土器片がⅥ層で出土しているが，同層に遺構や他の型式・形態の遺物が出土しないことから，本来の包含層であるＸ層（層位差：20㎝程度）からの紛れ込みと捉え，Ｘ層出土遺物に含めて取り扱っている。

第２節　遺構

Ｘ層（早期相当層）では，Ｃ－９～13区にかけて集石遺構の集中を検出し，周囲には礫の散在状況が見られた。集石遺構以外の遺構を検出することはできず，（前畑遺跡1990）に同様である。「遺跡の北端の様相を如実に示」[1]す資料として追加的意味合いを持つと思われる。

⑴　集石遺構

Ｘ層下面に，掘り込み面の検出や礫の集中等を根拠として，集石遺構が６基検出された。しかし６基以外にも，周辺域には礫が無数に散在する状況にあった。集石遺構の掘り込み面の面積や集石遺構の礫数と周辺域の散礫個数との比較から，（前畑遺跡1990）掲載分を含め，本来は12基以上の集石遺構が存在したものと考えられる。集石遺構形成後に，礫が自然に散流，若しくは人為的に廃棄された可能性が想定される。本稿では，集石遺構内に含まれている土器中，掲載可能な４点を取り上げたが，集石遺構周辺（散礫域）にも多くの土器が出土しており，いずれも平栫式土器に比定される資料群である。礫の散流（廃棄）の可能性から，遺物の集石遺構内への流れ込みの可能性もあり，集石遺構と平栫式土器の共伴関係を断定はできないが，「遺物の層位的な出土傾向から包含層の形成された時期に該当することが考えられる」[1]。なお，集石６号内炭化物（第Ⅶ章では，1号集石と仮称。）１点の放射性炭素年代測定を行ったところ，^{14}Ｃ年代で「7300±25年BP」と「縄文時代早期後半に相当する」結果を得ており，少なくとも集石６号については，出土土器の比定時期と符合する。

集石遺構が「遺跡の存在する微高地の縁辺部端に構築されて」おり，「その中心は南側の用地外へ広がることが想定される」と（前畑1990）では報告されている。今回の調査成果により集石集中の最北域が概ね捉えられつつあるが，住居址等集石以外の遺構の未検出とも併せて，本遺跡の集落内における集石遺構の全体的位置付けを捉えるまでには至っていない。

集石遺構は，発掘調査時点では検出順に番号を付けていったが，掲載時のレイアウトの都合上，西側検出分から番号を振り直してある。夥しい散礫状況の中で，どれを集石遺構と見るかについては，礫の集中が顕著であるもの（１～４号），明瞭な掘り込み面を有するもの（５・６号）の２つの視点に絞った。遺構本体及び周辺域に焼土は確認できなかったものの，集石内の礫を含め，周辺の散礫も火熱を受けた痕跡が捉えられた。このことから，本遺跡の散礫状況は，集石遺構で使用された礫が周辺に無数に散在している状況として捉えることができる。集石と散礫（散石）の接合により，集石と散礫（散石）の関係を明らかにした城ヶ尾遺跡Ⅱ報告書では，集石の環状ブロックの形成について，その要因と集落構成について検討を試みている。本遺跡の集石及び散礫の分布状態を概観すると，城ヶ尾遺跡に類似して環状を呈しているようにも捉えられ，関連性を検討する必要性を感じる（Ｐ70参照）。

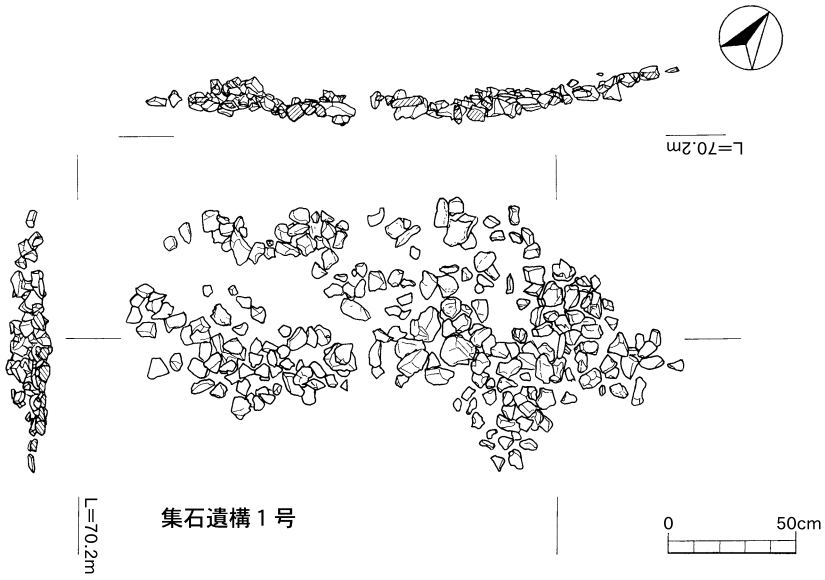
⑵　集石遺構内出土遺物

①　土器・土製品（第９図－１～４）

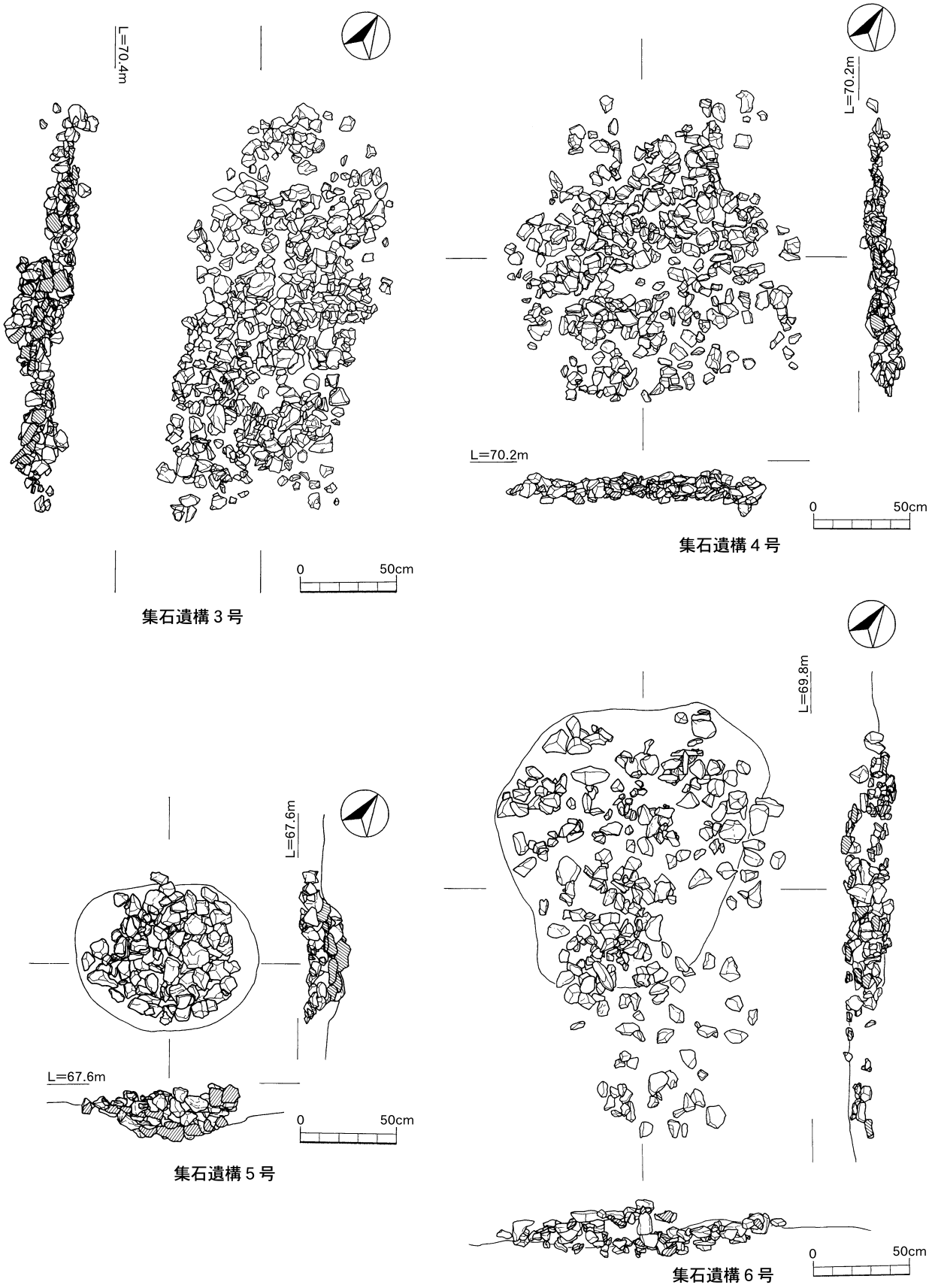
集石周辺域は散礫状況が顕著であることから，域内において遺物が移動した可能性も予想される。本稿で集石遺構内遺物として取り上げた４点は，偶発的に集石内へ流れ込んだ可能性も否定できないことを付記しておく。

１及び２は集石遺構３号から出土した。１は，突帯を添付し断面が弯曲することから深鉢形の頸部の一部と思われる。

２は，８点の土器片資料からなる。純粋に集石内から出土したのは１点のみであるが，集石の礫内に確り入り込んでおり，個体も大きかったため遺構内資料に含めた。他の７点も直近の位置から出土している。口縁部から底部まで直接は接合できなかったが，他に類似資料の点数が少ないことから同一個体の可能性が高いと捉え，図面上での復元を試みた。口唇部については，欠損後磨滅しているのか，部分的に残存しているか，判然としない。（前畑遺跡1990）にも，口縁部が肥厚しない無文の壷型土器が



第７図　集石遺構１・２号実測図



第８図　集石遺構３～６号実測図

第９図　集石遺構３・４・６号出土遺物実測図

確認されており，同種の可能性を考え，口唇部を欠損していないものとして図示した。

３は集石４号内出土遺物である。突帯をもたず，連続刺突が確認される。頸部上部にハケ目状の調整痕（沈線？）が横走し，頸部下部には右下りの斜行線が入る。

４は口縁部の肥厚帯が薄い資料である（P21参照，（ハ）Ⅲ類深鉢形土器幅広肥厚口縁（浅薄）に含まれる)。口縁肥厚帯直下を削ることで肥厚帯を作出していると思われる。口縁部上位・下位に真線文を１，２条施し，中位を６条程の連続刺突を横走させている。文様帯上下端部は１～３条の刺突を施し，幾何学的な文様に仕上げている。器厚が３，４㎜と極薄である。

第３節　出土遺物

１　土器・土製品

⑴　土器分類の概要

Ｘ層出土の土器は，器形及び施文形態等の特徴から，Ⅰ類・Ⅱ類及びⅢ類に分類した。ただし，量的には殆どがⅢ類に該当し，Ⅰ・Ⅱ類はそれぞれ１点ずつのみであった。

次のような施文形態の特徴から，以下の三つに分類した。

ア　Ⅰ類土器（第10図－５）

円筒形を呈する資料と思われ，（前畑遺跡1990）に掲載されているⅠ類・Ⅱ類土器（１～10）に類似する。（前畑遺跡1990）の10点の出土区はB－13・14区であるが，本資料はC－22区と区が大きく異なる。器面の磨滅が顕著で，文様や調整等判然としないが，僅かに横位の条痕文が確認されることから，（前畑遺跡1990）のⅡ類土器に近似するように思われるが，小片資料のため断定はできない。

イ　Ⅱ類土器（第10図－６）

原体回転による山形状の押型文土器である。１点のみの出土（C－15区）であり，（前畑遺跡1990）にも１点の出土（A－13区）が報告されている。小破片で摩耗が著しいため，資料の上下は判断が困難であるが，土器接合方向に破損しやすい状況を鑑み，上下位置を設定した。図面に従うと，縦位に施文された山形押型文土器と捉えられる。確認される山形押型の頂部はエッジが鋭く丁寧な施文で，山形の頂間は１㎝程度である。胎土は，２㎜程度の長石を多量に含み，２㎜程の石英や角閃石も確認される。（前畑遺跡1990）の山形押型文土器は，山形頂間が1.2㎝，胎土に金雲母を含み堅密と記すことから，本遺跡出土資料との相違－２は頂間１㎝程度，胎土に金雲母が確認されず，胎土が脆い一が見られ，同一個体かどうかは判断が困難である。

従来の土器編年上，後述するⅢ類土器との関連性が指摘される土器型式であり，出土点数は１点のみであるが注目される。

ウ　Ⅲ類土器（第10図－７～41）

Ｘ層出土土器群中，その殆どを占める土器群であり，既知の土器型式でいう平栫式土器に該当すると考えられる。出土区はC－９～13区が中心である。口縁部の作出の仕方や施文方法，及び施文形態に豊かなバリエーションが見られる。本遺跡のＸ層出土土器で確認された口縁形態は平口縁及び波状口縁，施文方法は縄文，結節縄文，回転施文，沈線，刺突等であり，文様形態では山形文や羽状文，沈線文，刺突文，曲線文，刺突連点文などが確認された。現段階では，各属性の関連性が不明瞭且つ複雑多様で，本遺跡出土点数が多数ではないため，器形的特質である鉢形と壷形の細分にとどめたい。なお，本遺跡出土のⅢ類土器資料群の特徴として，深鉢形土器の胴部には結節縄文が施されるのに対して壷形土器が無文であること，深鉢形土器が褐色を呈するのに対して壺形土器が橙色を呈すること，胎土の堅硬さに差異が見られることなどを基準として分類を試みた。

⑵　深鉢形土器（第10図－７～20）

器形上，口縁部の肥厚帯の幅の広狭や器厚で４分類できる。口唇部直下に幅狭の突帯を添付し，肥厚帯を玉縁状若しくは断面三角形状に肥厚させるもの（イ），幅広に肥厚させるもの（ロ），口縁部の下部を削ることで浅薄の肥厚帯を作出するもの（ハ），

肥厚帯を作出しないもの（ニ）に細分できる。

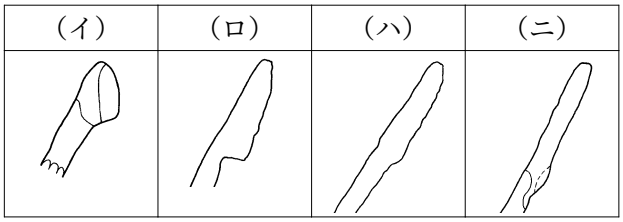
①　口縁部

（イ）　幅狭肥厚口縁（第10図－７～12）

口唇部直下に突帯を巡らし，断面観が，玉縁状若しくは下垂気味の断面三角形状を呈する。肥厚帯の幅が１㎝～1.5㎝程度と幅狭である。７・８は，口縁部整形や調整がやや粗雑である。７は，口縁部に単節斜行縄文を２段に横走させ施文するが，部分的に無文箇所も存在する。口縁直下から頸部にかけては無文であり，外面には工具による粗いナデ調整が，内面には若干丁寧な指ナデが確認される。８は，口唇頂部にヘラ状工具による刻みが施される。口縁部及び頸部は無文であり，７に比べると丁寧な指ナデが表裏面に施される。９～12は，口縁部平坦面及び口縁部直下を断面三角形状に丁寧に整形している。12の口縁部の断面は他の資料と比較して薄い。９～12のいずれも口唇頂部に刻みを有し，10・12は口縁部下端にも刻み，若しくは列点を施す。口縁部の文様形態は，９は羽状文，10～12は斜行沈線文である。８・９・11・12は口縁部直下が無文であるが，資料が小片のため口縁部直下～頸部全体の文様は不明である。10は，口縁部直下に刺突列点と曲線文等により文様を構成する。

（ロ）　幅広肥厚口縁（深厚）（第10図－13～17）

口縁部の文様帯幅が２㎝を超える資料群である。突帯幅2.5㎝～３㎝の13～15と４㎝以上の16～17に細分される。13～15・17は波状口縁が明瞭に捉えられるが，16についても突帯幅の左右に差異があることから波状の可能性を捉え図化した。いずれも口唇上端部に刻みを有し，15・16は口縁部下端にも刻みを有する。13・14は口縁部に単節斜行縄文を施し，14は口縁部直下に一条の列点が横走する。15・16は口縁部に羽状の沈線が施され，上位の沈線を施文後下位を施文していることが確認される。上位の左下り沈線を横走後に下位の右下り沈線を横走させているのか，「く」の字状に上位沈線・下位沈線を交互に施しているのかは不明である。胎土が堅硬であるのが特徴的である。17は口縁部文様帯に波状文と押



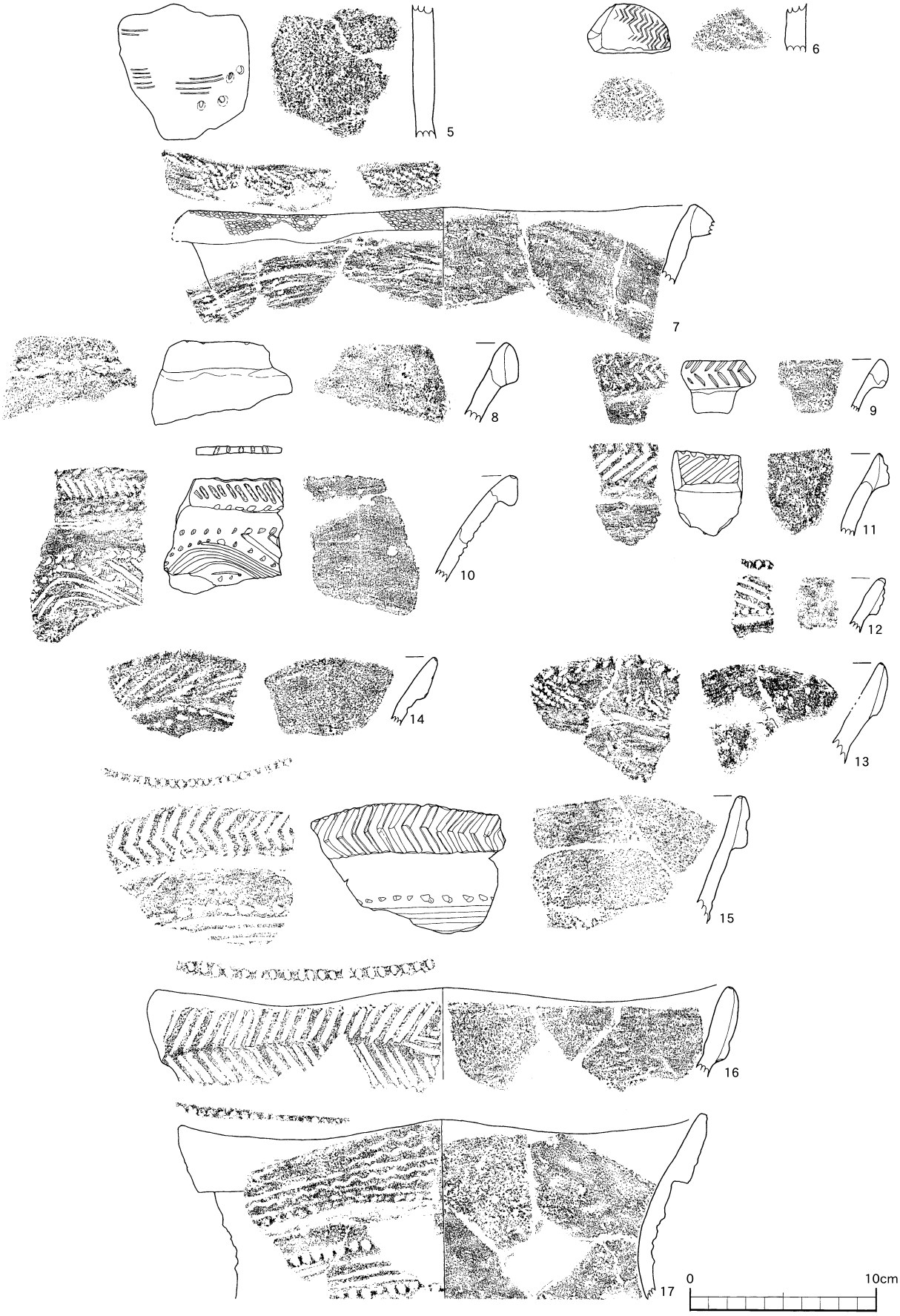
引気味の破線文を交互に横走させる。口縁部直下に２㎝程のブランクを空け，横位の４条の沈線文の上下に１条の列点文を施す。施文部直下～頸部に至る箇所に縄文が確認される。この資料は，肥厚帯下端～胴部に至るステップを断面上，丁寧に仕上げているのが印象的である。

（ハ）　幅広肥厚口縁（浅薄）（第11図－18～19）

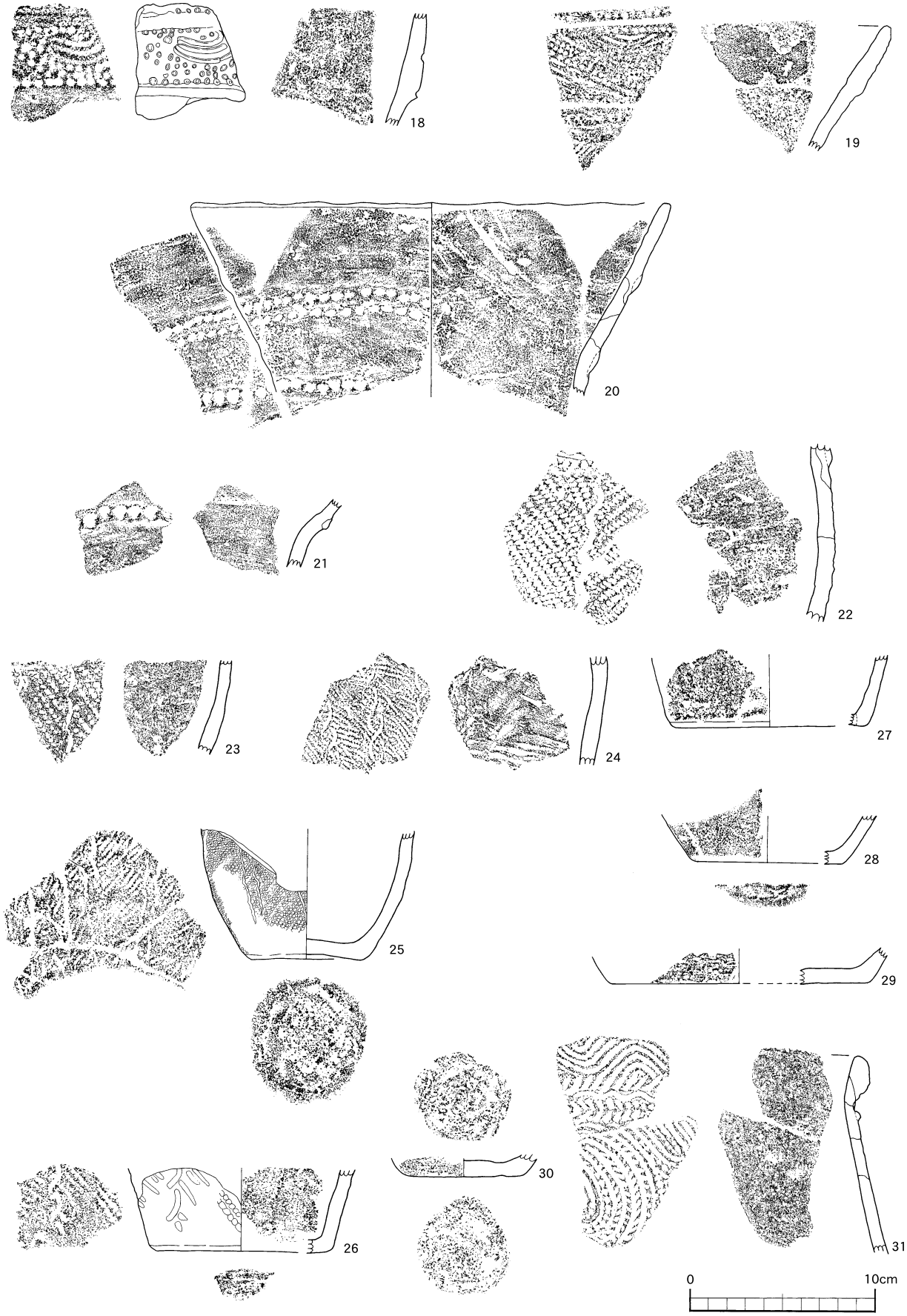
18・19は，文様帯幅が４㎝程度と（ロ）と相違はないが，肥厚帯直下～胴部に至る断面のステップ差が５㎜程度と（ロ）の７㎜～９㎜と比較して肥厚部が薄い資料群である。口縁下部を削ることで肥厚帯を作出していると思われ，肥厚帯直下の器厚は３，４㎜と極薄である。なお，（ロ）の資料群は，器厚が６，７㎜程度であり，器厚の相違は肥厚と削り出しの肥厚帯作出の手法の違いに起因すると考えられる。18は３条の半円弧文を中心に上下位に１・２条の列点を施し，中位を２条程度の連続刺突で埋めている。19は上位に数条の半円弧文，下位に２条の斜行線を施し，その間を４条程の連続刺突を斜・横走させている。

（ニ）　無肥厚口縁（第11図－20）

20は口縁部に肥厚文様帯を有しない資料である。（前畑遺跡1990）には同一個体若しくは類似資料は確認されなかった。土器胎土や推定口径，微隆起突帯上に連続刺突を施す文様構成は本類の資料群（Ⅲ類：平栫式土器）に近似する。しかし，頸部の張りが弱く，平栫式土器のマルクメールである結節縄文が若干残る胴部にも確認されない点など相違点も見られる。平栫式土器以降の編年が明確ではないため，この資料は今後重要な資料となる可能性を有し，Ⅲ類の他の資料との間に時期差を有するのか，アクシデンタルな個体差なのか，今後の資料増加に期待したい。



第10図　X層土器実測図(1)



第11図　X層土器実測図(2)

第12図　X層土器実測図(3)

② 頸部（第11図－21）

21は大きく弯曲することから頸部の一部と思われる。微隆起突帯上に連続刺突を施している。他の文様及び結節縄文等は確認されない。図面配置が天地逆の壷型土器の可能性もある。

③ 胴部（第11図－22～24）

22は，頸部に微隆起突帯上の連続刺突が確認される。胴部には，原体を縦位に回転させた結節縄文が施される。共に１段の左撚（ＬＲ）の原体と右撚（ＲＬ）の原体とを交互に施文して，結節部を中心に羽状を呈する。節間が密で丁寧な文様構成であることから，原体の拠り紐も細目で丁寧に編まれていたと考えられる。23は，２段左撚（ＬＲ）の原体で施文している。施文間に２㎜程度のブランクが見られることから，節間が２㎜程度と比較的太めの糸により原体が構成されていたと思われる。24は，２段左撚（ＬＲ）の回転施文である。結節部分の拠りを寝かせて回転させることにより，縦位の螺旋状の文様効果を狙ったと思われる。

④ 底部（第11図－25～30）

25は２段の右撚（ＲＬ）の原体で回転施文されている。６㎜程間隔を空けて結節を２か所に施し，２条の縦位の流水状の文様を作出している。底部広径は6.5㎝度で上げ底である。底部内面に底部と胴部の接合面が確認され，円盤状の底面を整形後に，粘土を輪積みして胴部を作り上げたことが捉えられる。26の胴部は，左撚（ＬＲ）の原体回転施文である。27～30は胴部に文様が確認されない。30は欠損している底面の縁辺部に，若干の磨滅が確認されることから，メンコの可能性も考えられる。

⑶ 壷形土器（第11図－31～39）

器形上，弥生時代以降の壷形土器に類似する資料群を，本稿でも「壷形土器」と称することとする。本県では，本型式の壷形土器の器形的特徴として，口縁部が内傾するタイプ，外反するタイプ，直行するタイプの少なくとも３種が存在することが指摘されているが，本遺跡の資料を概観したところ，同様の３種類が確認できた。文様構成については，口縁部から頸部にかけて，全面的に有文のタイプ，口縁部のみ有文のタイプ，無文のタイプの３種類に分類可能である。胴部の文様形態については，本型式の壷形土器出土遺物点数87点中，頸部から胴部に至る資料が18点と少ないため断定はできないが，他遺跡出土の同型式資料の状況も勘案すると，無文と捉えてよいと思われる。

① 口縁部（第11・12図－31～39）

31～34は，頸部から口縁部にかけて全面的文様を有する資料である。31は口縁部が内傾し，口縁上部を袋状に仕上げる。口唇部に浅い刻みを施し，口縁部は流水文を横走させる。口縁部直下の１条の波状文直下には，断面三角形状の突帯を１条巡らし，２段の斜位刺突により，逆「く」の字状の羽状文を作出する。その下位から頸部にかけては曲線文で隙間なく埋め，沈線凸部に刻みを丁寧に施すという手の込んだ優麗な文様が印象的である。31・32は文様構成や胎土が極似し，同一個体の可能性が高い。33は口縁上位を欠損している。口縁部は有文，胴部は無文である。頸部に刺突列点文を施した突帯を１条巡らし，その接点上に重ねるように縦位のやや幅広突帯を１条施す。縦位の突帯を沈線で２分割し，間に列点を施す。口縁部の主たる文様構成は，羽状斜行線間を１条の列点で埋めることで美麗な幾何学文様を作り出している。なお，33・34は胎土や文様形態から同一個体の可能性がある。35は口縁部上面観で多角形状の角を持つ器形上特徴的な資料である。（前畑遺跡1990）では同種の資料は確認されていないが，他遺跡の同型式資料中には，僅かであるが確認されている。口縁部全体にかけて角を有するのか，口縁中位～下位にかけて角がとれて一般的な円筒形状になるのかは小片のため不明である。文様については，口唇部に刻みを施し，やや肥厚気味の口縁部に斜行線，口縁部直下に列点を１条巡らす。頸部にかけては，左下り及び右下りの斜行線が確認される。36～38は肥厚帯のみに文様を有する。36は幅3.5㎝程の幅広の肥厚口縁を有する。口唇部を刻み，口縁

上下位に１条の列点を巡らせ，列点間を右撚（ＲＬ）の縄文で埋める。37・38は口唇部に刻みを施し，口縁部上位に１条，下位に２条の押し引き気味の刺突列点が施文される。両資料は，胎土や文様構成から同一資料である可能性が高い。小片で口縁部作出がやや雑なため正確な断面の傾きを導きだすのは困難であったが，同器種の他の傾向に合わせ，やや内傾気味に図化した。39は全くの無文で，接合面により肥厚口縁部の添付が明瞭に捉えられる。

②　頸部・胴部（第12図－40・41）

40は，１条の微隆起突帯上に刻み状の列点を施す。口縁部にかけて左撚（ＬＲ）の縄文と右撚（ＲＬ）の縄文が確認されることから，結節縄文による羽状の文様構成である可能性もあるが，磨滅が著しく断定できない。なお，胴部は全くの無文である。

41は口縁部上位を欠く接合資料である。器形は集石遺構３号内資料－２と近似するが，胎土色や復元口径が異なることから別個体と考えられる。

２　石器・石製品

縄文時代早期の石器は，土器同様Ｘ層中のＣ－９～13区を中心に出土している。同包含層同区からは，早期後半前半期に比定される平栫式土器のみ出土しており，共伴関係にあると思われる。（Ｘ層早期相当層）に出土する石器類は，異形石器，局部磨製石斧，礫器，磨石，敲石である。（前畑遺跡1990）では打製石鏃が11点，石匙が１点（未製品を含めると２点？）出土していたが，今回の調査成果では１点も確認されていない。一方，異形石器が１点出土しており注目される。頁岩系ホルンフェルスを素材としたのが多く（約61％），北隣の高隈山系で容易に確保できる石材である。

⑴　異形石器（第13図－42）

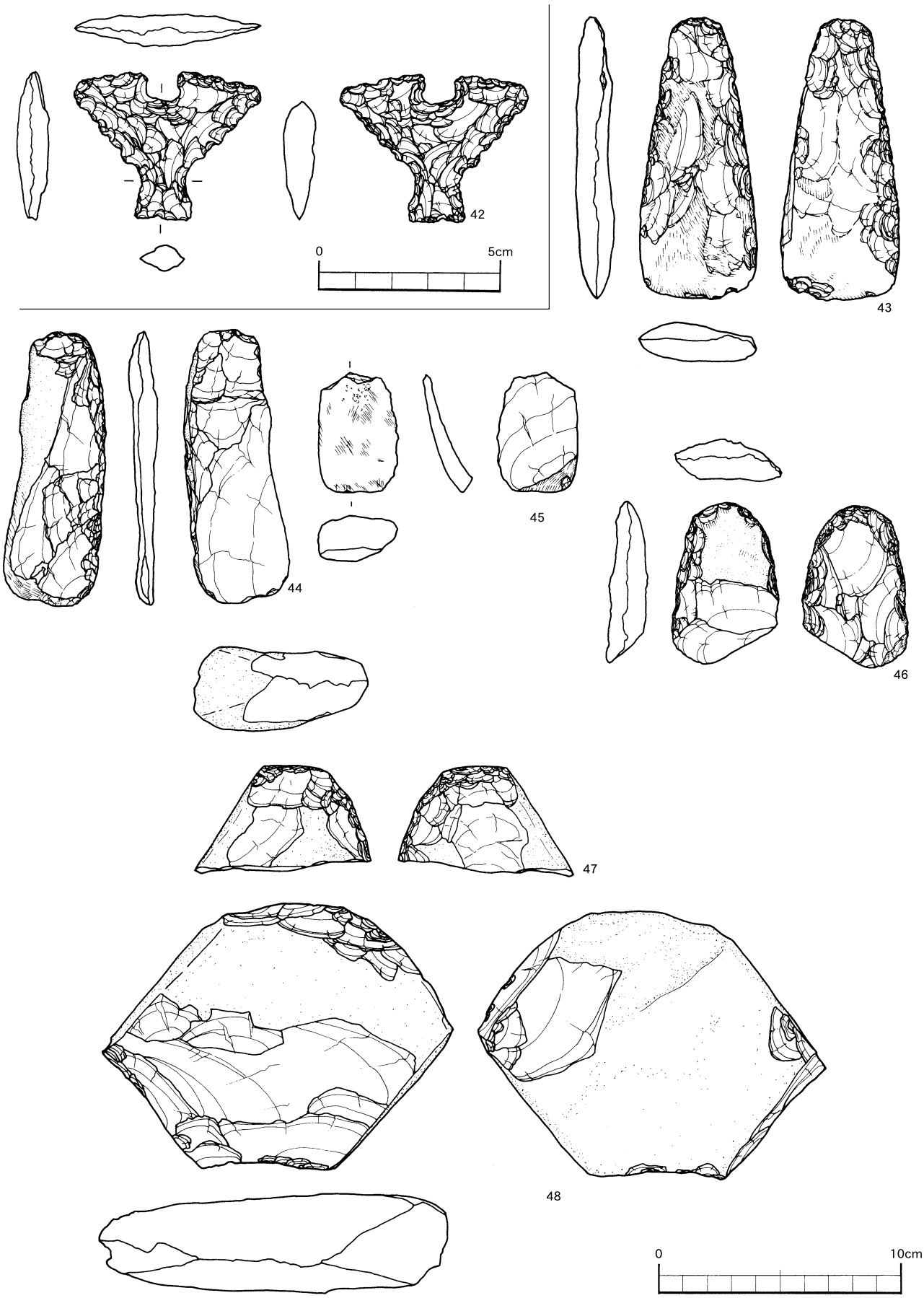
42は，従来の定形石器とは器形が異なる上，類似品が出土している上野原遺跡（霧島市）の報告書に準じ，「異形石器」と仮称した。つまみ部を有する点など器形や作出の仕方は石匙に近似するが，石匙の刃部に相当する部分に凹み状の抉りが作出されている。用途は不明である。石材は，西北九州産のサヌカイトであり，前述の上野原遺跡の異形石器と同様である。なお，本稿では確認されていないが，（前畑遺跡1990）では石匙が出土している。

⑵　局部磨製石斧（第13図－43～47）

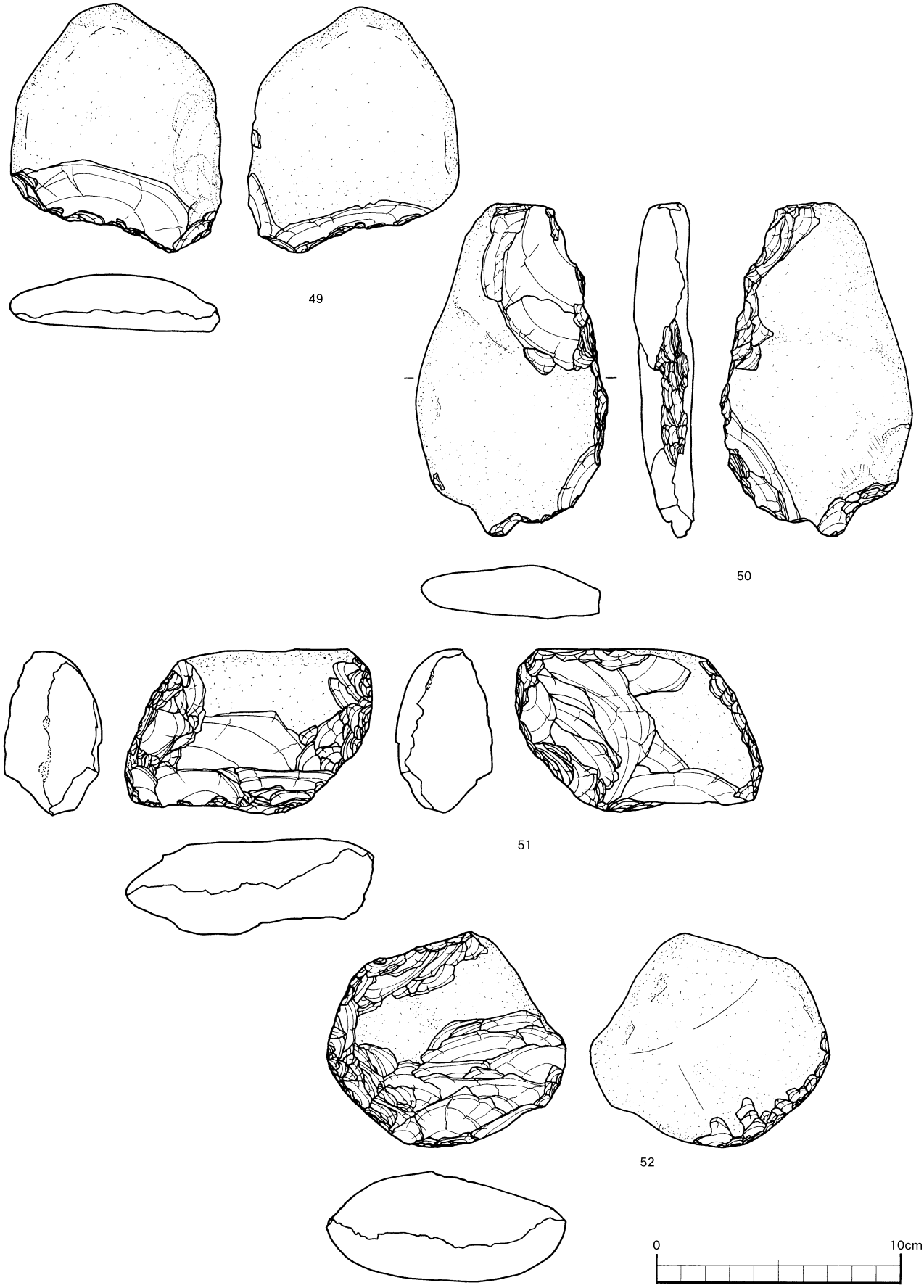
43は長軸長11.5㎝，器厚１㎝弱と扁平である。刃部周辺に入念な研磨が施されるのに対して，体部には側縁方向からの剥離痕が多数残される。体部表面の凹凸の凸部に顕著な磨滅痕が確認でき，着柄による紐ずれと考えられる。横断面観の表面側が凸レンズ状に盛り上がるのに対して，裏面はやや平坦に整形されていること，体部に残される磨滅痕が表面側に偏在していることは，柄が裏面側に着装されていた可能性を示す。44は器形及び整形の仕方は43と似ているが，表裏面を裂くように欠損している。刃部作出が明瞭に確認されないが，刃部相当箇所に若干の磨滅が確認できることから，使用による欠損品と思われる。45は，刃部周辺の欠損品である。表裏面が縦方向に割れており，打撃による強い衝撃を示す。46は石材が43～45と同様の頁岩製若しくは頁岩系ホルンフェルスで，側縁方向からの剥離痕も上述の資料と類似することから，局部磨製石斧の基部欠損品と考えられる。47も欠損品であり，部分的な残存にとどまるため，器種特定が困難である。硬質の頁岩系ホルンフェルスを石材とし，側縁部の調整剥離が比較的細かで丁寧であり，石片の基部の可能性を捉え本類に含めた。

⑶　礫器（第13～15図－48～53）

48は，長軸長12.3㎝，短軸長10.5㎝で比較的大きい礫素材である。横断面観が比較的整った長方形状を呈しているが，側面は自然面である。基部は粗い剥離調整後に刃潰しが施され，手握に適している。刃部は表面側からの大まかな剥離による整形後，微細な剥離により刃部作出を行っている。49・50は礫皮面を基部として残し，刃部を中心として剥離痕が見られる。49の刃部は表裏面側からの比較的大きな

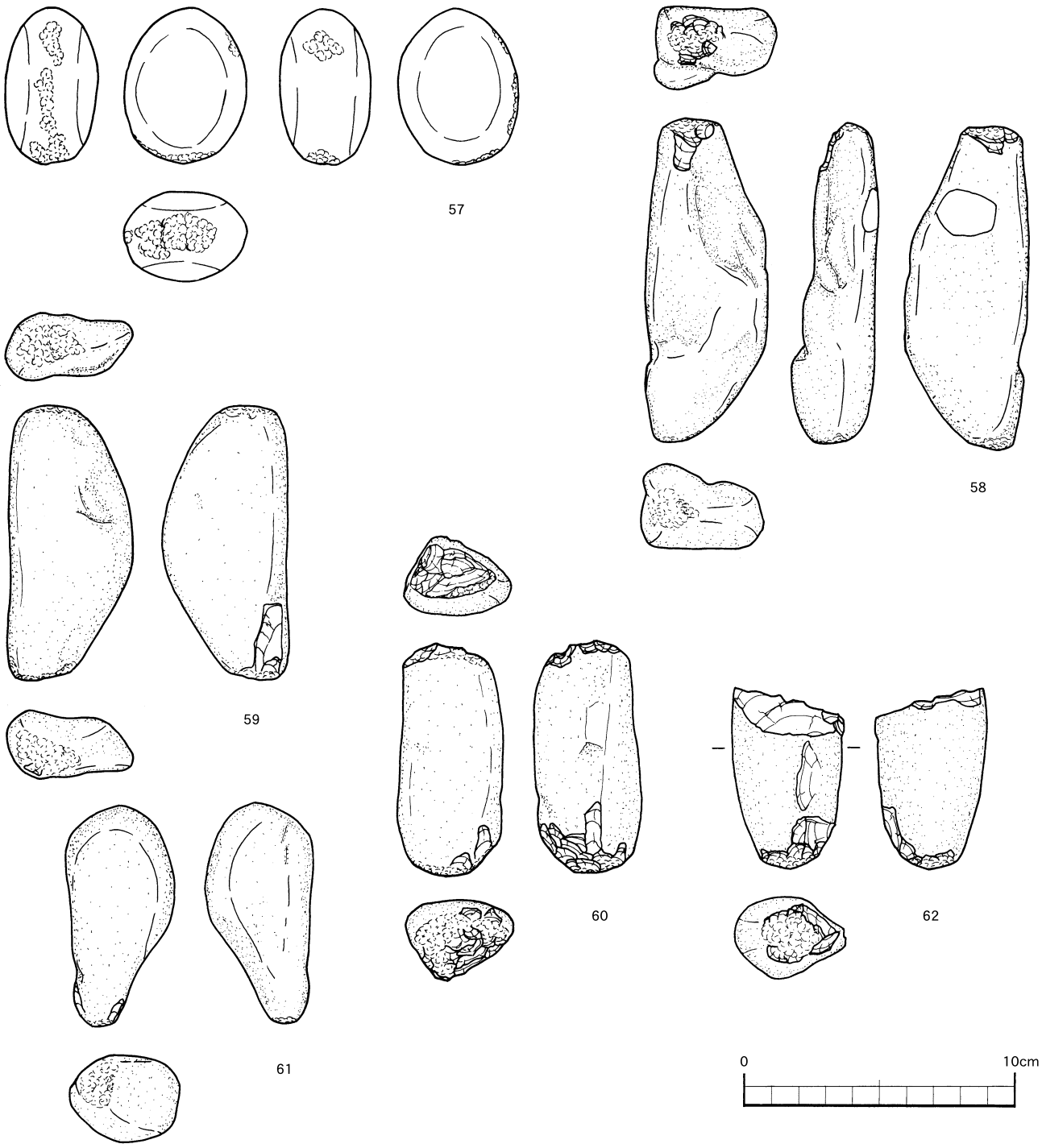


第13図　X層石器実測図(1)



第14図　X層石器実測図(2)

第15図　X層石器実測図(3)



第16図　X層石器実測図(4)

剥離により刃部を作出し，刃部のエッジには使用痕が顕著でない。一方，50は大きな剥離に加え比較的細かな剥離も施し，刃部のエッジには刃潰し状の使用痕が顕著である。51は，上下面ともに刃潰しや使用痕と思われる磨滅痕が確認される。52は，礫素材の片面を中心的に剥離調整している。表面左下側縁が刃部と考えられるが，明瞭な使用痕は確認されない。53も礫素材の自然面の多くを残し，側縁部２か所を剥離調整し，基部・刃部を作出している。下側縁の刃部には使用痕が捉えられる。

⑷　磨石・敲石（第15・16図－54～57）

54～57は円礫・長楕円礫を素材とする。54～57は表裏面中央部を中心に，明瞭な光沢を持つ磨面を有する。敲打痕が，側面周縁部を巡る。57は他と比べて小礫を素材とし，磨面は明瞭ではない。比較的浅

めの敲打痕が側面周縁部を巡るが，下側面には集中的な使用により敲打痕が顕著である。

⑸　棒状敲石（第16図－58～62）

いずれも，棒状の礫素材の長軸端部に集中的な敲打痕を有し，一般的に敲石に分類される。（前畑遺跡1990）に準じ，本稿では特に「棒状敲石」と呼称した。剥片の出土とともに，石器製作の根拠とされる資料群である。58・59は下端部に集中的敲打による平坦面が形成されている。58の上端部は複数の剥離を有し，一見，刃部作出にも捉えられる。エッジは刃潰し状に潰れている。60も上下両端部に剥離痕と敲打痕を有するが，剥離痕は強い敲打により，刃潰し状の敲打痕は細かい敲打による痕跡であろう。61は下端部のみに敲打痕を有する。62は欠損品である。

第３表　Ｘ層集石遺構出土土器観察表

挿図	番号	出土区	層位	器種 石材	部位	色調		調整		胎土 状態	胎土						備考
						外	内	外　面	内面		石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	
9	1	C－12	X	深鉢形土器	頸部	にぶい黄橙色	浅黄色	無文+(突帯+列点)	ナデ	良好	○	○		○			
	2	C－12	X	壷形土器	口～胴部	黄橙色	黒褐色	無文	ナデ	良好	○	○				○	
	3	C－12	X	深鉢形土器	頸部	にぶい黄褐色	黒褐色	沈線+列点	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	4	C－10	X	深鉢形土器	口縁部	暗赤褐色	にぶい褐色	列点+沈線	ナデ	良好	○	○			○		

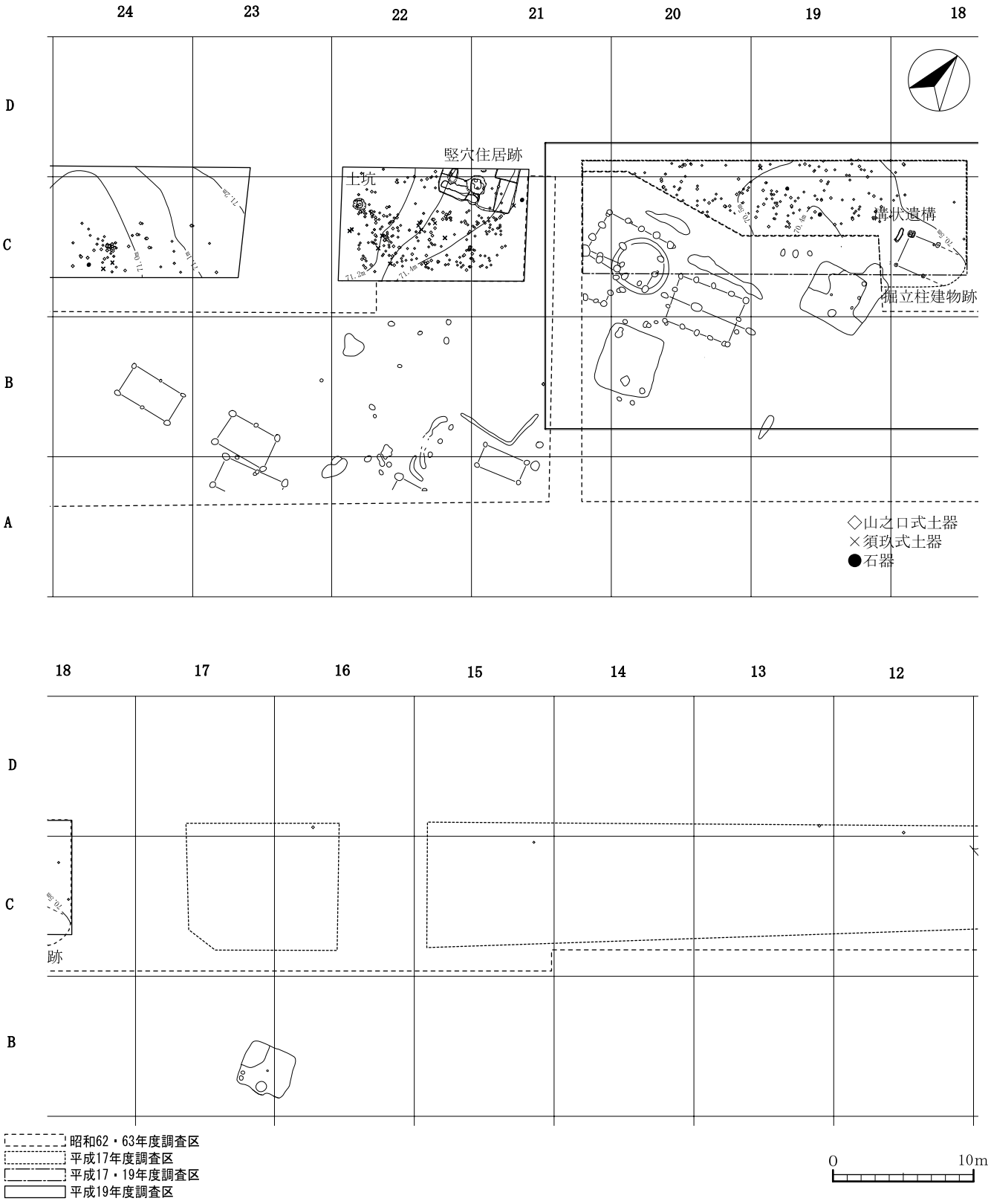
第４表　Ｘ層出土土器観察表

挿図	番号	出土区	層位	器　種	部　位	色調		調整		胎土 状態	胎土						備考
						外	内	外　面	内面		石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	
10	5	C－22	Ⅵ	深鉢形土器	胴部	橙色	黄橙色	山形押型文	ナデ	良好	○	○	○				
	6	C－15	X	深鉢形土器	胴部	橙色	黄橙色	山形押型文	ナデ	良好	○	○	○				
	7	C－10	X	深鉢形土器	口縁部	橙色	黒褐色	縄文	ナデ	良好	○	○				○	
	8	C－10	X	深鉢形土器	口縁部	黄橙色	にぶい黄橙色	無文	ナデ	良好	○	○		○	○		
	9	C－12	X	深鉢形土器	口縁部	黒褐色	明黄褐色	羽状文	ナデ	良好	○	○		○			
	10	C－10	X	深鉢形土器	口縁部	褐色	黒褐色	列点+沈線	ナデ	良好	○	○	○			○	
	11	C－10	X	深鉢形土器	口縁部	橙色	橙色	沈線	ナデ	良好	○	○		○			
	12	C－12	X	深鉢形土器	口縁部	にぶい黄色	にぶい黄色	列点+沈線	ナデ	良好	○	○		○	○		
	13	C－11	X	深鉢形土器	口～頸部	明黄褐色	褐灰色	縄文	ナデ	良好	○	○			○	○	
	14	C－10	X	深鉢形土器	口縁部	橙色	明黄褐色	縄文+列点	ナデ	良好	○	○	○	○			
	15	C－10	X	深鉢形土器	口縁部	明赤褐色	明赤褐色	羽状文+列点+沈線	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	16	C－13	X	深鉢形土器	口縁部	明黄褐色	明黄褐色	羽状文	ナデ	良好	○	○			○		
	17	C－９	X	深鉢形土器	口～頸部	黒褐色	にぶい黄褐色	列点+沈線	ナデ	良好	○	○					
11	18	C－10	X	深鉢形土器	口縁部	明赤褐色	橙色	有文	ナデ	良好	○	○			○		
	19	C－不明	X	深鉢形土器	口縁部	黄褐色	黄褐色	縄文+沈線	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	20	C－10	X	深鉢形土器	口縁部	赤褐色	赤褐色	(微隆起突帯+列点)	ナデ	良好	○	○	○		○		
	21	C－10	X	深鉢形土器	頸部	明赤褐色	明赤褐色	列点+沈線	ナデ	良好	○	○					
	22	C－13	X	深鉢形土器	頸～胴部	明褐色	にぶい赤褐色	結節縄文	ナデ	良好	○	○		○			
	23	C－12	X	深鉢形土器	胴部	橙色	にぶい黄褐色	結節縄文	ナデ	良好	○	○	○				
	24	C－12	X	深鉢形土器	胴部	赤褐色	明赤褐色	結節縄文	ナデ	良好	○	○	○				
	25	C－11	X	深鉢形土器	底部	明赤褐色	黒褐色	結節縄文	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	26	C－11	X	深鉢形土器	底部	明赤褐色	橙色	結節縄文	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	27	C－12	X	深鉢形土器	底部	明赤褐色	明赤褐色	結節縄文	ナデ	良好	○	○	○		○		
	28	C－９	X	深鉢形土器	底部	赤褐色	赤褐色	無文	ナデ	良好	○	○	○				
	29	C－13	X	深鉢形土器	底部	黄橙色	黄橙色	不明	ナデ	良好	○	○	○		○	○	
	30	C－12	X	深鉢形土器	底部	明赤褐色	黒褐色	不明	ナデ	良好	○	○	○		○	○	
	31	C－12	X	壷形土器	口～頸部	橙色	明黄褐色	有文	ナデ	良好	○	○		○	○		
12	32	C－12	X	壷形土器	頸部	黒褐色	にぶい黄褐色	有文	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	33	C－10	X	壷形土器	頸～胴部	明黄褐色	明黄褐色	有文	ナデ	良好	○	○	○	○	○	○	
	34	C－10	X	壷形土器	頸部	黒色	橙色	有文	ナデ	良好	○	○	○	○	○	○	
	35	C－９	X	壷形土器	口縁部	黄橙色	にぶい黄橙色	有文	ナデ	良好	○	○	○		○	○	
	36	C－10	X	壷形土器	口～頸部	黄橙色	黄橙色	有文	ナデ	良好	○	○					
	37	C－10	X	壷形土器	口縁部	橙色	明赤褐色	有文	ナデ	良好	○	○	○	○			
	38	C－10	X	壷形土器	口縁部	橙色	明赤褐色	有文	ナデ	良好	○	○	○	○			
	39	C－10	X	壷形土器	口～頸部	橙色	にぶい黄橙色	無文	ナデ	良好	○	○	○			○	
	40	C－10	X	壷形土器	頸部	明褐色	明赤褐色	有文	ナデ	良好	○	○					
	41	C－12	X	壷形土器	口～胴部	黄橙色	黒褐色	無文	ナデ	良好	○	○				○	

第５表　Ｘ層出土石器観察表

挿図	番号	器種	石　　材	層位	出土区	長　さ ㎝	幅 ㎝	厚　さ ㎝	重　さ g	備　　考
13	42	異形石器	サヌカイト	X	C－10	4.1	5.2	0.89	11.35	
	43	磨製石斧	頁岩系ホルンフェルス	X	C－12	11.5	4.8	0.9	101.84	
	44	磨製石斧	頁岩	X	C－10	11.2	3.9	1.05	54.11	
	45	磨製石斧	頁岩系ホルンフェルス	X	C－13	4.9	3.25	0.6	14.22	
	46	磨製石斧	頁岩系ホルンフェルス	X	C－10	6.5	4.3	1.68	53.19	
	47	磨製石斧	頁岩系ホルンフェルス	X	C－12	4.3	7.3	3.4	122.65	
	48	礫器	頁岩	X	C－９	10.8	13.8	4	685	
14	49	礫器	頁岩	X	C－11	9.1	8.3	2.2	236.51	
	50	礫器	頁岩	X	C－12	13.8	7.8	2	296.11	
	51	礫器	頁岩	X	C－10	6.6	9.5	3.8	307.32	
	52	礫器	頁岩系ホルンフェルス	X	C－９	8.6	9.8	4.4	380	
15	53	礫器	頁岩系ホルンフェルス	X	C－13	10	10.1	3.95	511	
	54	磨石・敲石	花崗斑岩	X	C－12	7.8	4	4.1	350	
	55	磨石・敲石	砂岩	X	C－８	8.2	6.3	3.9	285	
	56	磨石・敲石	砂岩	X	C－11	8.1	7.5	5.8	500	
16	57	磨石・敲石	砂岩	X	C－12	5.7	5.8	3.3	120.12	
	58	棒状敲石	頁岩系ホルンフェルス	X	C－９	11.9	4.5	3.1	190	
	59	棒状敲石	頁岩系ホルンフェルス	X	C－10	10.1	4.6	2.4	150.5	
	60	棒状敲石	頁岩系ホルンフェルス	X	C－10	8.6	3.8	2.9	131.52	
	61	棒状敲石	頁岩系ホルンフェルス	X	C－11	8	3.8	3.1	89.86	
	62	棒状敲石	頁岩系ホルンフェルス	X	C－９	9	5.4	3.9		

第Ⅴ章　弥生時代中期後葉（Ⅲ層）の調査



第17図　Ⅲ層遺構配置図及び遺物出土状況図

第１節　調査の概要

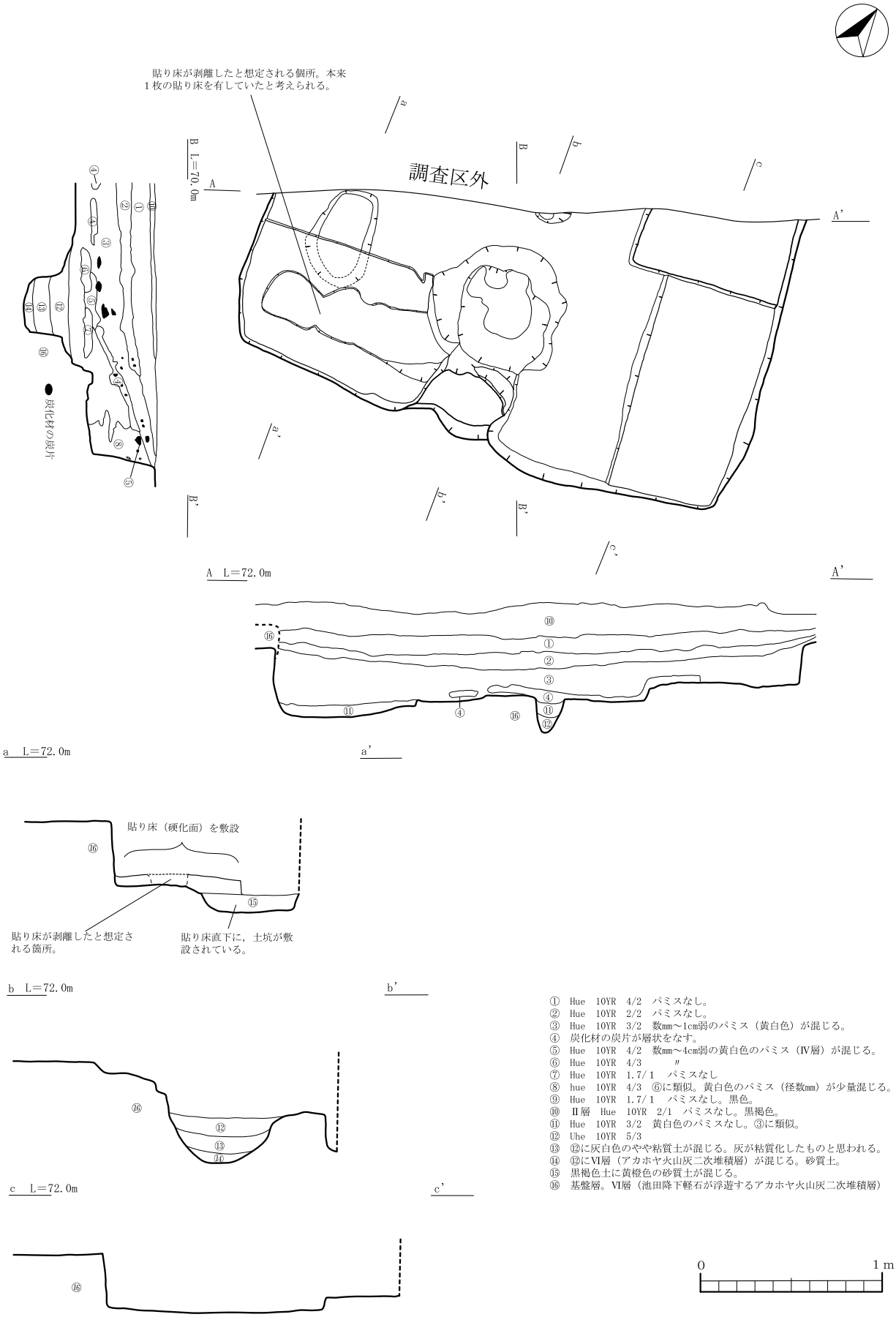
弥生時代の調査は，昭和62・63年度に，Ａ・Ｂ－16～26区にかけて，南側片車線の12mを対象に発掘調査を実施している。しかし，Ｃ－19～21区にかけては遺構の一部が調査区域北側に広がって検出されたため，拡張調査を行っている。その結果，竪穴住居跡３基，掘立柱建物跡８棟，円形周溝１基，溝状遺構３基等が検出され，多くの新知見や新資料が得られている。平成17年度は，道路拡幅工事に伴う北側片車線の12mを対象に発掘調査を実施した。昭和63年度の拡張調査部分Ｃ－19～21区から，さらに東側のＣ－18区に調査を広げた結果，掘立柱建物跡１棟を検出した。弥生時代相当の集落の広がりを捉えるために，Ｃ－21～25区にトレンチを入れて下層確認を実施し，Ｃ－21・22区に竪穴住居跡１基の所在を確認した。平成19年度は，平成17年度確認済みの竪穴住居跡の調査及び弥生時代相当の集落の広がりを見極めるため，未調査区の北西側Ｃ－21～26区を全面調査した。その結果，平成17年度確認済み分の竪穴住居跡に加え，近隣に土坑を１基確認した。また，遺物は，竪穴住居跡周辺に集中して出土したほか，Ｃ－24区まで分布することが確認され，調査区内における同集落の最西端部を捉えることができた。同集落は，北西の現集落側に広がる可能性が高いと考えられる。

第２節　遺構

弥生時代は，黒褐色土のⅢ層中に包含層が形成され，その直下のⅣ層黄白色の軽石を含む黄茶褐色さが確認される位置で遺構・遺物が確認された。確認された遺構は，竪穴住居跡１基，土坑１基，掘立柱建物跡１軒（同付属の溝状遺構１基を含む）である。

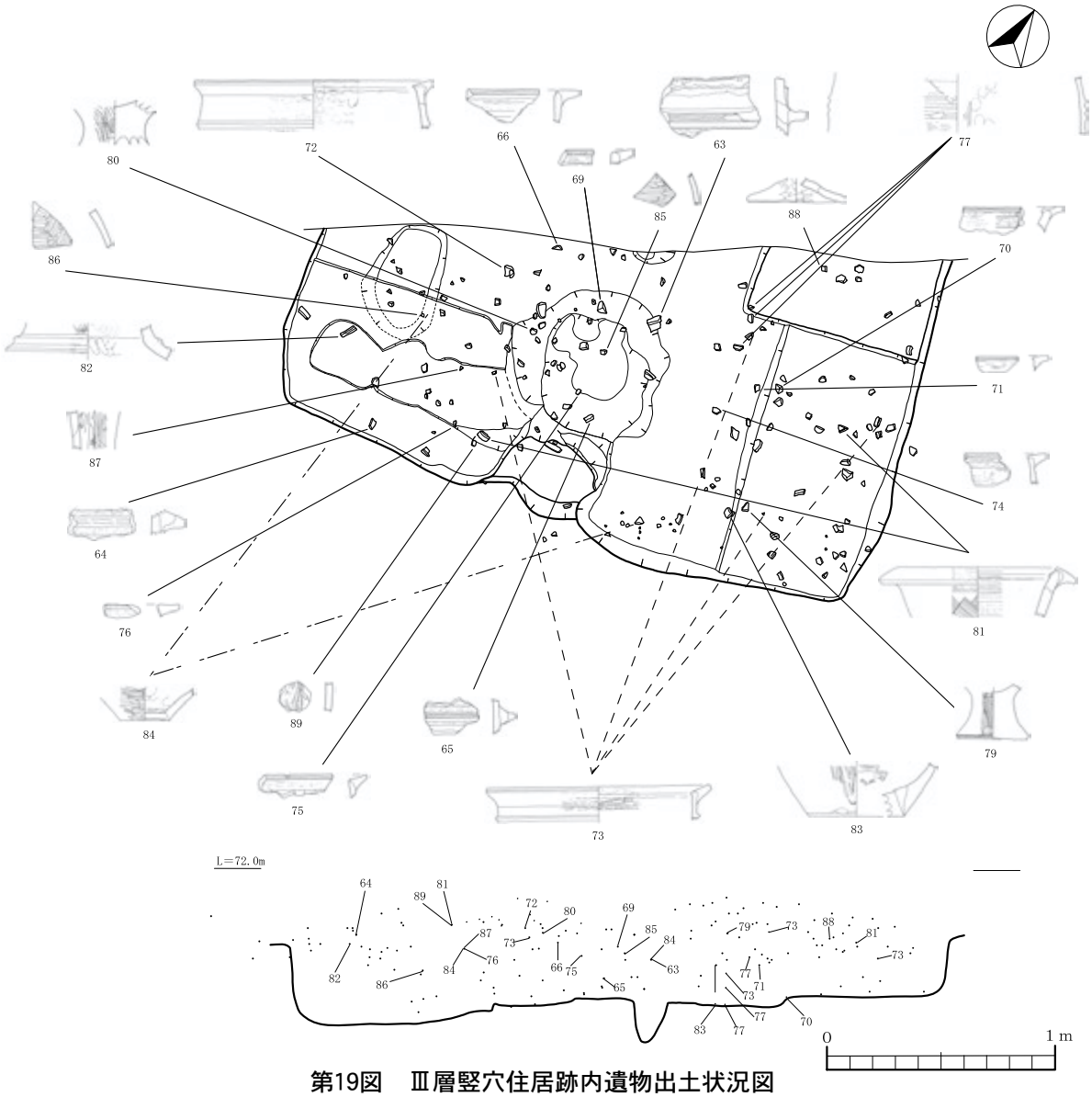
１　竪穴住居跡（第18～20図）

Ｃ－21・22区で検出された。検出状況から，本来は方形のプランを呈すると思われるが，プランの一部が調査区北側の市道直下に入り込むため，確認調査が行われていない。（前畑遺跡1990）で確認済みの住居祉２基同様，「床面に炭化木が多量に出土しており焼失家屋と考えられる」[1]。上場面計測では，略東西軸長に2.85m，略南北軸長については不明，最大深長は，0.61mである。東西にそれぞれ１面の張り床（高さ10㎝程度）が確認された。西側の張り床は，硬化面の中央部が土坑に向かって溝状に剥落して検出された。西壁直近の剥落部位は楕円形を呈しており，特に埋土を捉えることはできなかったものの柱穴跡の可能性が考えられる。北西側張り床面を剥がすと，土器１点を包含する浅い土坑が１基検出された。このことから，西側の張り床面は竪穴住居建築当初にはなく，使用過程で増築された可能性がある。北側調査区際の壁面直下（方形プラン面上，中心辺りか！）に柱穴が１基検出されたが，住居址中央に位置する主柱と捉えると，径が小さく深さも浅い印象である。プラン上の南西側には，住居址の検出面より４㎝程度低い位置に１段の階段状設備が確認される。床面に出土した炭化木を取り除くと，前述の階段状設備に接する位置に円形土坑が１基検出された。この土坑内埋土には灰白色の粘質化した土壌（灰か！？）が含まれ，炉跡の可能性が考えられるが，梯子柱跡等の可能性もある。階段状設備についても炉の通気口的用途を持つのか，梯子柱につながるものか竪穴住居跡の出入り口に相当するのか，円形工坑の位置付けにより複数の性格の可能性が想定される。なお，（前畑遺跡1990）では，同階段状設備を有する住居址は確認されていない。出土した炭化木は方形プラン上の中心軸からずれて倒壊しているが，断面上で確認された炭化木は方形プラン中央部に向けて倒れており，総合的に判断すると，「上屋構造が一本柱の可能性が高い」[1]と考える。出土炭化物中５点を放射性年代測定及び樹種同定にかけたが，その結果，^{14}Ｃ年代で「2140±20年ＢＰ」～「2085±20年BP」を得ており，住居址内出土遺物の大半を占める山ノ口式土器の時期（中期後葉）に概ね符合する。樹種同定については，５点中４点がシイノキ属ブナ科，１点がコナラ属アカガシ亜属とされる。シイノキ属（暖帯生息の常緑高木）にはツブラジイとスダジイがあり，重硬であるが切削等の加工はあまり困難でなく，建築材や器具材などに利用される点から，柱の一部である可能性が高いと思わ

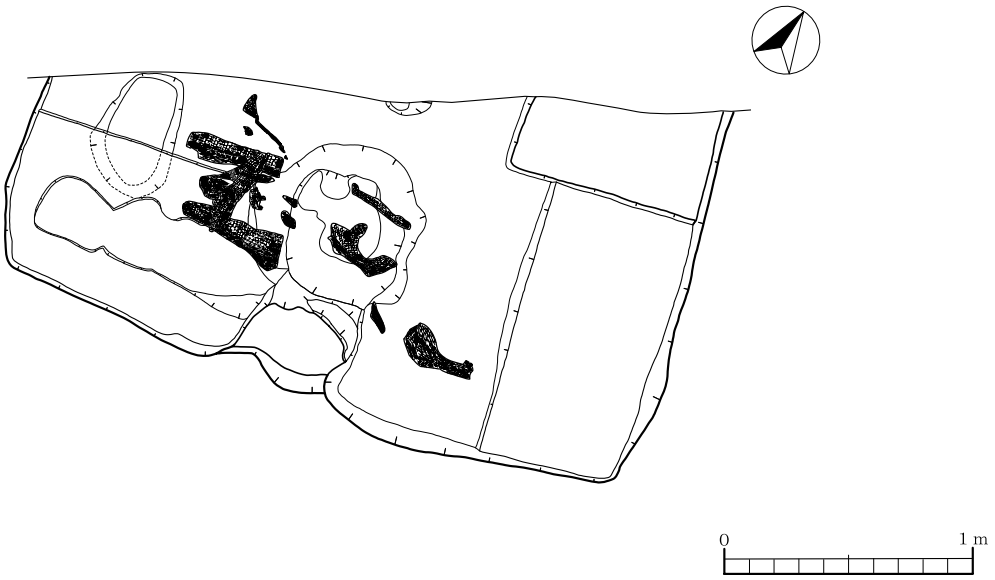


① Hue 10YR 4/2 パミスなし。
② Hue 10YR 2/2 パミスなし。
③ Hue 10YR 3/2 数mm～1cm弱のパミス（黄白色）が混じる。
④ 炭化材の炭片が層状をなす。
⑤ Hue 10YR 4/2 数mm～4cm弱の黄白色のパミス（Ⅳ層）が混じる。
⑥ Hue 10YR 4/3 〃
⑦ Hue 10YR 1.7/1 パミスなし
⑧ hue 10YR 4/3 ⑥に類似。黄白色のパミス（径数mm）が少量混じる。
⑨ Hue 10YR 1.7/1 パミスなし。黒色。
⑩ Ⅱ層 Hue 10YR 2/1 パミスなし。黒褐色。
⑪ Hue 10YR 3/2 黄白色のパミスなし。③に類似。
⑫ Uhe 10YR 5/3
⑬ ⑫に灰白色のやや粘質土が混じる。灰が粘質化したものと思われる。
⑭ ⑫にⅥ層（アカホヤ火山灰二次堆積層）が混じる。砂質土。
⑮ 黒褐色土に黄橙色の砂質土が混じる。
⑯ 基盤層。Ⅵ層（池田降下軽石が浮遊するアカホヤ火山灰二次堆積層）

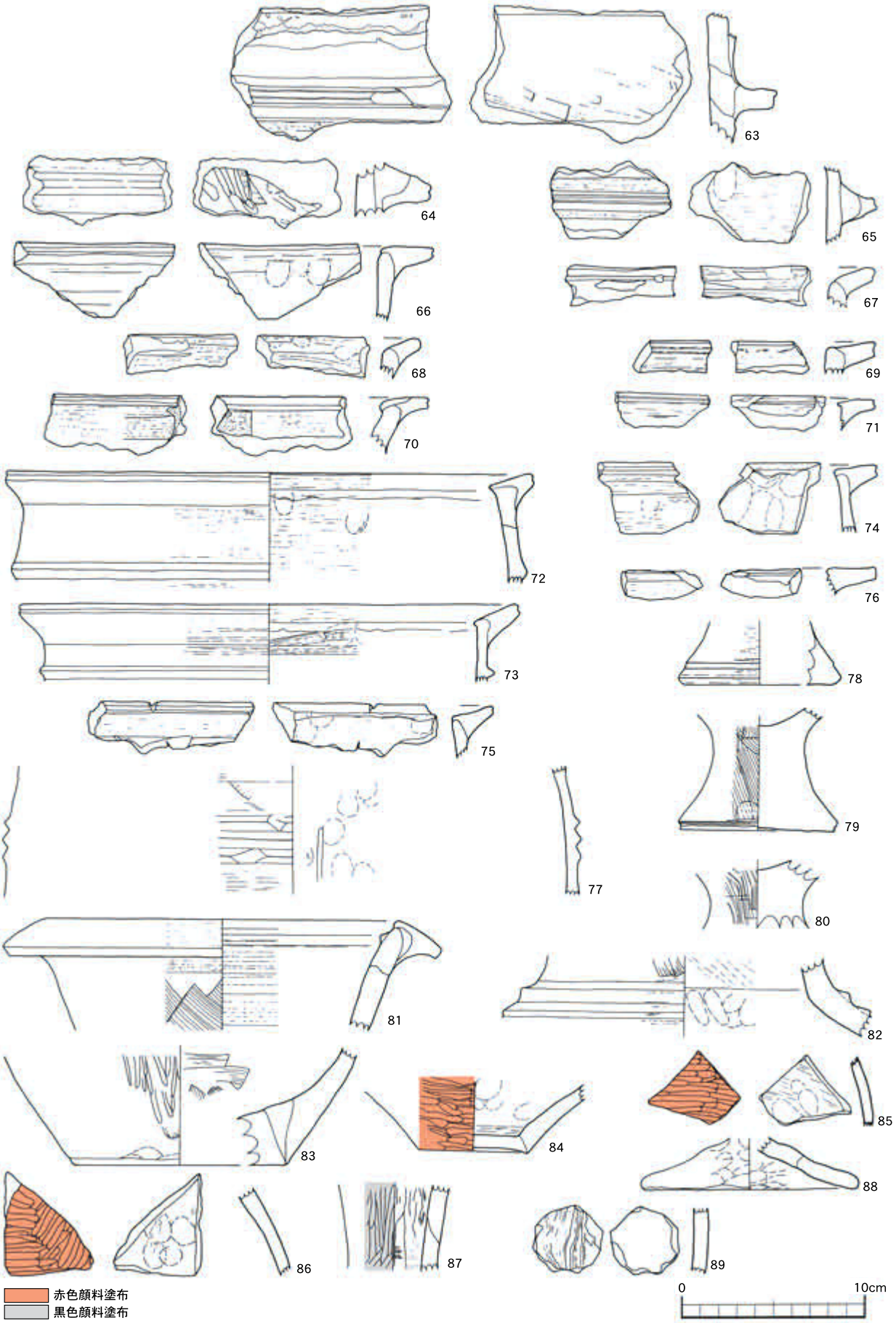
第18図　Ⅲ層竪穴住居跡実測図



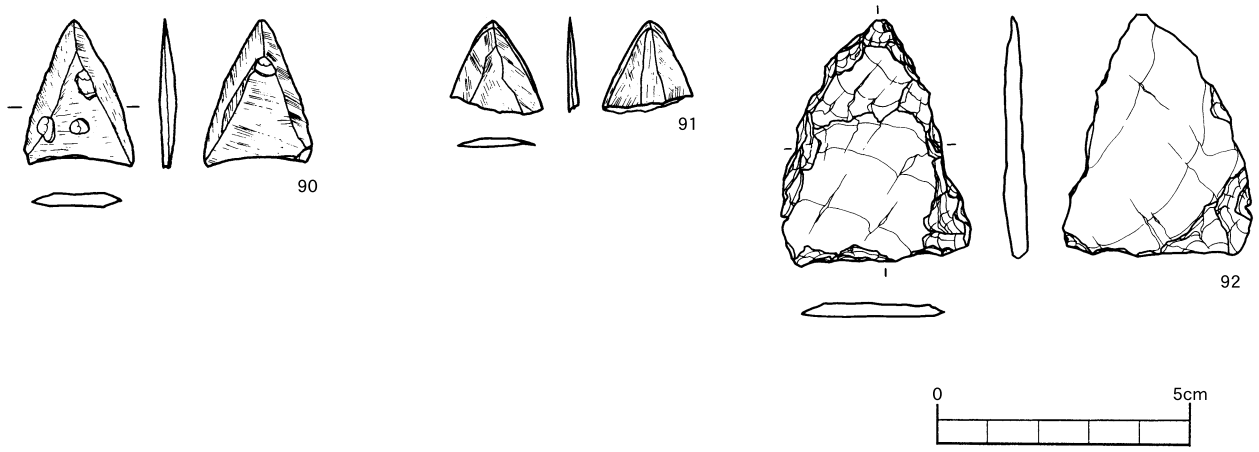
第19図　Ⅲ層竪穴住居跡内遺物出土状況図



第20図　Ⅲ層竪穴住居跡炭化材出土状況図



第21図　Ⅲ層竪穴住居跡内出土遺物実測図(1)



第22図　Ⅲ層竪穴住居跡内出土遺物実測図(2)

れる。一方，コナラ属アカガシ亜属（常緑高木）は弾性及び耐湿性があり農具として利用されることから，柱や梁等の他に農具の可能性なども想定できよう。なお，住居祉内からは総数47点の遺物（主に土器片）が出土している。

⑴　竪穴住居跡内出土遺物

①　土器・土製品（第21図－63～89）

63～65は大型の甕形土器の資料である。63は外に張り出す逆Ｌ字状の口縁部が剥落し，下位に二重口縁の下位の突帯を残す。剥落した口縁部の接合面には粗整形段階時の胴部表面がむき出しになっており，口縁部作出の過程が明瞭に捉えられる。粗整形の時点で，ナデにより直行する口縁を作出し，丁寧な断面方形状に整形している。その後，逆Ｌ字状に口縁部の張り出しを添付し，表裏面に粘土を塗り重ねて仕上げている。64・65は二重口縁の下位の突帯部の小片である。

66～76は甕形土器の口縁部である。66～69は口縁部が逆Ｌ字状に外反し，口縁部上面がフラットである。口縁部内側に張り出しをもたない。70の表面右側及び裏面左側に粘土の貼り付け痕が確認される。これは，製作途中（火入れ前の乾燥途中か!?）に口縁部にひびが入り，粘土を貼りつけ補修した痕跡と思われる。76は，剥落した口縁部の小片である。胴部との接着部（内面側）にナデが確認され，口縁部のパーツをナデ等により整形し胴部に添付後，粘土を塗り重ねて補強した工程が捉えられる。72～75は口縁部がやや外反し，口縁部内側に張り出しを有し，口縁部平坦面は若干凹みを呈する。

77は，３条の突帯を有する胴部資料である。

78・79の底部周縁部には，沈線状の凹みが１条入る。79・80には，縦位のハケ目調整が顕著に残される。79の底部中央部は微妙に凹みを呈し，指ナデによる整形痕が確認される。

81～86は壷形土器の資料である。81・82の胎土には金雲母が多量に含まれる。81は内径17㎝程の資料で，口縁部上面が下垂し，口縁内面側には１条のステップ状突帯が巡らされる。口縁部外面直下には，口縁部の張り出しと胴部の貼付け痕が明瞭に残される。82は，頸部に２段以上のステップ状突帯を巡らしていたと思われる。上段のステップの内径は12.５㎝程度あり，比較的大型の壷形土器であったことが推定される。

83は底部資料である。底面では，ナデ調整後下方から４㎝程度上方に，ナデ調整後に施したミガキ痕が捉えられる。内面では，斜位のハケ目調整後，ミガキにより調整を施したと思われるがミガキ痕は捉えられなかった。

84～87には赤色顔料が塗布されている。84は底部資料で，やや上げ底を呈する。外面には分割ミガキ[3]が密に施されている。一方，内面には指オサエが顕著に残され，底部と胴部の接着面にはナデが巡る。本遺跡出土の他の資料とは異なり，雲母が顕著

でなく，色調も黄白色と土師器に類似する。84～86の３点は，調整手法や胎土の質感から，北部九州系の須玖Ⅱ式新段階の壷型土器と考えられる。須玖式土器は，（前畑遺跡1990）－ 525～527で，袋状口縁長頸壷として報告されており，出土区も近接地にあたることから，同一個体若しくは同類品の可能性がある。北部九州に典型的な袋状口縁長頸壷は頸部に暗文を施文しないが[4]，本遺跡出土の同資料－155・156には頸部の暗文が捉えられることから，製作地としては，北部九州の極周辺部か熊本・長崎が候補地として挙げられる[4]。

87は高杯の脚部の可能性がある。外面には縦位のミガキ痕が顕著で，内面にはシボリ痕が縦走する。色調が全面的に黒色を呈し，金雲母を含む。

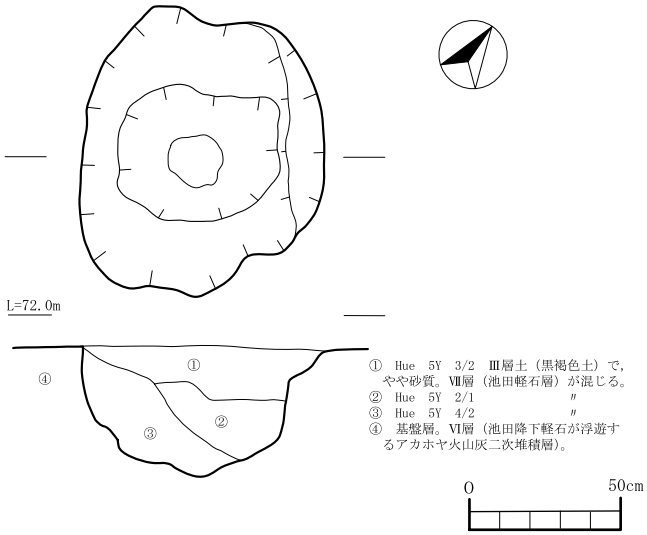
88は，復元径が12㎝程度の手づくね円盤形土製品である。使用痕やスス等用途に結びつく特徴は確認されない。裏面中央部を円形状の範囲で，何度も指オサエを施した結果，裏面内側部分が特に上げ底状に窪んでいる。これが，用途に係るものかアクシデンタルなものかは判断できない。

89は，胴部再利用によるメンコ形土製品の可能性がある。周縁部を打ち欠き，部分的に磨滅が見られることを根拠とする。

② 石器・石製品（第22図－90～92）

１ 磨製鏃

90は完形品であり，91は欠損品である。共に周縁部から丁寧な研磨が施されている扁平磨製石鏃である。（前畑遺跡1990）を含めて，本遺跡出土の磨製石鏃は全て同時期の一般的な鉄鏃同様の器形を呈している。92には磨製石鏃の未製品の可能性を捉えた。ぬめっとした光沢感のある淡緑色を呈する頁岩であり，Ⅲ層出土石器－164（石鏃未製品!?）の石材に



第23図 Ⅲ層土坑実測図

極似している。同一母岩から採取された可能性もある。

２ 土坑（第23図）

Ⅲ層相当の土坑が１基，B･C－22区内の竪穴住居跡南西側６m程の近隣から検出された。上面プランは不定型な隅丸方形（長階円）を呈し，最大深長は42㎝程である。埋土中には遺物，焼土や灰，炭等は確認されない。

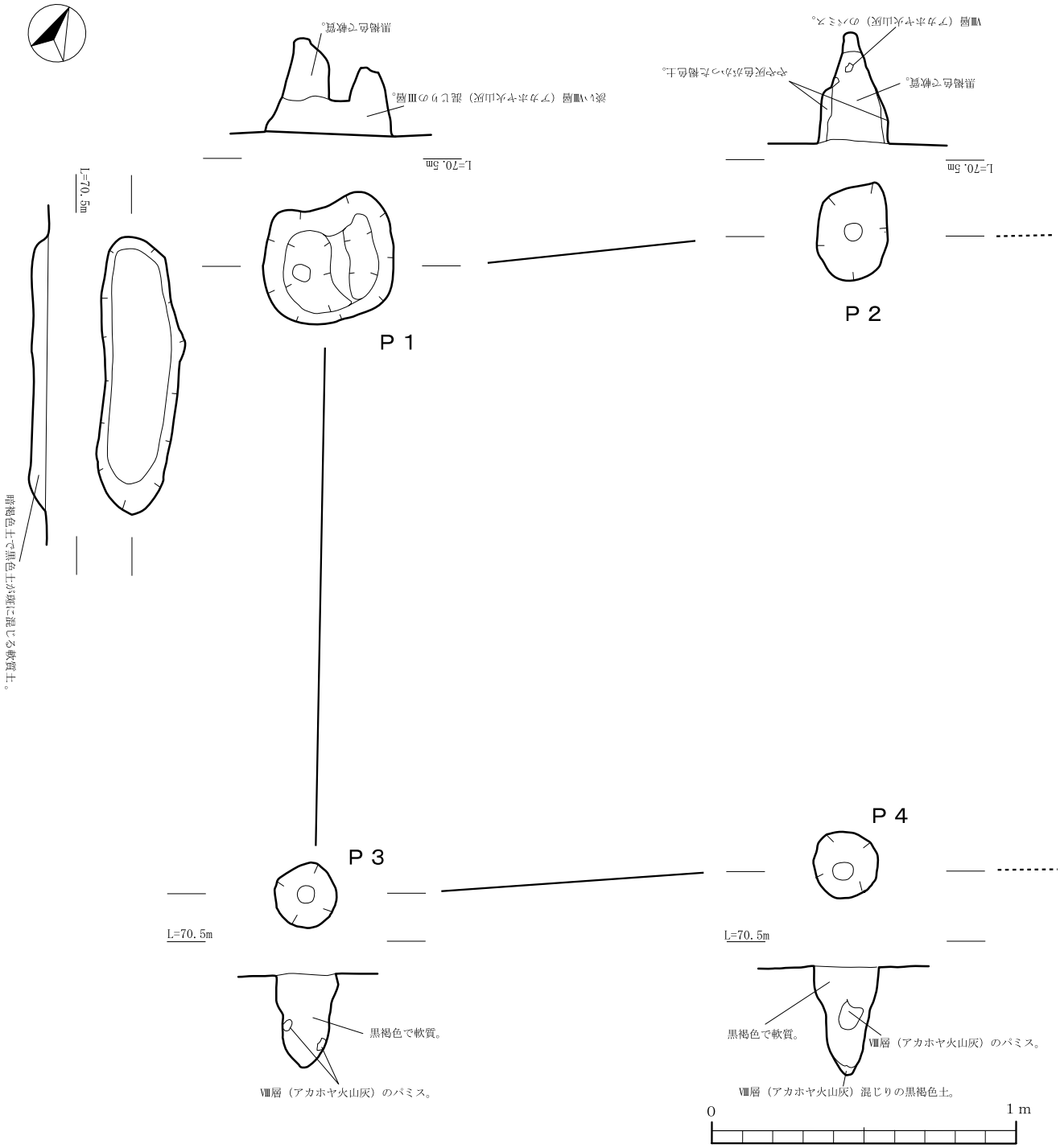
３ 掘立柱建物跡（第24図）

掘立柱建物跡は，C－18区で検出された。梁間は１間と確認されるが，桁行間は不明である。主軸をN－82°－Eの略東西方向に向ける。掘立柱建物跡の梁間西側に，深さ５㎝程の浅い溝状遺構が確認される。（前畑遺跡1990）には北側桁行間の外側に溝状の落ち込み部分をもつ２軒の掘立柱建物跡が報告されており，本遺構とは溝状遺構の位置に相違が見られる。なお，本掘立柱建物跡及び付属の溝状遺構には，遺物は確認されない。

第６表 Ⅲ層掘立柱建物跡一覧表

P：柱穴　　単位：㎝

出土区	主軸方向	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ
C-18・19	N-82°-E	W 不明 E 1間1.9	N－不明 S－不明	不 明	1 2	40×36×30 30×22×34
梁間柱間		梁間間	桁行柱間	行行間	3	20×20×30
P_1－P_3：190		P_1－P_3：190	P_1－P_2：160 P_3－P_4：160	不 明 不 明	4	20×22×34



第24図　Ⅲ層掘立柱建物跡実測図

第３節　遺物

１　土器・土製品

⑴　土器分類の概要

Ⅲ層出土の土器は，C－18～24区の掘立柱建物跡や竪穴住居跡の周辺域を中心に出土している。

大型甕，甕形土器，壷形土器，丹塗土器などが確認されるが，主体は甕形土器である。山ノ口式土器と称される土器群が中心と考えられ，時期的には弥生時代中期後葉から後期に相当すると思われる。

形態的特徴により，大型甕，甕形土器，壷形土器，丹塗土器，高杯等，土製品の６つに大別し詳述する。

⑵　大型甕（第25図－93・94）

一般的には，大型甕は口径が40～50㎝の比較的大型のもので，口縁部下位にも口縁部と同様な突帯を有する資料群を指す。しかし，（前畑遺跡1990）同様に，本遺跡では口径20㎝程度の小型のものも見られるが，二重口縁の器形を指標として，本類に含めて報告する。

93・94は二重口縁下位の添付突帯の資料である。93は接合面が綺麗に剥落した資料で，胴部との接合面には指ナデが見られ，接着効果を高めるためとも考えられる凹凸が捉えられる。94は添付突帯の表面左側が部分的に剥落している。これにより，胴部側の接合面が捉えられ，器面全体を丁寧に整形後に突帯を添付していることが見て取れる。

⑶　甕形土器（第25～27図－95～135）

一般的な甕形の資料群である。（前畑遺跡1990）には，甕形土器に類似する器形中，口径の小さい資料群を鉢形土器として取り扱っているが，口径等復元できない小片も多いことから，本稿では全て甕形土器として述べていきたい。当期の土器編年の重要な指標の一つに口縁部の傾きが挙げられることから，本稿甕形土器の細分類でも，口縁部の傾きを中心に口縁部形態や内面の張り出しを観点とした。また，口縁部と胴部の接合部（以降口縁接合部と呼称。）を観察すると，口縁接合部がシャープな角を有する逆Ｌ字状のものと，ぼてっと厚みを持たせ逆Ｌ字がルーズなものとに識別できる。口縁部の張り出しを固着させるために粘土を付け足して補強する工程の有無に起因すると考えられる。口縁部の張り出しが立ち上がる資料ほど口縁接合部の厚みが増す傾向が見られることから，口縁接合部の厚みも細分類上の観点に加えた。なお，一般的に該期の資料中には，口唇端部が平坦なものや沈線を巡らすものがあるが，本遺跡では深浅の程度はあるが，沈線を巡らすものが殆どである。また，いずれの甕形土器も胴部突帯作出に際し，最終的に突帯直上をナデ調整し固着することにより，突帯の断面三角形が下垂気味である。古墳時代の甕形土器群が一般的に胴部突帯直下をナデ調整し固着させるのとは相違がある。

第７表　Ⅲ層甕形土器口縁部形態分類表

（イ）類	（ロ）類	（ハ）類	（ニ）類	（ホ）類

①　口縁部

（イ）口縁部が逆Ｌ字状に外反し，口縁部内面に張り出しをもたないもの。（95～100）

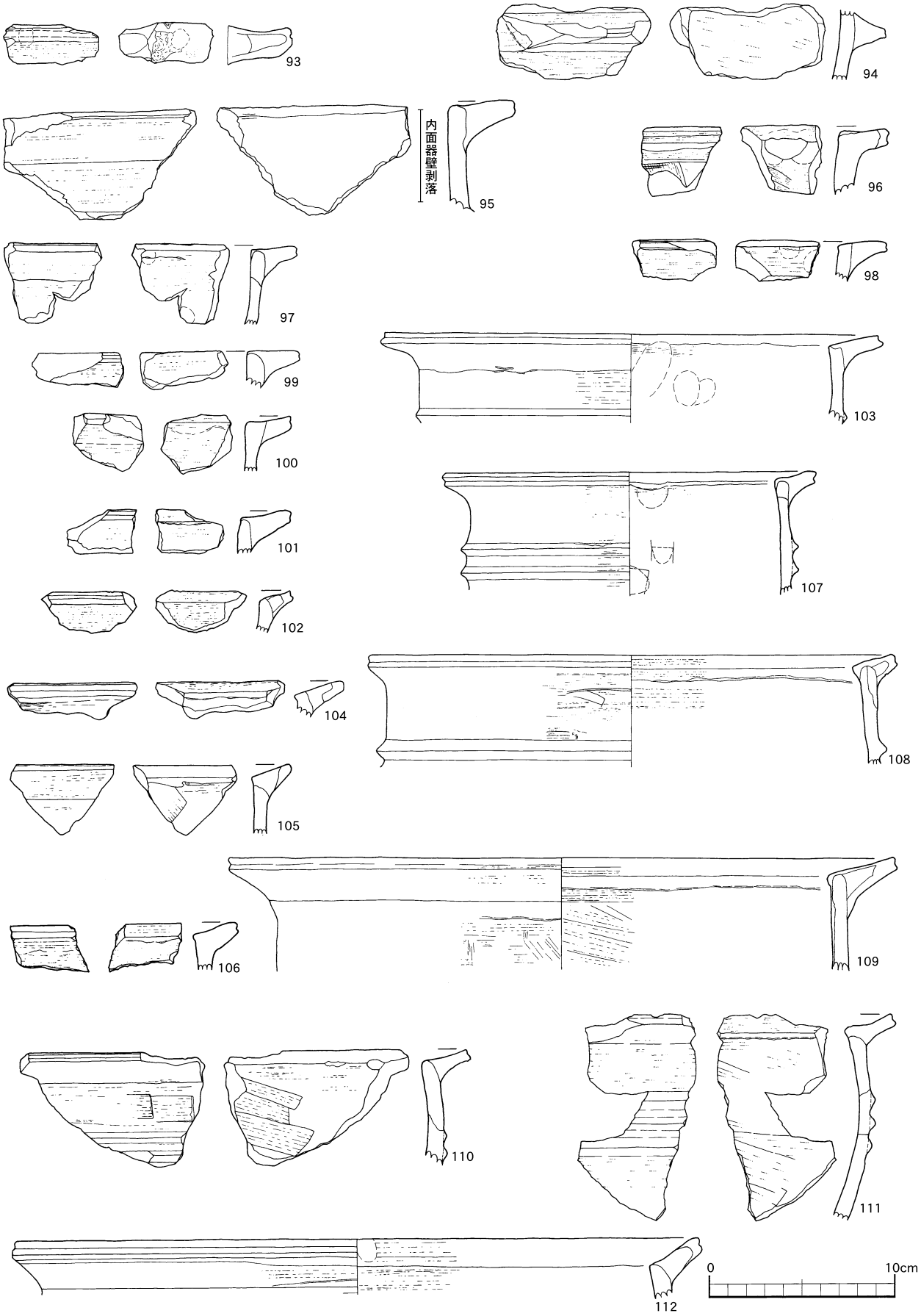
95～99は，口縁部上面がフラットである。95～97は，口縁接合部が厚くなくシャープで，98・99はややぼてっとしている。95は口径が他の甕形土器に比して大きいと思われ，胎土にも重量感がある。壷形土器などの内面に確認される剥離が存すること（水等の液体との一定期間の接触に起因か！？）やススの付着が確認できないことから，機能的に貯水用器に類する可能性も考えられる。97は金雲母が多量に含まれる。100は，口縁上面がやや凹みを呈する。いずれも口縁部接合部は厚くなくシャープである。

（ロ）－１　口縁部がやや立ち上がり，口縁部内面に張り出しをもたないもの。（101～103）

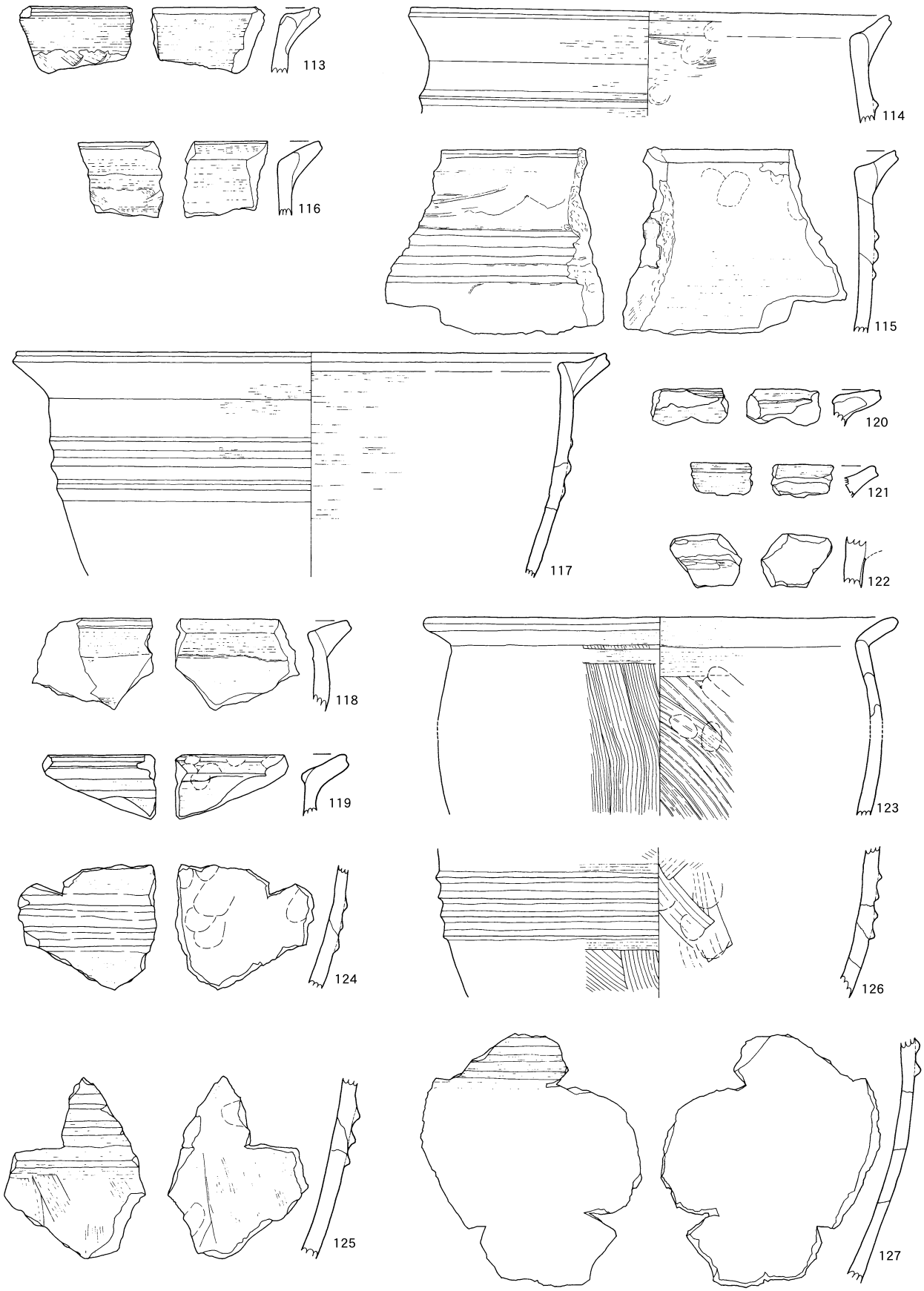
101は口縁部上面が凹みを呈するのに対して，102はフラットである。103は口縁部接合部が厚くなくシャープで，101・102はややぼてっとしている。102は口縁部幅が２㎝弱と小さく，口唇端部の断面観上，上唇に対し下唇がややせり出す印象である。

（ロ）－２　口縁部がやや立ち上がり，口縁部内面に張り出しを有するもの。（104～113）

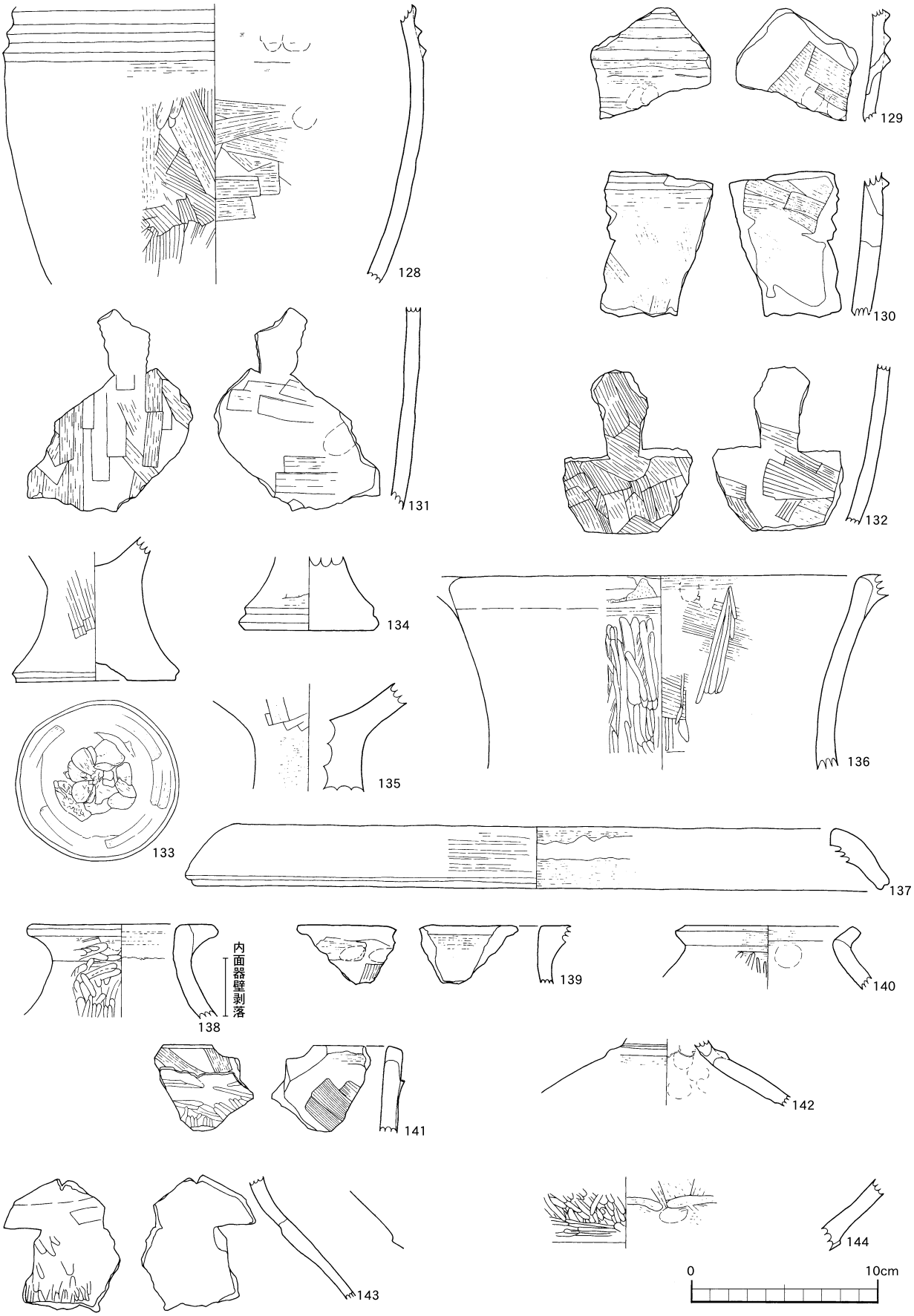
102は内面の一部にポジティブな張り出しが見られる。110～112は口縁接合部がシャープで，105・113はやや膨らみが感じられる。この類の中で，特に105は胴部器厚が５㎜程度と薄く，口唇端部に沈線を巡らさず，断面がやや舌状を呈する。106には，口縁部と胴部接合の際の微細な隙間が表面に残されている。109は胎土に金雲母を多量に含む。口縁部と胴部接合面の隙間が，表面にもライン状に明瞭に残される。口縁上面の内面稜線から５㎜程外側には，



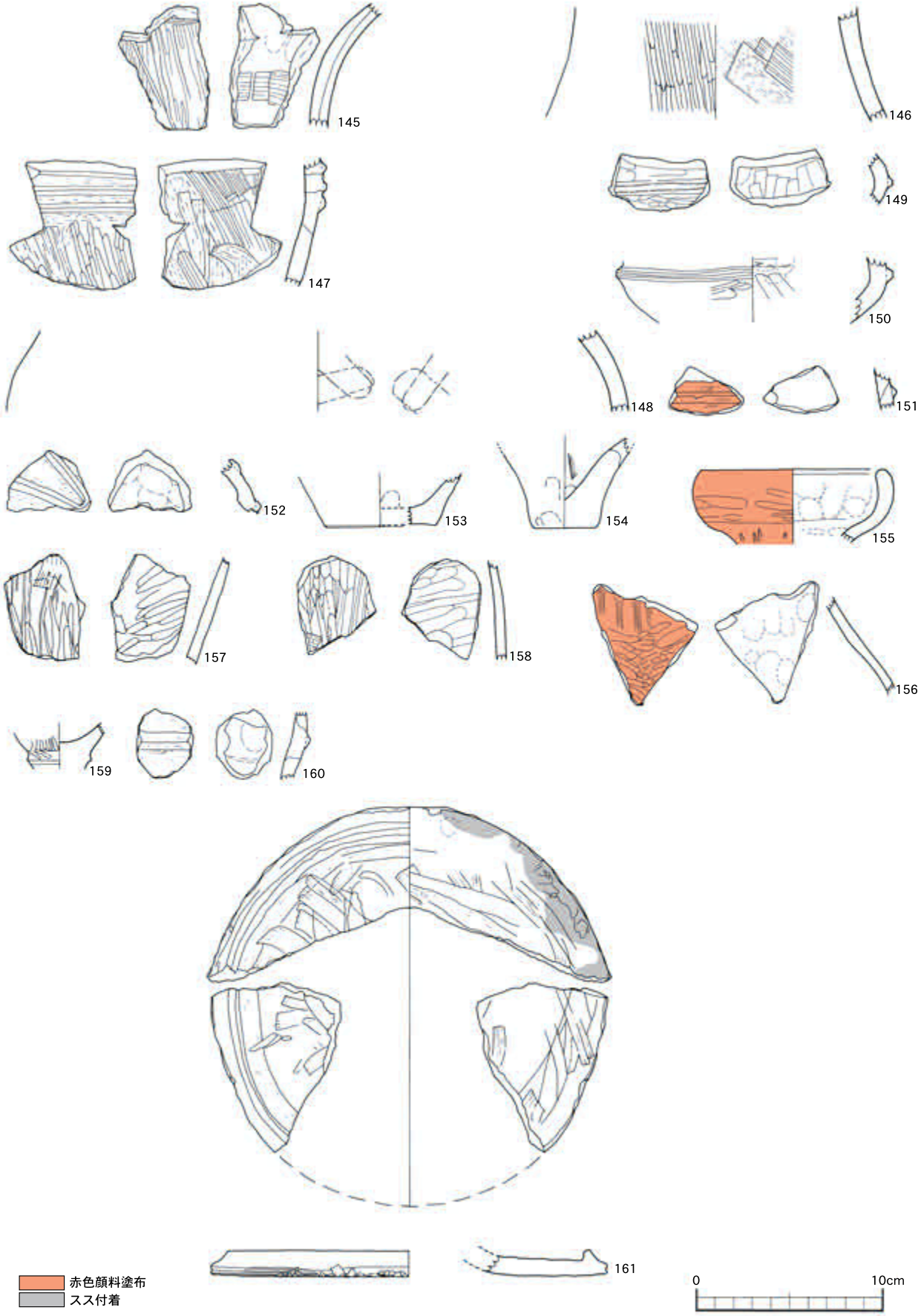
第25図　Ⅲ層土器実測図(1)



第26図　Ⅲ層土器実測図(2)



第27図　Ⅲ層土器実測図(3)



第28図　Ⅲ層土器・土製品実測図(4)

ナデにより胎土中の小礫が移動した痕跡が１条沈線状に巡る。110～113は，口縁部上面が凹みを呈し，口縁接合部がシャープである。

110は口縁部及び突帯の下方に，111は口縁部下側に，使用によるススが付着している。

（ハ）口縁部が立ち上がり，口縁部内面に張り出しを有しないもの。（114～116）

114・115は，口縁部上面が凹みを呈する。いずれも口縁接合部が膨らみ，接合面が微細な凹凸や稜線，隙間等で表面上にも観察される。115は表面右側及びその裏面側に，粘土接着痕が縦に付着している。土器製作過程で（恐らくは自然乾燥中に!?）ひび割れを起こした箇所を補強した痕跡と思われる。

（ニ）口縁部が立ち上がり，口縁部内面に張り出しを有するもの。（117～119）

117は，口縁部上面の立ち上がりは弱いが，口縁部下面は比較的傾斜を示すため本類に含めた。118は口縁部上面がフラットで，117・119は凹みを呈する。口縁接合部については，119はシャープで117・118は厚みがある。118は，内面上位に横走する1.5㎝程の指ナデが明瞭に残される。恐らくは，口縁部と胴部接合時に内面側に張り出した粘土を，ナデにより均した痕跡と思われる。117は胎土に金雲母を多量に含む。突帯の稜線突端部を指等でなでて整形したことにより，微妙に断面台形状を形成している。

（ホ）接合面露出の資料（120～122）

120・121は，口縁部が胴部から剥離した資料である。接合面にナデが確認されることから，口縁部についても粗整形を施した後，胴部に添付していると考えられる。接合面の上下位に剥落時の欠損が見られることから，口縁部を胴部に添付した後，更に上から粘土を塗り重ねて接着効果を高めていることが分かる。122は口縁部の張り出しが綺麗に欠落し，胴部の接合面が顕現している資料である。粗整形段階では，胴部から口縁部まで器形を直行させている。接合面に丁寧なナデが確認されることから，粗整形段階の時点においても，丁寧に整形及び器面調整を施していることが分かる。接合面直下の胴部には，２㎜程の厚みで粘土を塗り固めている様子が確認できる。口縁部張り出しを添付する段階で，添付の補強効果を意図して粘土を塗り重ねている。

（ヘ）その他（123）

前述までの甕形土器とは，口縁部の張り出しの形態，器面調整の手法，胎土等に相違が見られる資料である。類似資料が，（前畑遺跡1990）の２号竪穴住居跡から出土している。本稿では唯一の出土である。前述の山ノ口式土器群が明橙色や茶褐色を呈していたのに対し，胎土は淡黄白色を呈する。器厚については，１㎝を超える前述の資料群に対して，本資料は５㎜強と薄い。外面の器面調整については，ナデを主体とする前述資料群に対して，縦位のハケ目が胴部から口縁部直下に至る。このハケ目は，「粗い刷毛目状条痕仕上げ」[1]と特徴的であり，針葉樹を工具とするハケ目調整の可能性が指摘されている[4]。口縁部直下には８㎜程度幅のナデを巡らす。内面の調整は，手法的には外面に似るが，ハケ目を斜走させ，口縁部上位で横ナデを巡らして仕上げる。口縁部の張り出しについては，前述の資料群が，胴部に逆Ｌ字状に粘土紐を添付させて口縁部を作り出すのに対して，この資料は，直行する胴部の器面を外側に折り曲げて（外反させて）口縁部の張り出しを作り出し，口唇端部を丸く舌状に仕上げる。これは須玖Ⅱ式の最後の段階の遠賀川以西系の特徴と言え，外来系と考えられる[4]。他に，突帯を持たない点なども相違点として挙げられよう。以上のように，前述の資料群とは違いが大きく，当該調査では胴部下半～底部の資料は確認されていないが，（前畑遺跡1990）によると底部は平底であることが確認されている。胎土に角閃石とみられる大粒の鉱物等各種有色鉱物が含まれることに加え，底部が分厚く内面に平坦面を有しない点などが北部九州の典型例と異なり，南筑後など北部九州の周辺部での製作の可能性を指摘する意見もある[4]。胴部上半部の最も膨らみを呈する部位にススの付着が顕著であることから，

煮炊き道具としての使用が確認される。

② 胴部（第26・27図－124～132）

124・125は３条の突帯を有し，126は４条の突帯を持つ。128～130の突帯の条数については，突帯部の欠損品のため不明である。124～125は突帯の上部をなでることにより突帯の固着を図っており，結果的に断面観が下垂気味の三角状である。128～130の突帯頂部は鋭いエッジを形成し，綺麗な断面三角形である。128は胴部下半に縦・斜位のハケ目調整を施し，129・130は，器面上はミガキ痕が確認されないが，表面に光沢感がある。共に，胎土に多量の金雲母を含む。131・132は突帯が確認されない胴部資料であり，金雲母が多量に含まれる。131は浅めの，132は明瞭なハケ目の条線を，外面では縦・斜走させ，内面では横・斜走させている。

③ 底部（第27図－133～135）

胴部同様，金雲母を多量に含む。いずれも充実の脚部である。133の底裏面中央には凹みが残される。脚部製作時に板状の粘土を筒状に丸めて整形する段階で生じた凹みを，粘土を継ぎ足して埋めなかった結果，凹みが残されたものと思われる。凹みには指オサエが顕著であり，その外側には，円弧状の指ナデが追走している。133・134とも底面周縁部に１条の沈線を巡らせる。

⑷ 壷形土器（第27・28図－136～154）

壷形土器の出土は，本遺跡では総点数174点である。器形上，三つの形態に分類できる。一つ目は，逆Ｌ字状の口縁部を下垂状に弯曲させるタイプ（ａ）である。復元口径より，比較的大型の器種と想定される。二つ目は，逆Ｌ字状の口縁部が真横に伸び，上面が綺麗な平坦面を形成するタイプ（ｂ）である。三つ目は，逆Ｌ字状の口縁部が斜めに立ち上がるタイプ（ｃ）である。

（ｂ）と（ｃ）は復元口径より小型の器種と考えられる。

① 口縁部（第27図－136～142）

（ａ）逆Ｌ字状の口縁部を下垂状に弯曲させるタイプ。

136・137が該当する。136は，内外面共にミガキにより器面調整を施し，光沢感を伴う。復元口径が25㎝を超え，頸部から口縁部にかけて大きく開くラッパ状の器形が想定される。口縁接合部の部分的剥離により，口縁部張り出しの作出の仕方がうかがえる。甕形土器122同様に，粗整形段階で丁寧なナデによる整形を施していることが分かる。口縁部張り出しを添付した後，全体的に粘土を厚く塗り固めるようにして口縁部の固着化及び仕上げの器面調整を施している。137は下垂する口縁部の資料である。復元口径が35㎝程度と，極めて大型であった可能性がある。なお，（前畑遺跡1990）には，３号竪穴住居跡出土資料中，復元内径が23㎝程度の同種の口縁部資料が出土している。

（ｂ）逆Ｌ字状の口縁部が真横に伸び，上面が綺麗な平坦面を形成するタイプ。

138・139が該当する。このタイプの資料は，（前畑遺跡1990）では確認されなかった。138は，復元内径が5.5㎝程度の小型壷と思われる。器面調整はミガキであり，内面には，口縁部２㎝程度直下から器壁剥落が見られる。138・139は，胎土や調整，内面の器壁剥落の近似性から，同一個体の可能性が高いと思われる。

（ｃ）逆Ｌ字状の口縁部が斜めに立ち上がるタイプ。

140のみの出土である。他の壷形土器同様，ミガキにより器面調整がなされ，復元内径が７㎝程度と小型である。

141は，逆Ｌ字状の張り出しが剥離した口縁部の資料である。粗整形段階の丁寧なナデによる整形が明瞭に確認され，口縁部張り出しを添付した後，全体的に粘土を厚く塗り固めるようにして口縁部の固着化及び仕上げの器面調整を施している。小片資料のため傾き等は不明であるが，外面はミガキ痕が顕著に認められ光沢感を伴う。

② 頸部・胴部（第27・28図－142～152）

142は頸部に１段のステップ状の突帯を有する小

型の壷形土器である。143は頸部に突帯を有しない胴部上半の資料である。142～146のいずれも，外面にミガキ調整を施す。144・145はミガキ調整や胎土の色調，光沢感等質感が近似しており同一個体と思われる。一定の長軸長を有することや，器面調整の仕方や器厚や胎土の質感が136とも類似していることから，大型壷の一部である可能性が高い。なお，144は下部に若干の断面方形状の突帯が添付され，据え置き方としては天地逆の可能性もある。146・148も口縁部を有しないので断定はできないが，残存する頸部から導き出される復元径は，大型壷の可能性を示す。147は外面の光沢感が特徴的である。光沢感を持ち，調整にハケ目が残される胴部資料は甕形土器に含めたが，本資料の胴部下半には丁寧なミガキ調整が施されることから，壷形土器に含めた。149・150は断面観が横方向に長い楕円状の小型の壷型土器である。外面には丁寧なミガキが施され，内面には工具痕が残される。外周を巡る突帯の中央部は沈線状に凹みを呈する。152は，小型の壷形土器の胴部上半の資料である。紐状添付により三角形状の文様を構成している。本調査で２点確認され，（前畑遺跡1990）では確認されていない。据え置き方については，接合線に即して欠損した可能性を鑑みて設定したため，実際とは異なる可能性がある。

③　底部（第28図－153・154）

いずれも壷形土器若しくは鉢形土器の底部と思われる。153の底部外径の復元径は６㎝とやや広く，内面は径4.5㎝程度の綺麗な平坦面を有する。一方，154の底部外径は3.5㎝と小さく，内面には平坦面を有しない。

⑸　赤色土器等（第28図－155～158）

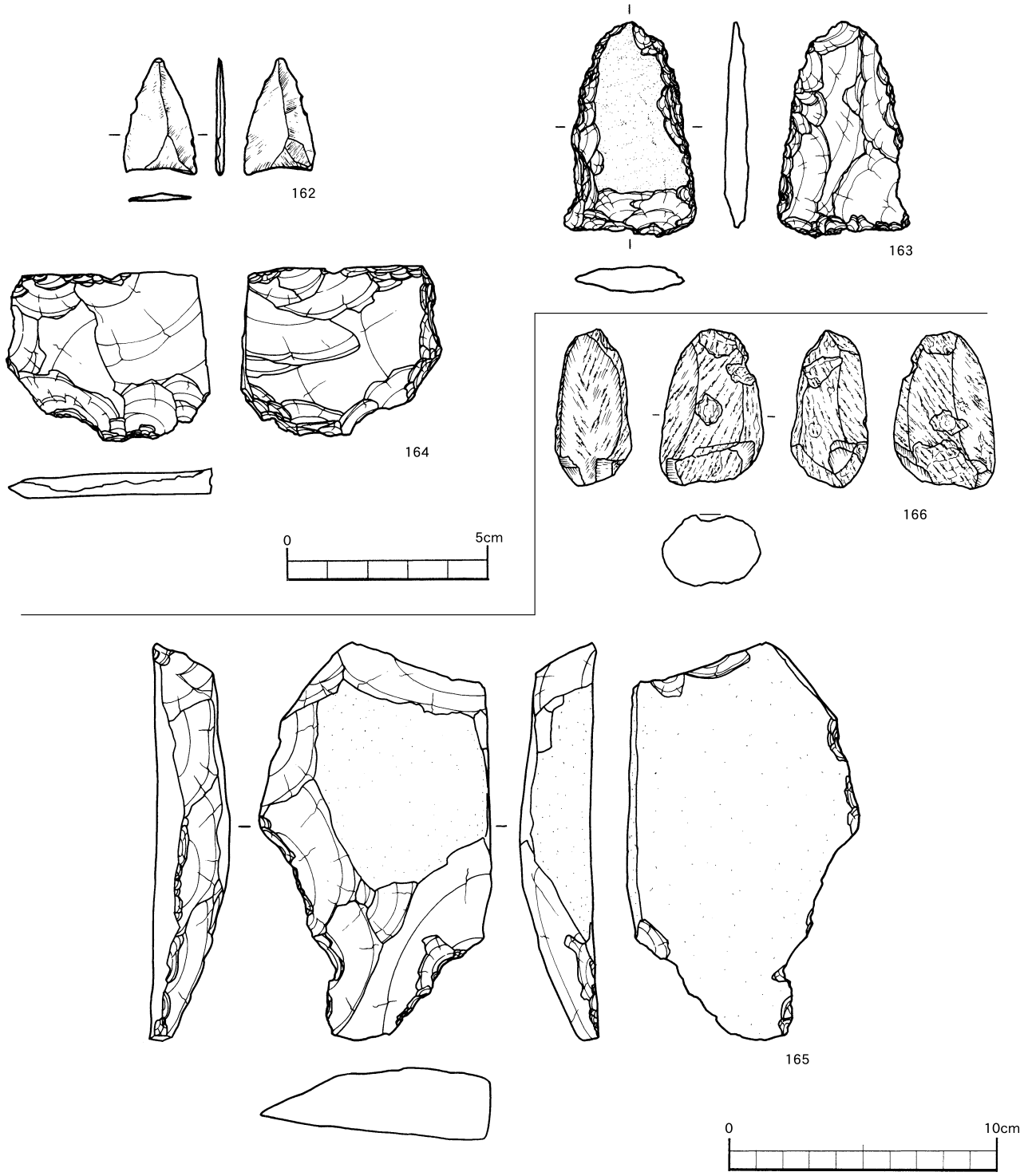
155は表採資料であるが，袋状口縁の貴重な資料であり，156と同一個体の可能性がある。156の上位には微妙に縦位の暗文が確認され，暗文施文直下には，分割ミガキ[3]が施される。淡黄白色を呈する胎土や分割ミガキの手法から北部九州系の須玖Ⅱ式土器の可能性がある[4]。袋状口縁の暗文施文については，長崎などに類例が見られるようであるが，関係性は不明である。これら資料の調整等の近似性や出土区の近接状況から，竪穴住居跡出土遺物84～86及び（前畑遺跡1990）－ 525と同一個体の可能性が考えられた。そこで，出土内遺物84と155の胎土分析を行ったところ，少なくとも同一の胎土を用いたと考えられる極近似値を得た。157・158は器厚が６㎜と極薄で，胴部資料と思われる。同一若しくは類似する口縁部や底部資料を見出すことはできなかった。赤色顔料等は目視上確認されず，胎土分析の結果も他の須玖Ⅱ式土器資料とは異なり在地資料に包含される値を示し，在地系土器の可能性を見る。

⑤　高杯等（第28図－159）

159は，高杯若しくは小型甕の脚部の可能性がある。脚部に微隆起状の屈曲部を巡らし装飾性を醸成していることから，高杯として捉えたい。杯部の器形から，本来の杯部は碗状を呈していた可能性が考えられる。

⑥　その他（第28図－160）

突帯を有する160は甕形土器の胴部の小片である。楕円形状に欠損し，縁辺には磨滅痕（使用痕！？）が確認されることからメンコ状土製品の可能性として捉えた。しかし，一般的なメンコ状土製品の表裏面が平坦であるのに対して，本資料はやや丸みを呈し疑問点も残る。161は（前畑遺跡1990）２号住居址内出土遺物－416と接合した。「円盤状の裾拡がりの脚部」[1]と紹介されているが，本稿では復元口径22㎝程度の甕形土器の蓋として取り扱う。その根拠として，ススが裏面外側部分から外縁端部にかけて付着することに加え，外縁下端部に集中的な欠損・剥離が見られることが挙げられる。これは甕本体の口縁部との頻繁な接触により生じた可能性が考えられる。他に，裏面の外側と内側では色調の相違が円弧状に横走することから，使用時の甕形土器との接触による温度の相違が，胎土の色調変化をもたらした可能性も付加したい。外縁表面端部を巡る三角突帯が特徴的であり，極めて珍しい資料である。突帯



第29図　Ⅲ層石器実測図

添付後，固着化を意図して周縁にナデを巡らすのは，甕形・壷形土器の突帯添付の手法に類似する。裏面が鏡面状に極平坦であるのは，整形時に平坦な板状の材を敷き，その上で粘土を押しつけながら整形を施したためと考えられる。

2　石器・石製品

⑴　石器分類の概要

弥生時代中期の石器は，少量ながら土器同様にC－19～24区のⅢ層を中心に出土している。同包含層からは，中期後葉に比定される山ノ口式土器や須玖

式土器等が出土しており，共伴関係にあると考えられる。出土器種は，磨製石鏃，軽石製品である。Ⅲ層出土石器には剥片等も殆ど確認されず，製品も８点と少量である。Ｘ層の右材は頁岩系ホルンフェルスが主流であったが，Ⅲ層出土の石材の殆どが頁岩であるのは，出土遺物が磨製石鏃等剥片石器が中心であるためであろう。

①　磨製石鏃（第29図－162～164）

162は磨製石鏃の完形品である。163・164は未製品と捉えた。いずれも竪穴住居跡の近隣で出土した。163・164と竪穴住居内出土92はぬめっとした頁岩で，光沢感及び淡緑色の色調等酷似することが，共に磨製石鏃の未製品と捉えた理由である。磨製石鏃164→163→162の大きさの相違は，磨製石鏃の製作過程を示唆するものと考えることができる。周縁部を粗い剥離により大まかな整形を施したのが164・163であり，磨り研く過程を経て162の器形に至ると捉えうる。なお，164については，その器形及び側縁の１か所に微細な調整痕が確認されることから，石包丁の可能性もある。

②　礫器（第29図－165）

主に表面側からの剥離により刃部を作出する一方，自然面（右側面）を基部として利用したと考えられる。部分的には刃部に使用痕が確認されるが大部分はエッジが鋭く，頻繁な使用の痕跡は伺えない。

③　軽石製品（第29図－166）

166は，本稿唯一の軽石製品資料である。全面的に磨り研き，本来の器形をとどめず，器形的には磨製石斧の基部に似る。表裏面中央部に，棒状の先端を回転させたのか，浅い穿孔が作出される。

第８表　Ⅲ層竪穴住居跡出土土器観察表

挿図	番号	出土区	器　種	部　位	色　調		調　整		胎土状態	胎　土						備　考
					外	内	内面	外面								
21	63	竪穴住居	大型甕形	口縁～二重突帯	橙色	橙色	ナデ	ナデ(工具痕)	良好	○	○	○	○		○	
	64	竪穴住居	大型甕形	二重突帯	橙色	橙色	ナデ	ヘラミガキ	良好	○	○	○	○	○	○	
	65	竪穴住居	大型甕形	二重突帯	橙色	橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○	○	
	66	竪穴住居	甕形土器	口縁	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	67	竪穴住居	甕形土器	口縁	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	68	竪穴住居	甕形土器	口縁	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	69	竪穴住居	甕形土器	口縁	明赤褐色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	70	竪穴住居	甕形土器	口縁	黒色	にぶう黄褐色	ナデ	ナデ(工具痕)	良好	○	○	○	○			
	71	竪穴住居	甕形土器	口縁	橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○		○	
	72	竪穴住居	甕形土器	口縁	明赤褐色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	73	竪穴住居	甕形土器	口縁～胴部	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	74	竪穴住居	甕形土器	口縁	黒色	暗灰黄色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	75	竪穴住居	甕形土器	口縁	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	76	竪穴住居	甕形土器	口縁	明黄褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	77	竪穴住居	甕形土器	胴部	明赤褐色	橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	78	竪穴住居	甕形土器	底部	浅黄色		ナデ	ナデ	良好	○	○	○		○		
	79	竪穴住居	甕形土器	底部	明赤褐色	明黄褐色	ハケ目	ナデ	良好	○	○	○	○			
	80	竪穴住居	甕形土器	底部	明褐色	明褐色	ハケ目	ナデ	良好	○	○	○	○			
	81	竪穴住居	壷形土器	口縁～胴部	暗赤褐色	暗赤褐色	ハケ目後ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	82	竪穴住居	壷形土器	頸部	橙色	黒褐色	ナデ+ハケ目後ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	83	竪穴住居	壷形土器	底部	明赤褐色	明赤褐色	ヘラミガキ	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○			
	84	竪穴住居	壷形土器	胴部～底部	赤色	黄橙色	ヘラミガキ	ナデ	良好	○	○	○			○	
	85	竪穴住居	壷形土器	胴部	赤色	黄橙色	ヘラミガキ	ナデ+指頭押圧	良好	○	○	○				
	86	竪穴住居	壷形土器	胴部	明赤褐色	黄橙色	ヘラミガキ	ナデ+指頭押圧	良好	○	○	○				
	87	竪穴住居	高杯等	脚部	明赤褐色	にぶい黄色	ヘラミガキ	ナデ(工具痕)	良好	○	○	○				
	88	竪穴住居	円盤形土製品		明赤褐色	橙色	ナデ+指頭押圧	ナデ+指頭押圧	良好	○	○	○	○	○		
	89	竪穴住居	メンコ？		赤褐色	黒褐色	ハケ目後ナデ	ナデ	良好	○	○	○				

第９表　Ⅲ層竪穴住居跡出土石器観察表

挿図	番号	器種	石材	出　土　区	長　さ (cm)	幅 (cm)	厚　さ (cm)	重　さ (g)	備　考
22	90	磨製石鏃	頁岩	竪穴住居	2.9	2.2	0.32	2.14	
	91	磨製石鏃	頁岩	竪穴住居	1.9	1.8	0.15	0.71	
	92	磨製石鏃	頁岩	竪穴住居	4.8	3.7	0.25	10.8	

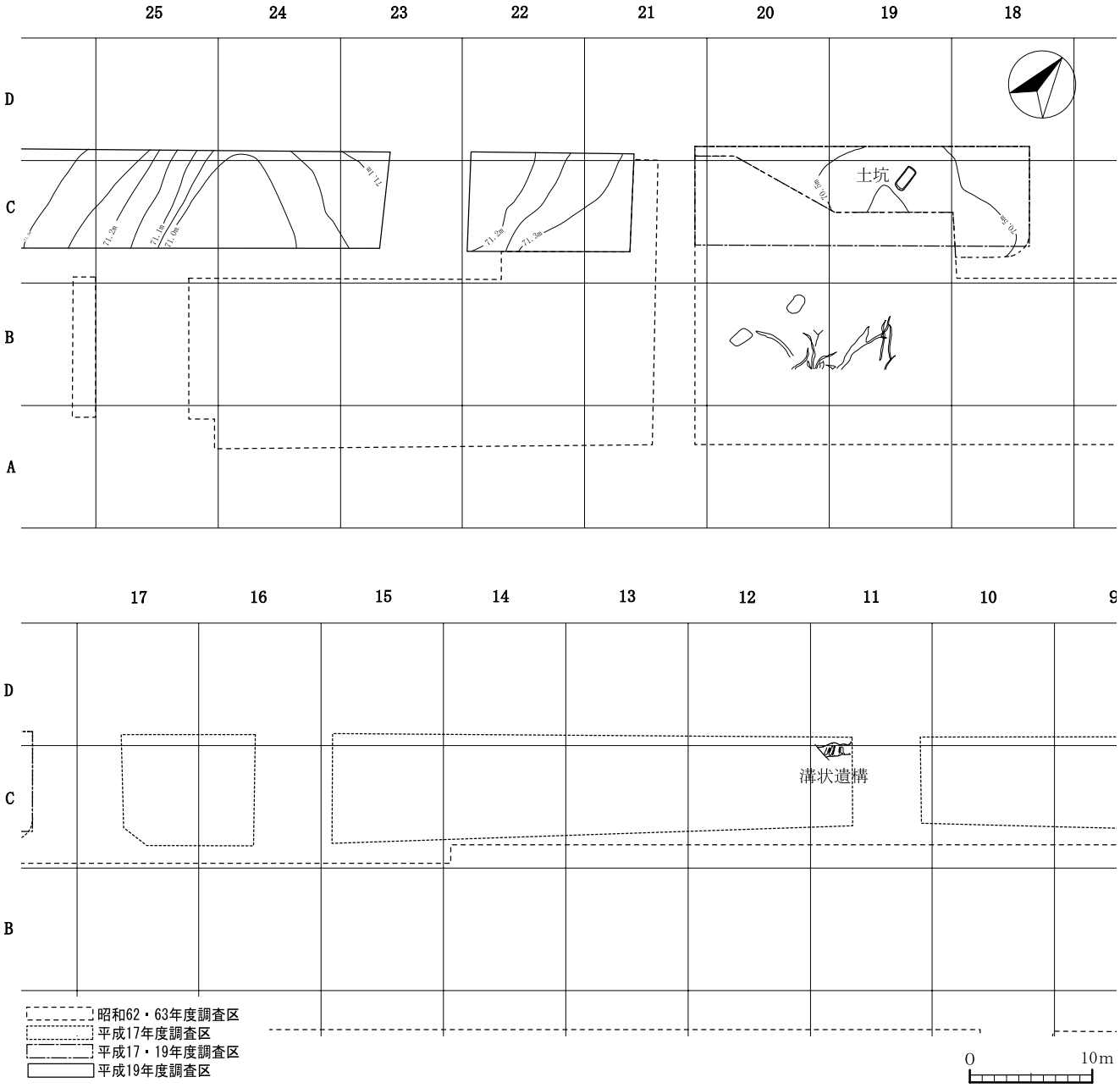
第10表　Ⅲ層土器観察表

挿図	番号	出土区	層位	器　種	部　位	色　調		調　整		胎土状態	胎　土						備考
						外	内	外　面	内面		石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	
25	93	c−22	Ⅲ	大型甕形	二重突帯	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○		○			
	94	c−22	Ⅲ	大型甕形	二重突帯	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	95	c−19	Ⅲ	大型甕形	口縁〜胴部	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○		○	
	96	c−18	Ⅲ	甕形	口縁	黒褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○		○		○	
	97	c−21	Ⅰ	甕形	口縁	にぶい褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	98	c−22	Ⅲ	甕形	口縁	にぶい褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	99	c−22	Ⅲ	甕形	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○		○		
	100	c−19	Ⅲ	甕形	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	101	c−22	Ⅲ	甕形	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	102	c−20	Ⅲ	甕形	口縁	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	103	c−18	Ⅲ	甕形	口縁〜胴部	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○			○	
	104	c−22	Ⅰ	甕形	口縁	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○		茶粒	
	105	c−19	Ⅲ	甕形	口縁	橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○				
	106	c−19	Ⅲ	甕形	口縁	明赤褐色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	107	c−19	Ⅲ	甕形	口縁〜胴部	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	108	c−19・22	Ⅲ・Ⅰ	甕形	口縁〜胴部	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	109	c−20	Ⅲ	甕形	口縁〜胴部	黒褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	110	c−19	Ⅲ	甕形	口縁〜胴部	橙色	明褐色	ナデ+ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○			
	111	c−19・20	Ⅲ	甕形	口縁〜胴部	橙色	橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	112	c−19・20	Ⅲ	甕形	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○		○	
26	113	c−22	Ⅲ	甕形	口縁	明赤褐色	橙色	ナデ+ハケ目後ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	114	c−22	Ⅲ	甕形	口縁〜胴部	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	115	c−22	Ⅲ	甕形	口縁〜胴部	明黄褐色	橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	116	c−19	Ⅲ	甕形	口縁	明褐色	橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	117	c−22	Ⅲ	甕形	口縁〜胴部	赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	118	c−19	Ⅲ	甕形	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	119	c−21	Ⅲ	甕形	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○		○	
	120	c−20	Ⅲ	甕形	口縁	橙色	橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○	○	
	121	c−24	大型土坑	甕形	口縁	橙色		ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	122	c−19	Ⅲ	甕形	口縁	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○		○	
	123	c−18・19	Ⅲ	甕形	口縁〜胴部	浅黄色	浅黄色	ハケ目	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○		○		
	124	c−22	Ⅲ	甕形	胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	125	c−22	Ⅲ	甕形	胴部	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	126	c−19	Ⅲ	甕形	胴部	浅黄色	浅黄色	ハケ目	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○			
	127	c−22	Ⅲ	甕形	胴部	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
27	128	c−19	Ⅲ	甕形	胴部	橙色	橙色	ハケ目	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○			
	129	c−19	Ⅲ	甕形	胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○			
	130	c−20	Ⅲ	甕形	胴部	黒色	褐色	ナデ	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○		○	
	131	c−19	Ⅲ	甕形	胴部	明褐色	黒色	ハケ目	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○		○	
	132	c−19	Ⅲ	甕形	胴部	明赤褐色	明赤褐色	ハケ目	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○			
	133	c−19	Ⅲ	甕形	脚部	明褐色	暗褐色	ハケ目後ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	134	c−19	Ⅲ	甕形	脚部	明黄橙色		ハケ目後ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	135	c−22	Ⅲ	甕形	脚部	明赤褐色	黒色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○		○	
	136	c−19	Ⅲ	壷形土器	口縁〜頸部	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	ヘラミガキ	ハケ目後ナデ+ヘラミガキ	良好	○	○	○	○		○	
	137	c−18	Ⅲ	壷形土器	頸部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヘラミガキ	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○		○	
	138	c−19	Ⅲ	壷形土器	口縁部	橙色	橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	139	c−18	Ⅲ	壷形土器	口縁部	明赤褐色	明赤褐色	ヘラミガキ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	140	c−18	Ⅲ	壷形土器	口縁部	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○		
	141	c−21	Ⅲ	壷形土器	口縁部	明赤褐色	橙色	ヘラミガキ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	142	c−19	Ⅲ	甕形土器	口縁	黒色	黒色	ヘラミガキ	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○		○	
	143	c−21	Ⅲ	壷形土器	頸部	黒色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○		○		
	144	c−18・19	Ⅲ	壷形土器	頸部	橙色	橙色	ヘラミガキ	不明	良好	○	○	○	○	○	○	
28	145	c−19	Ⅲ	壷形土器	頸部	黒褐色	黒褐色	ヘラミガキ	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○	○	○	
	146	c−19	Ⅲ	壷形土器	胴部	赤色	明橙色	ヘラミガキ	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○		○	
	147	c−19	Ⅲ	甕形土器	胴部	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヘラミガキ	ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○		○	
	148	c−18・19	Ⅲ	壷形土器	胴部	橙色	黒褐色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	149	c−19	Ⅲ	壷形土器	胴部	赤褐色	黒褐色	ヘラミガキ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	150	c−18	Ⅲ	壷形土器	胴部	赤褐色	黒褐色	ヘラミガキ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	151	c−24	大型土坑	壷形土器	頸部	明赤褐色	黄橙色	ナデ	ナデ+指頭押圧	良好	○	○	○	○	○		
	152	c−22	Ⅲ	壷形土器	口縁部	赤色	明赤褐色	ヘラミガキ	ナデ	良好	○	○	○				
	153	c−19	Ⅲ	壷形土器	底部	赤褐色	橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○	○	
	154	c−19・20	Ⅲ	壷形土器	底部	橙色	橙色	ナデ	ナデ+ハケ目後ナデ	良好	○	○	○	○	○	○	
	155	c−22	Ⅰ	壷型土器	口縁部	赤色	黄橙色	ヘラミガキ	ナデ+指頭押圧	良好	○	○	○				
	156	c−24	大型土坑	壷形土器	頸部	赤色	黄橙色	ヘラミガキ	ナデ+指頭押圧	良好	○	○	○				
	157	c−22	Ⅲ	壷形土器	胴部	明赤褐色	にぶい黄橙色	ヘラミガキ	工具ナデ後指ナデ	良好	○	○	○				
	158	c−22	Ⅲ	壷形土器	胴部	明赤褐色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○				
	159	c−22	Ⅲ	高杯	脚部	明赤褐色	浅黄色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○	○	
	160	c−22	Ⅲ	メンコ？		橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○			
	161	c−19	Ⅲ	蓋		明赤褐色	浅黄色	ナデ	ナデ	良好	○	○	○	○	○	○	

第11表　Ⅲ層石器観察表

挿図	番号	器種	石　材	層位	出土区	長　さ (cm)	幅 (cm)	厚　さ (cm)	重　さ (g)	備　考
29	162	磨製石鏃	頁岩	Ⅲ	c−21	2.9	0.18	0.18	1.24	
	163	磨製石鏃未製品	頁岩	Ⅲ	c−19	5.3	0.6	0.6	12.4	
	164	磨製石鏃未製品	頁岩	Ⅲ	c−10	4.15	0.5	0.5	18.03	
	165	礫器	頁岩系ホルンフェルス	Ⅲ	c−24	14.8	8.6	2.45	410	
	166	軽石製品	軽石	Ⅲ	c−19	5.6	2.6	2.6	15.92	

第Ⅵ章　中世（Ⅱ層）の調査



第30図　Ⅱ層遺構配置図

第１節　概要

中世相当の黒色土（Ⅱ層）の埋土を含む溝状遺構１条と土坑がそれぞれ１基確認された。（前畑遺跡1990）では，特に「中世」の項を設けて遺構等触れられていないが，「近世墓」項目内の土坑墓の一部を詳述する中で，中世墓の可能性を有する土坑があることが示唆されている。

第２節　遺構

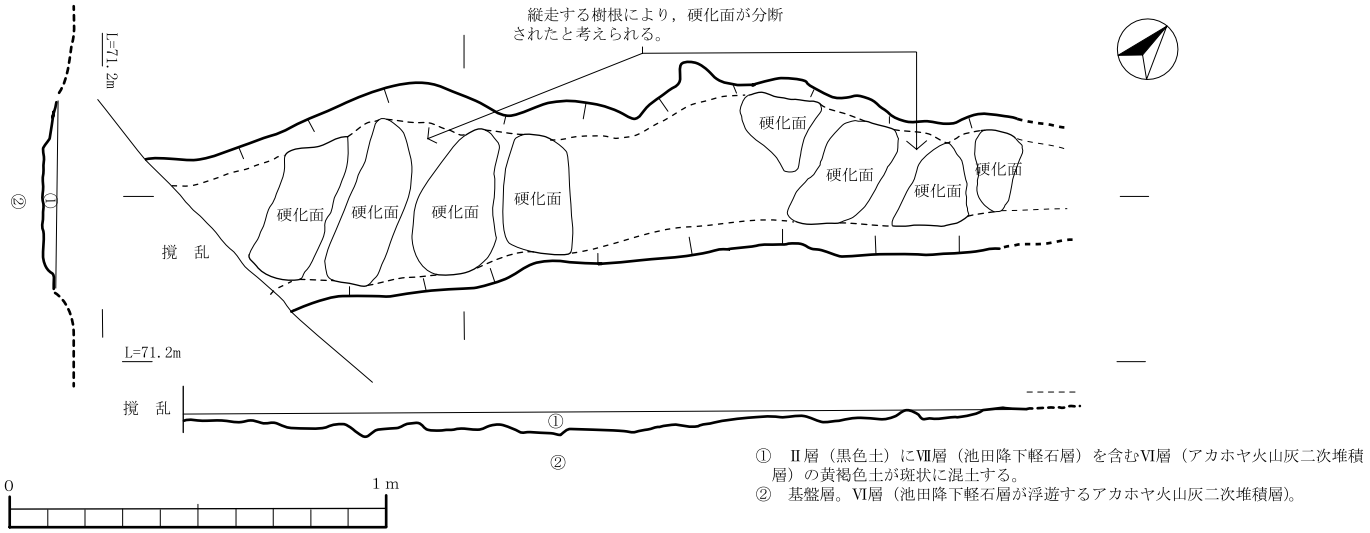
１　溝状遺構１号（第31図）

Ｃ－11・12区で，硬化面を伴って検出され，「実態の不明な溝状遺構がみられる」[1]類例の一つと思われる。主軸をＮ－45°－Ｅの北東・南東方向に向け，現道と並行する方向に位置する。埋土中には，中世の包含層であるⅡ層（黒色土）を主として（黄

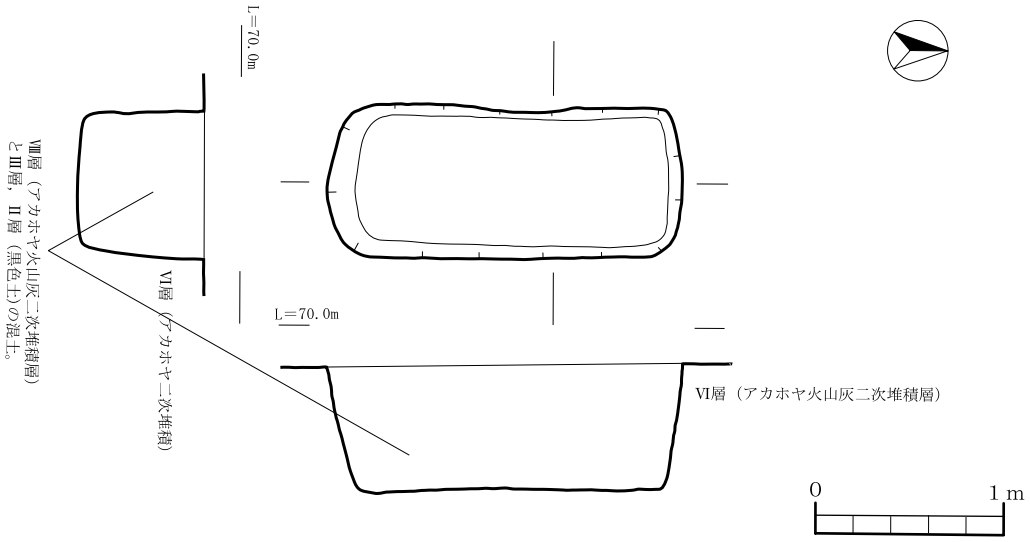
茶褐色土）Ⅳ層の土が斑状に含まれたことより当時代に比定した。しかし，埋土内に遺物は確認されず，詳細な時代の特定は困難であった。なお，溝状遺構内硬化面を幾条かの樹根が縦走し，硬化面が確認されない箇所もあったが，本来は硬化面が床面を大きく面形成していたと想定される。

2　土坑

土坑がC－18区で検出された。長軸長1.9m×短軸長0.8mの隅丸方形のプランを呈し，検出面からの深さ0.62m（推定値0.84m程度）を測る。主軸がN－36°－Eでほぼ北東を向く点や隅丸方形の形状・大きさ等の類似性から，（前畑遺跡1990）で7基検出されている土坑同様に，墓の可能性が考えられる。ただし，（前畑遺跡1990）の土坑墓の多くが人骨及び埋土銭を伴っているのに対して，この遺構には伴わない。また，検出区が他の土坑墓とは異なる点など相違点も見られる。（前畑遺跡1990）では，本遺構に近隣する6号墓について，埋土内遺物の相違点から「近世墓との相違」[1]を指摘する。6号墓の南隣に位置する7号墓については特に指摘されてはいないが，6号墓同様に出土遺物の相違や人骨が遺存しない点などの共通点がある。近世墓とされる他の土坑墓との時期差の可能性を考慮に入れ，6号墓同様に（前畑遺跡1990）－7号墓及び本土坑を加えて3基は中世墓の可能性を見る。

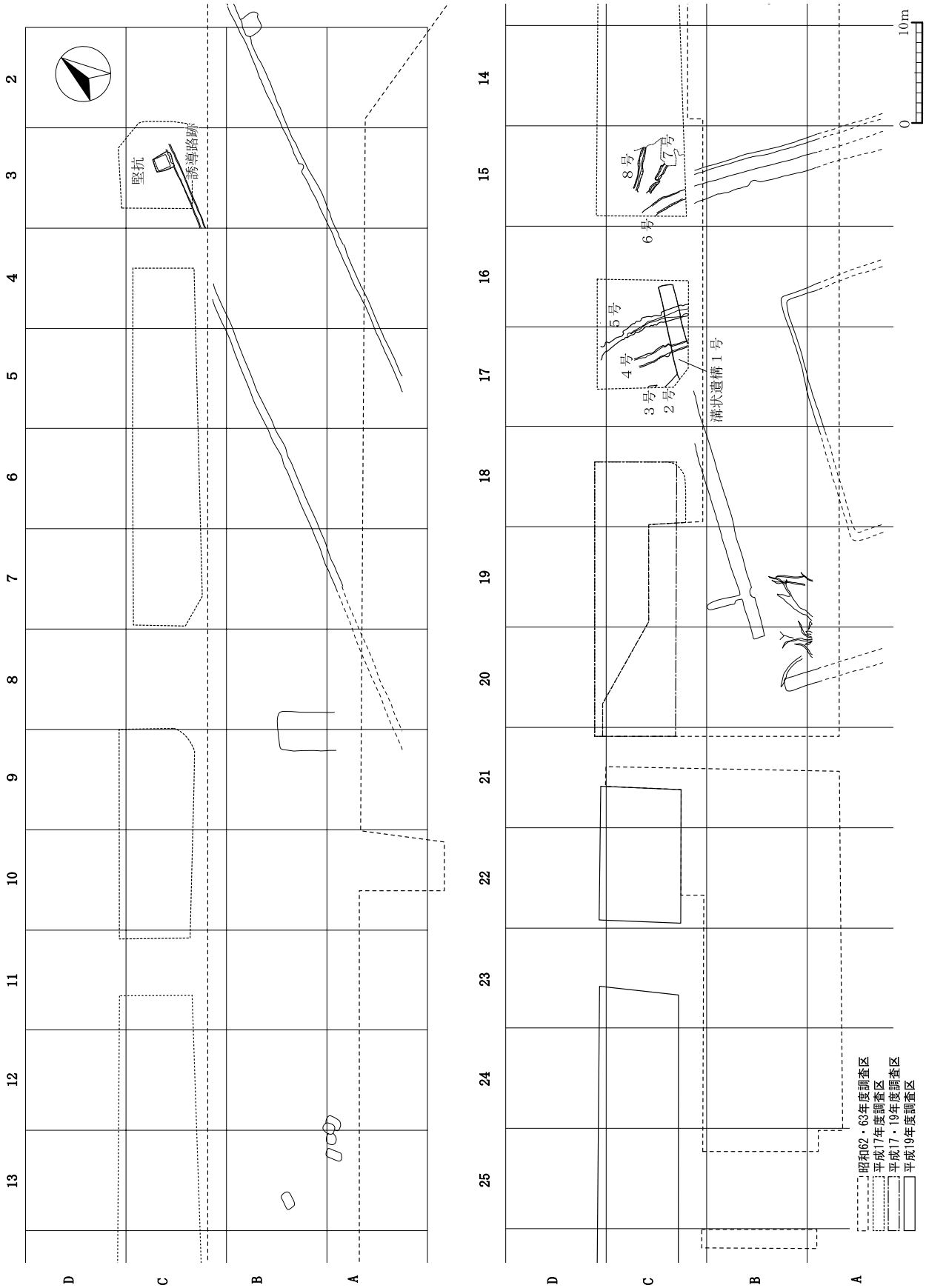


第31図　Ⅱ層溝状遺構実測図



第32図　Ⅱ層土坑実測図

第Ⅶ章　近世以降（Ⅱ・Ⅰc層）の調査



第33図　Ⅰc層遺構配置図

第１節　概要

黒色土であるⅡ層（中世）の残存状況が悪く，場所によっては層が極めて薄い。その上層（Ｉｃ層：近世以降）の砂礫・軽石がⅡ層中に包含されている箇所も見られ，遺構内に遺物と伴わない場合は，中世及び近世を明確に峻別するのには困難さを伴う。さらに，Ｉｃ層内（近世以降）の時期を近世と近代に細分化するのは，埋土内遺物によるしかないのが実情である。これらの層位の実情から，Ⅱ層検出遺構の一部は，その特徴や（前畑遺跡1990）の成果から近世以降に位置付けた。

昭和62・63年度の発掘調査で７基の土坑墓が検出されているが，これらは「近世墓」（前畑遺跡1990）と捉えられている。平成17年度の発掘調査で確認された土坑１基は中世相当の墓と比定し，平成17・19年度発掘調査では近世墓は検出されていない。近代（太平洋戦争前・中）では，平成17年度の調査により昭和62・63年度検出の掩体壕跡に連なる外壕１条，誘導路１条，排水池と考えられる竪坑１基が確認されている。なお，戦争関連遺構内では，誘導路及び排水池埋土内で弾頭１点・薬莢８点を中心に，ガラス製品や統制食器などが多数の遺物が出土した。戦跡遺構以外の遺構として，溝状遺構が７条検出しているが，包する遺物等少なく時期等不明な点が多い。

第２節　遺構

戦争関連遺構・古道等性格や位置付けが明確な遺構と不明な遺構を峻別して述べていきたい。

１　溝状遺構

⑴　溝状遺構１号

Ｃ－16・17区で検出された。長さ16m強×幅1.5m×深さ１m弱程度で，床面には硬化面が確認された。主軸がＮ－40°－Ｅでほぼ北東から南西に走る。南側では，（西原掩体壕1990）のＢ－17～20検出の掩体壕外壕に繋がり，北側では溝状遺構１号に至ると考えられる。

⑵　溝状遺構２号

Ｃ－16・17区で検出された。長さ9.5m×幅１m×深さ0.8m程度である。主軸がＮ－115°－Ｅでほぼ北西から南東に走る。溝状遺構１号に直交して切られている。埋土中に古銭を１点伴い，床面には硬化面が確認されたことから，近世の古道跡と考えられる。南東側延長上には，（前畑遺跡1990）にて旧道跡が検出されている。

⑶　溝状遺構３号

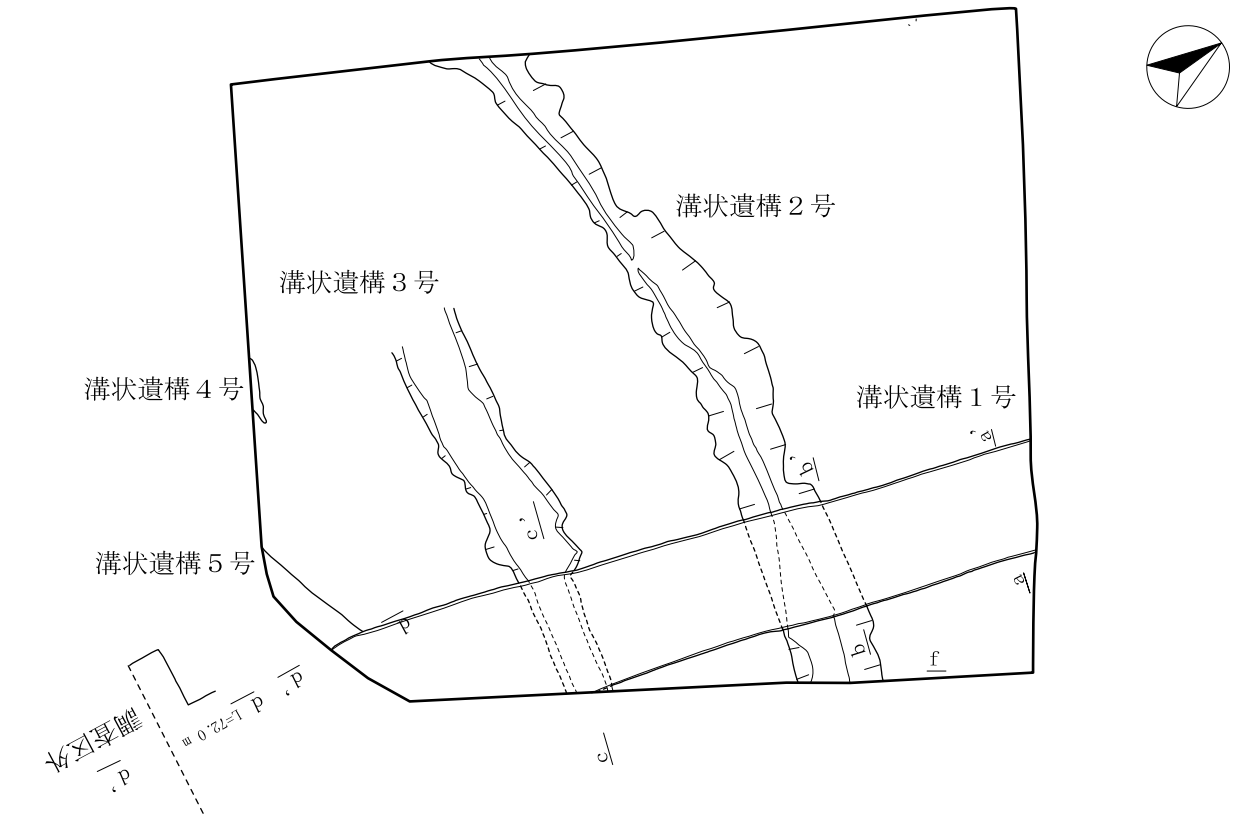
Ｃ－16・17区で検出された。長さ5.5m×幅１m×深さ0.9m程度である。主軸がＮ－120°－Ｅでほぼ北西から南東に走る。溝状遺構１号に直交して切られている。床面には硬化面が確認され，溝状遺構２号と併走していることから，溝状遺構２号同様に近世の道跡の可能性が高いと考えられる。南東側延長上には，（前畑遺跡1990）に旧道跡が検出されている。

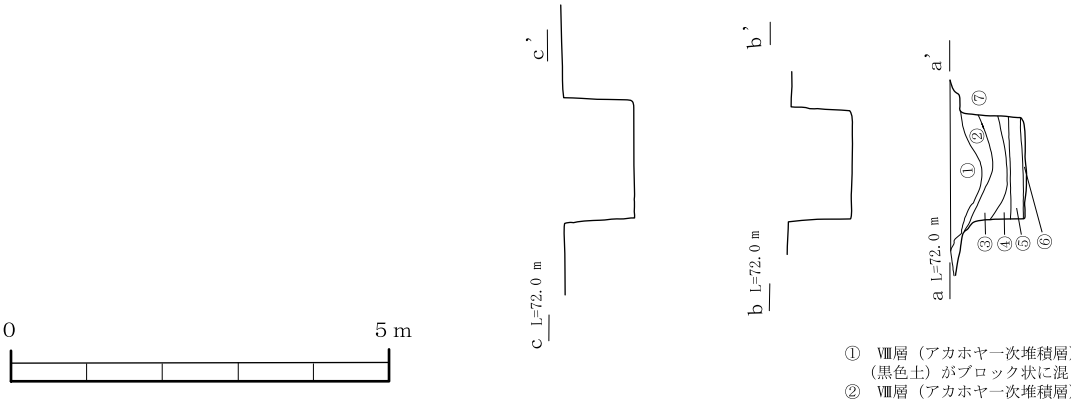
⑷　溝状遺構４・５号

共に，Ｃ－17区で検出された。殆どが調査区外にかかるため全体像は判然としないが，主軸がＮ－90°－Ｅでほぼ東西に走ると思われる。溝状遺構５号については，深さ0.85m程度を測る。

⑸　溝状遺構６号

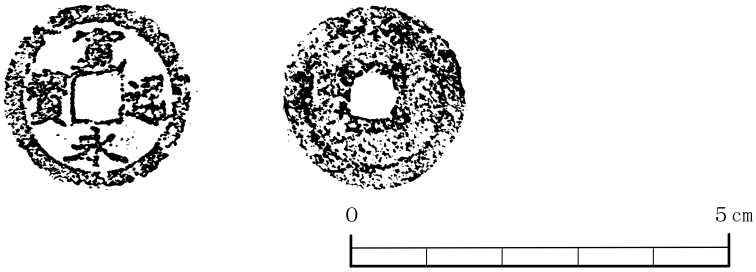
Ｃ－15区で検出され，幅1.25m×深さ0.2m程度である。主軸がＮ－125°－Ｅでほぼ北西～南東に斜走する。（西原掩体壕1990）では南側近接地Ｂ－15区で掩体壕外壕の一部が確認されており，本遺構はその延長上に該当する外壕の一部の可能性を考えたが，大きな相違点が捉えられた。まず，Ｂ－15区検出の外壕が幅３m程度なのに対して本遺構は，0.57m程度と狭い。深さに関しても，外壕の深さが１mなのに対して，本遺構は0.2mと浅い。埋土の堆積状況も大きく異なる。周辺域は，Ⅱ～Ⅴ層が削平を受け，表層直下にⅥ層が位置する土層状況にある。ｃ－ｃ’横断面観で，戦跡遺構が検出されるＩｃ層を基盤層としⅡ層川砂のような砂・小石が混入し，



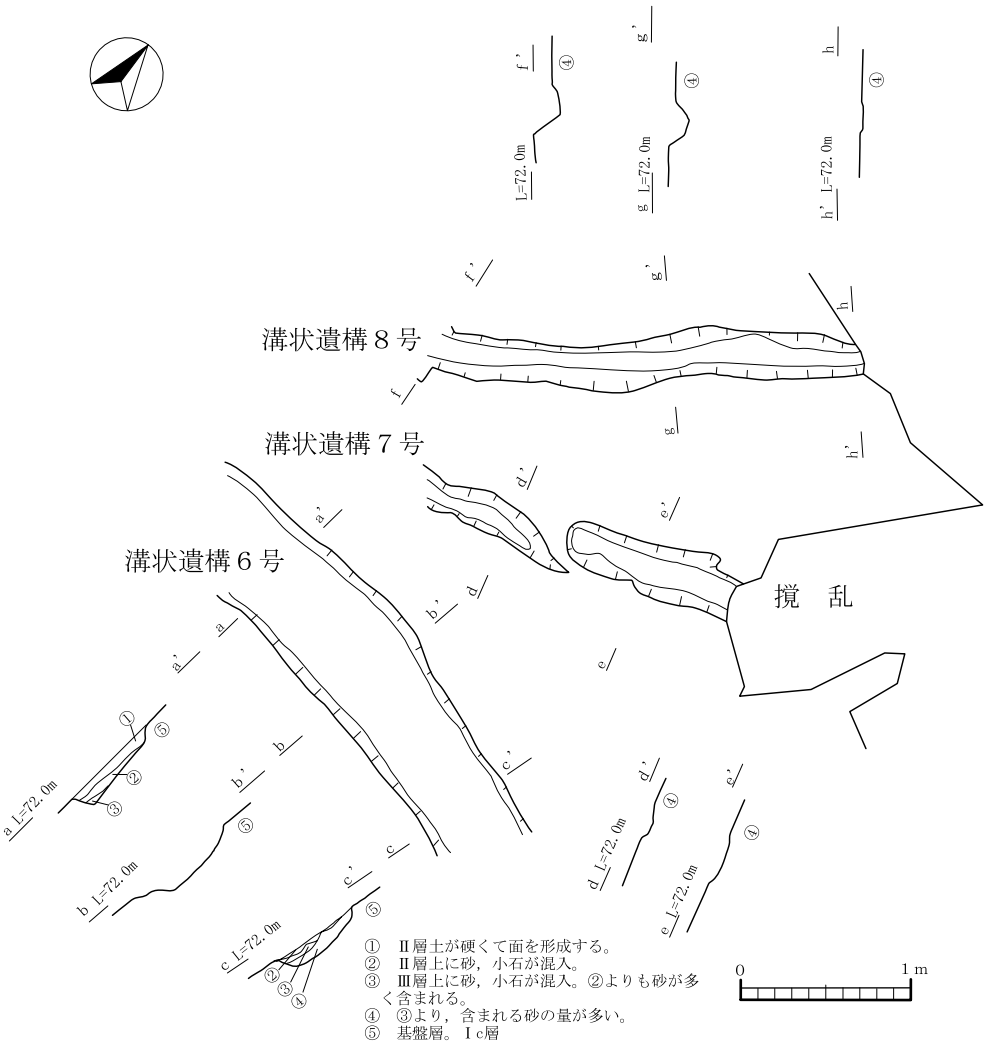


① Ⅷ層（アカホヤ一次堆積層）やⅢ層(黒褐色土)，Ⅱ層（黒色土）がブロック状に混ざる。
② Ⅷ層（アカホヤ一次堆積層）とⅡ層（黒色土）がブロック状に混ざる。
③ 灰色の粘土と砂質土の混土。
④ 黒色の粘土と砂質土の混土。
⑤ 灰色の砂質土。
⑥ 赤色の鉄分を含む。水田の基盤層？
⑦ 基盤層。Ⅰc層。

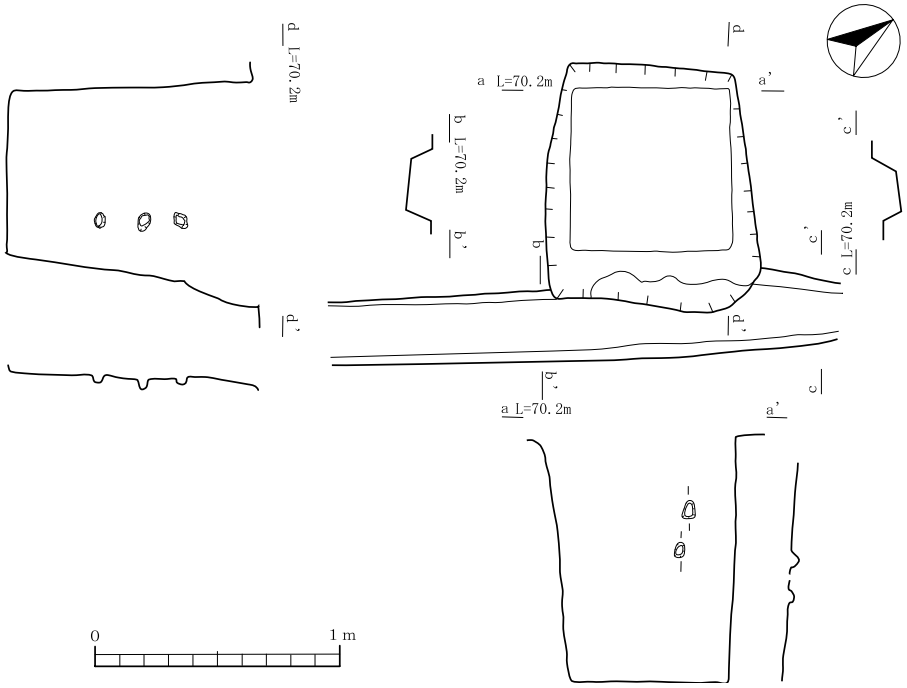
第34図　Ⅰｃ層溝状遺構等実測図



第35図　Ⅰｃ層溝状遺構内出土遺物実測図



第36図　Ⅰｃ層溝状遺構６～８号実測図



第37図　Ⅰｃ層竪坑実測図

更にその下層に混土層（Ⅲ層中に砂・小石が混土）がレンズ状に自然堆積している。一方，ａ－ａ’の断面観では，上層に砂礫を含むⅡ層土が硬化面を形成し，砂礫を含むⅢ層土が下層に位置する。ｃ－ｃ’とａ－ａ’の堆積状況の違いは，Ⅱ～Ⅴ層（若しくはⅥ層）の削平度合による遺構の残存程度の違いと捉えられ，ｃ－ｃ’に比して，ａ－ａ’は，上位の埋土がより削平を受けたとの仮定が可能である。硬化面の有無に相違が見られるが，部分的に硬化面が確認されたことを積極的に評価すれば，古道の可能性を示唆すると考えられる。

本調査区（Ｃ－15区）には，南隣の掩体壕外壕が続く可能性が考えられ，外壕遺構の精査を念入りに実施したが，想定検出面のＩｃ層及びその下層からは，全くその痕跡を得ることができなかった。その延長が，未調査の市道・進入路下に至るのか所在は不明である。また，本溝状遺構が，本来は南隣に伸びるとしても，掩体壕建設や戦後の農地開発等で削平を受けて消滅した可能性があり，（西原掩体壕1990）で検出されていない事由にはなりうるであろう。

⑹　溝状遺構７・８号

共に，Ｃ－15区で検出された。７号の最大幅は0.3m弱程度で，最大深度も３㎝程度と極浅い。埋土内に遺物は伴わない。主軸がＮ－95°－Ｅでほぼ東西に延びる。８号の最大幅は0.24m程度で，最大深度も８㎝程度と極浅い。埋土内に遺物は伴わない。主軸がＮ－75°－Ｅでほぼ東西に走る。（西原掩体壕1990）や（前畑遺跡1990）では，両遺構の延長上に想定される区に溝状遺構は検出されていない。

２　土坑

⑴　竪坑

（西原掩体壕1990）の誘導路№２の西側水路の西側に付属し，Ｃ－13区にて検出された。縦0.83m×横0.8m×深さ１ｍの方形のプランを呈する。水路の水溜め池あるいは沈砂地の目的を持つものと想定される。なお，本遺構には，戦後の遺物と思われる陶器やガラス製品等が多数廃棄されており，戦後の一時期ゴミ捨て場として利用された可能性がある。

第３節　出土遺物

⑴　金属製品

本遺跡からは，太平洋戦争中の弾頭１点，大小様々な大きさの薬莢計７点が出土した。弾薬は弾頭と薬莢からなり，構造模式図を掲載した（図35参照）。薬莢の底面は平坦で，中央には雷管と発砲の際に付けられる打痕が見られる。雷管の周囲（リム）には，ＬＣ，ＤＭ，Ｍや４，44などの符号が付けられている。ＬＣ，ＭＤ，Ｍは製造識別番号のことであり，４，44などは製造年号を示すものとのことである。ちなみにアルファベット表記の符号はアメリカ製のものである。日本製のものは，平仮名や片仮名で表記されているらしいのだが，今回は確認することができなかった。

①　弾頭（図39－167）

弾頭が１点出土した。167は直径12.7㎜，長さ6.20㎝，重さ40.0ｇを測る。全体に緑青が浮き，下部は錆び付いているが，先端部はやや鋭く尖り中央に最大径を測るものである。弾頭の中央部よりやや後の周囲には，弾丸が発射された時に付く施錠痕が右回りに８列確認できる。

②　薬莢（図39－168～172）

168は大型の薬莢である。長さ16.2㎝，幅4.2㎝，口径20㎜を測る。鑑定によれば，日本軍が使用した20㎜対空機関銃の薬莢であるらしい。全体に緑青が浮いており，符号や年号は確認できなかった。169～172は中型の薬莢である。169・170・172はほぼ完形品，171は口径部が欠損している。いずれも全体に錆や緑青が浮いているが，長さ，幅，口径ともにほぼ一致し，リムにはうっすらアルファベットの識別符号と製造年号がみられる。鑑定によりアメリカ軍が使用した，12.7㎜航空機銃弾の薬莢であることが判明した。169・170にはリムにＬＣ，44と符号が打たれている。これは，Lakecity Ordnance Plantで1944年に製造されたことを意味する。171にはリ

ムにＤＭ，４と打たれており，これはDes Moines Ordnance Plantで製造された事を意味する。製造年号は判断できなかった。172は171と同様のものであろう。

③　薬莢（図39－173～175）

口径部が欠損した，中型の薬莢である。169～172と非常に似ているが，リムの識別符号，製造年号が確認できなかったため，生産国が不明である。175は小型の薬莢である。長さ5.6㎝，幅1.2㎝，口径7.7㎜を測る。全体に緑青が浮いており，識別符号，製造年号は不明。口径により7.7㎜弾と判断できるが，航空機銃弾か，ライフル弾か，小銃のものかということは判断できなかった。

④　その他の金属製品（写真図版－175）

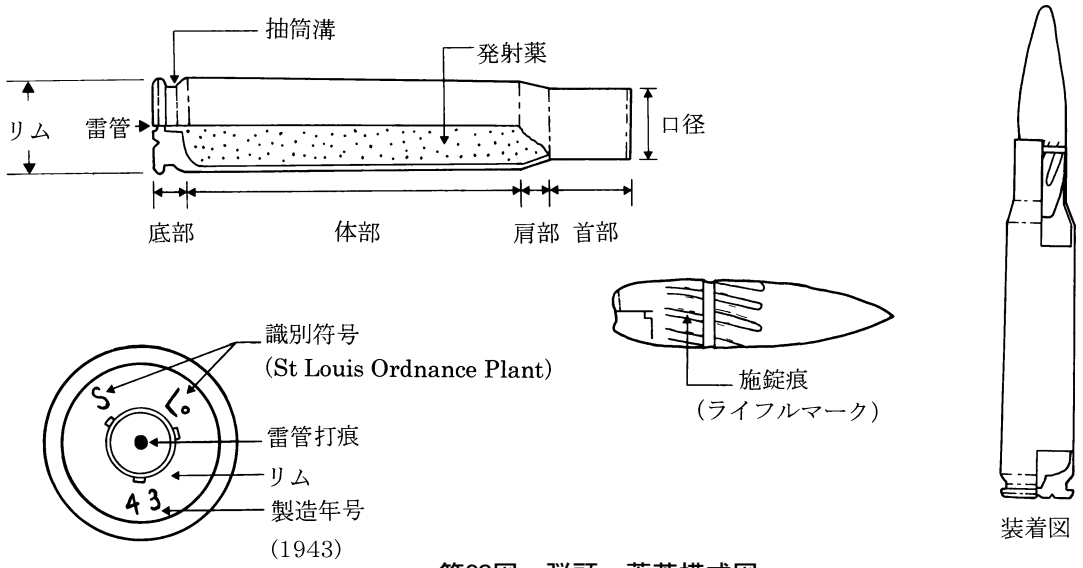
Ｉｃ層から，戦争中の遺物と共に多数の錆び付いた鉄片が出土した。１点，最大長21.0㎝を測る縦長のものが出土し，当初，鎌や短剣などの刃物であろうと考え，レントゲン撮影を行ったが，側辺に刃部を形成していなかった。しかし戦争中の遺物であることは，共伴遺物や出土層からほぼ間違いのないことであるため，戦争遺跡保存と活用が積極的に行われている，沖縄県の県立埋蔵文化財センター，南風原文化センター，平和記念公園博物館の三者に鑑定を依頼したところ，砲弾が着弾した際，飛散した破片であることが分かった。破片の大きさは様々であるが，側辺が瞬時の高熱により溶けた痕跡が観察できるとのことであった。なお175は実測を行わず，写真のみ掲載する。

⑵　ガラス製品（第40・41図－176～189）

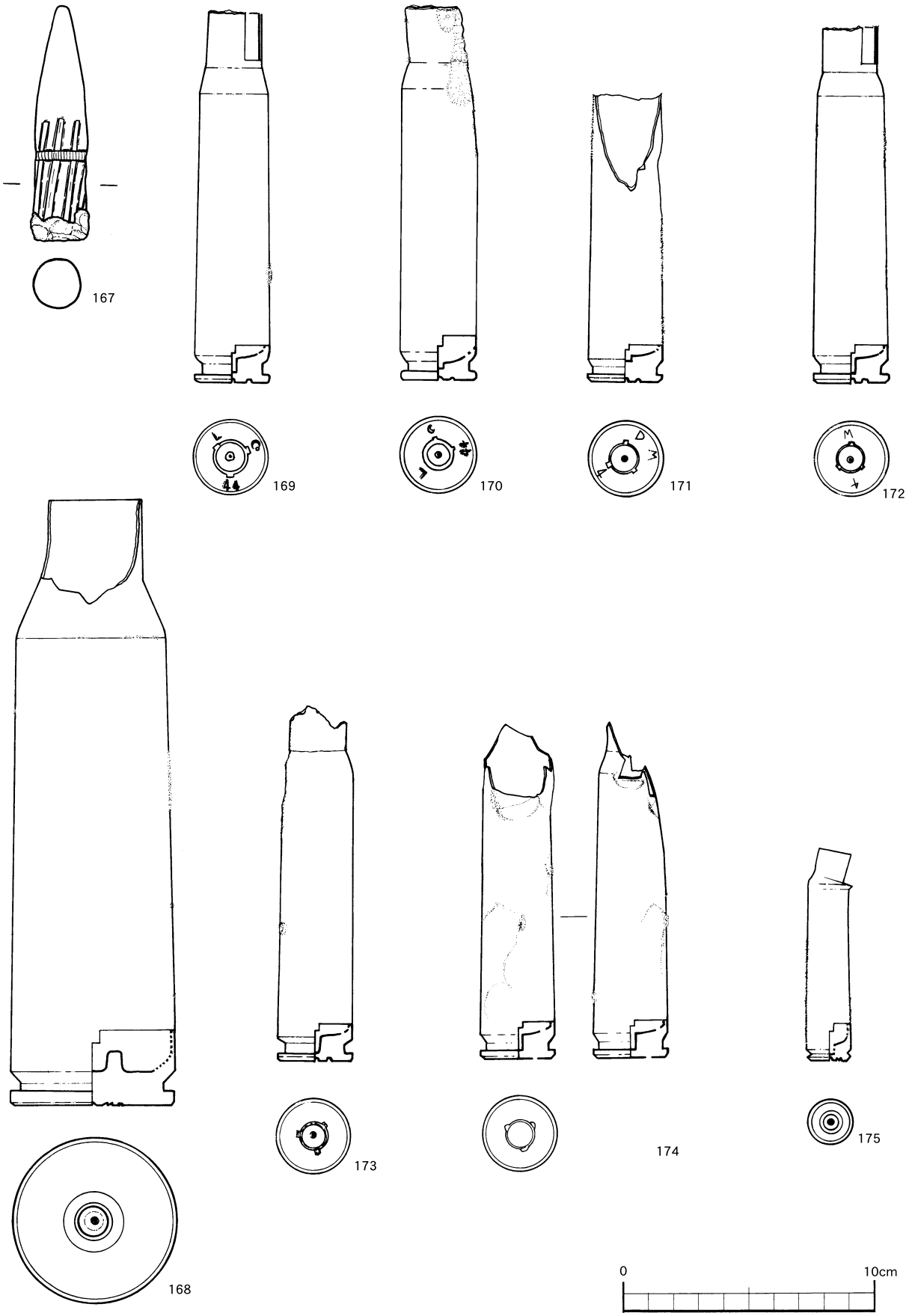
掩体壕近辺からは，多種多様のガラス製品が検出された。戦時中の物もあれば，戦後の物も見られる。ここでは主に戦争中の遺物を取り上げ，図化した。

①　飲料水ビン（第40図－176）

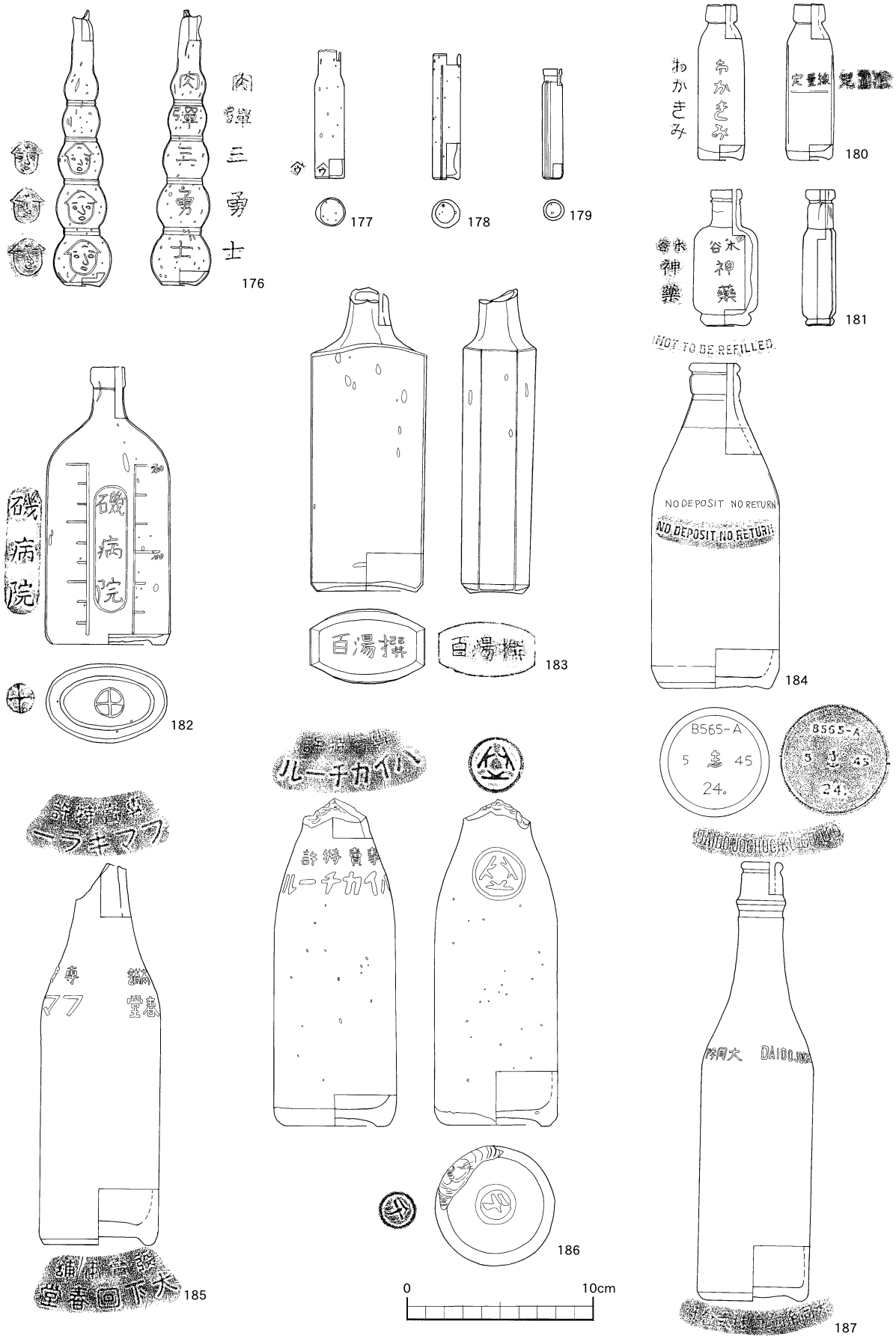
176は装飾ビンで気泡が多く，ガラス質のもろいものである。球状の胴部が５個連なる形を呈しており，下部に最大径を測る。正面には鉄兜をかぶった兵士が３人陽刻され，裏には「肉弾三勇士」と陽刻されている。肉弾三勇士とは，上海事変中の1932年（昭和７年）２月22日，蔡廷楷の率いる19路軍が，上海郊外の廟行鎮に築いた陣地の鉄条網に対し，突撃路を築く為に点火した爆薬を持って敵陣に突入爆破し，自らも戦死した独立工兵第18大隊（久留米）の江下武二，北川丞，作江伊之助各一等兵のことを指す。当時の日本は彼らを軍神として称え，戦争への士気を高めたのであろう。176はニッキ水などの飲料水のビンであろうが，当時の社会の様子が強く表れたものである。



第38図　弾頭・薬莢模式図



第39図　Ⅰc層弾頭・薬莢実測図



第40図　Ⅰｃ層掩体壕内出土ガラス製品実測図(1)

② 薬用ビン（第40図－177～187）

177～179は非常に小型のビンである。177は高さ6.9㎝，胴部最大幅1.5㎝を測る。肩部を持ち，平らな底面を有する。下部に製造元を示すと思われるロゴが見られるが，詳しい事は不明である。178は高さ6.7㎝，胴部最大幅1.5㎝を測る。くびれのない筒型で，分厚く丈夫な作りとなっている。179は高さ5.9㎝，胴部最大幅1.0㎝を測る。肩部と厚い口部を持ち，底部は丸みを帯びている。177・178・179は個体差があるが，いずれもアンプルビンであろう。180は小型で厚手のビンである。高さ5.9㎝，胴部最大幅2.5㎝を測る。表に「わかきみ」裏に「定量線」と陽刻されている。化粧品のビンか，薬品のビンか結果を出すには至らなかった。181は独特の形を呈した，青色の小ビンである。下部と上部にくびれを持ち，高さ7.3㎝，胴部最大幅3.2㎝を測る。表に「木谷　神薬」と陽刻されている。「木谷」はおそらく販売会社であろう。「神薬」は，まず，「資生堂」という会社から，明治７年に売り出された緒病の薬である。効能はコレラ，攪乱，手足の冷え，胸痛，腹痛，食傷，赤痢，痛風，破傷風，咳，水あたり，頭痛，歯痛，疱瘡，麻疹など，万能薬をうたった薬であったようだ[5]。182は透明な薬用ビンである。表に「磯病院」，底部に病院のロゴと思われる陽刻が見られる。高さ14.8㎝，胴部最大幅5.5㎝を測る。消毒液や飲み薬を入れたビンであろうか。なお，磯病院は数十年前まで鹿屋市の市街地に所在していたということが，発掘担当者の証言で明らかになった。183は方形で青色のガラスびんである。口部が欠損し，気泡が目立つ。底部に「百湯撰」と旧字で陽刻されており，これもおそらく薬品をいれたビンであろう。184～187は殺虫剤のビンである。184は高さ17.2㎝，胴部最大幅6.0㎝を測る茶色のビンである。肩部と底部にアルファベットによる陽刻が見られる。「詰め替え禁止」「返却不可」と英語による注意書きであることが判明した。地域によっては保証金付のビンあり，ビンを返却すると払い戻しされる所があるが，それを禁止する内容であろう。戦争中に英語の使用は考えられず，おそらく戦後に使用，廃棄されたものであろう。185は口部が欠損したうすい緑色のビンである。肩部に「専売特許フマキラー　専売本舗大下回春堂」と，旧字で右から左に廻らされている。フマキラーは，現在でも缶入りのスプレータイプのものが販売されている。数十年前はビン入りの物が主流であり，口部に小型のポンプを装着し，きりふきのように使用していたらしい。186も185同様，口部が欠損している。肩部に「専売特許　ハイカチール」と旧字で右から左に廻らされて，裏と底部に製造社のものと思われるロゴが陽刻されている。ハイカチールも数十年前まで使用された殺虫剤である。先のフマキラーと同様の性格，使用法であろう。187は完形で高さ23.4㎝，胴部最大幅5.5㎝を測る，茶色のビンである。肩部に「大同除虫菊株式会社 DAIDO JOCHUGIKU CO LTD」と陽刻されている。旧字を使用しているが，アルファベトも用いられている。戦後の物であろう。

④ ビールビン（第41図－188）

188は口部が欠損したビールビンである。胴部最大幅は7.4㎝を測る。肩部と底部には「商標登録　キリンビール」と右から左に陽刻されている。（西原掩体壕跡1990）でも，このビンの出土が報じられており，188も同じ性格の物であろう。

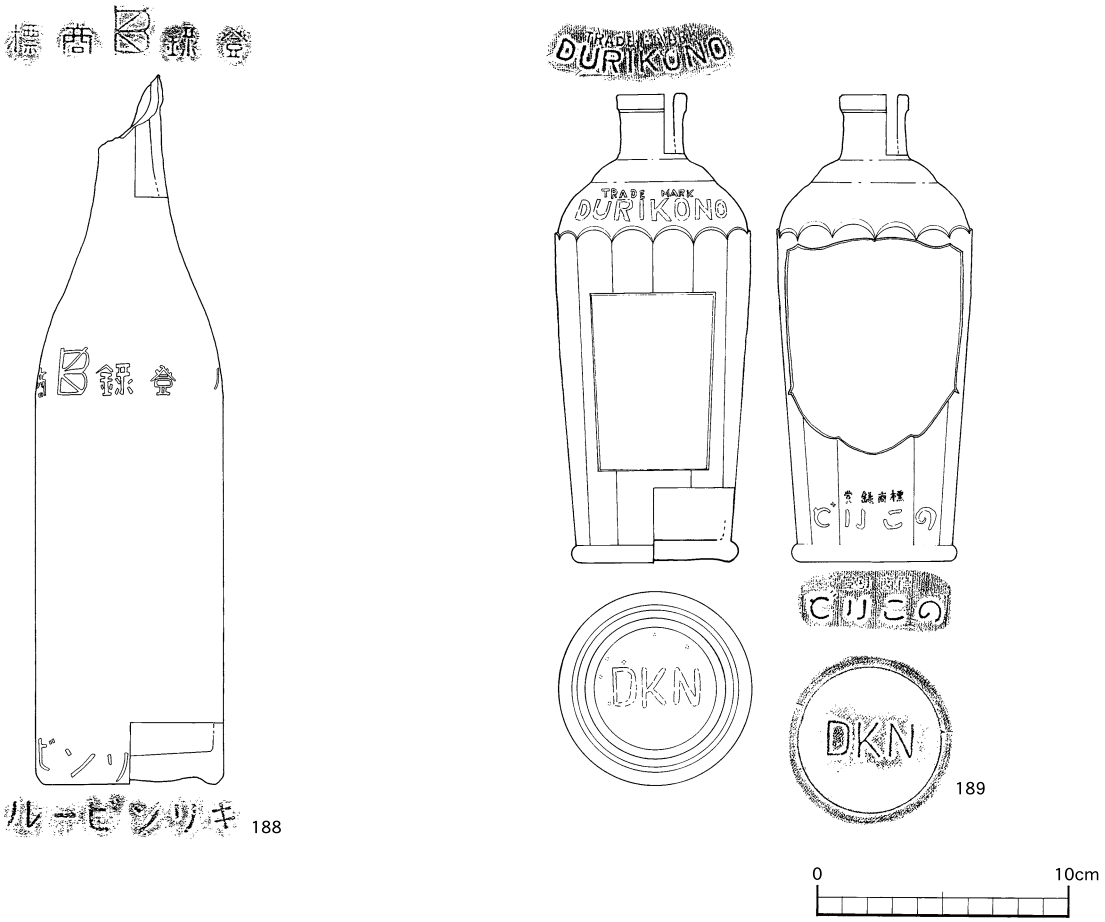
⑤ その他ビン（第41図－189）

189は，白色の肩部に最大径を持つものである。高さ18.5㎝，最大幅8.0㎝を測る。肩部，下部，底部に陽刻が見られる。「どりこの」と確認できるが，どのような物であるかは，今回結果を出すには至らなかった。

⑶ 統制食器（第42・43図－190～208）

本遺跡には旧日本軍の掩体壕跡や，それに関する遺構が検出されており，またそれらに伴って当時の日用品も多数出土した。ここでは，高台内に特殊な銘が記された統制食器というものを中心に図化した。

昭和12年11月の国家総動員法発令により，ほとんどの物質，物品の運用は国家により統制され，太平



第41図　Ⅰｃ層掩体壕内出土ガラス製品実測図(2)

洋戦争末期になると，食器を含む日用品も統制の対象となった。これらの食器は「統制食器」若しくは「国民食器」と呼ばれ，生産地の特定と統制のための番号が高台内に記されている。「岐」は岐阜県東濃地区，「瀬」は愛知県瀬戸市，「品」は愛知県品野村（現瀬戸市）を指し，ほとんどのものが瀬戸で作成されていたことが判明した。なお，「品」と記されたものは，本遺跡では出土していない。ちなみに，口縁部付近に緑色の二重圏線が施されたものは，当時「軍隊食器」「軍用食器」「兵食器」と呼ばれ，これらは軍隊専用に作られた規格品の食器であり，本遺跡では１点出土している。

①　碗類（第42図－190～194）

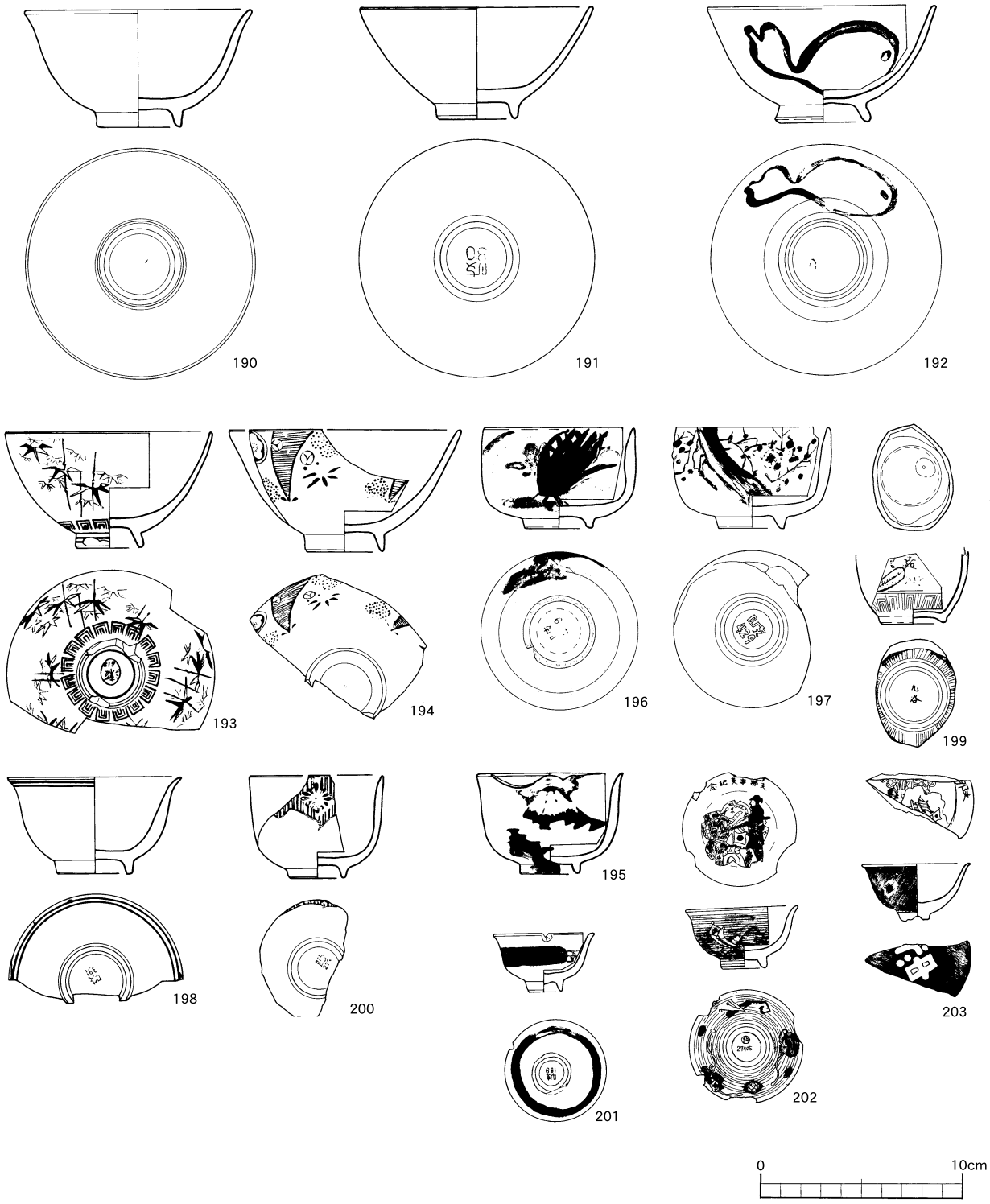
190～194は碗類である。190は口径11.2㎝，底径4.0㎝を測る。高台内に銘があり，白地に緑色の釉が施される。191は口径11.5㎝，底径3.7㎝を測る。高台内に銘があり，深い緑色の釉が施される。192は口径11.2㎝，底径4.3㎝を測る。白地に透明釉が施されており，鯨か瓢箪か判断できない絵が描かれている。高台内に「中山」の銘が見られるが，生産元を示すものであろうか。193は口径10㎝，底径3.2㎝を測る。透明釉が施され，高台付近に釉溜まりが見られる。194は口径11.5㎝，底径3.3㎝を測る。高台内に「岐10 ？」と不明瞭な銘が記されている。

②　湯呑み類（第42図－195～200）

195～200は湯呑み茶碗である。195，196，199，200はほぼ同じ口径，底径を呈しており，いずれも高台内に銘が確認できる。197は胴部と底部が残存するものであるが，高台内に朱色で「九谷」と記されている。九谷焼を示すものであろうか。198は口縁部付近に緑色の二条圏線を有するものである。口径8.6㎝，底径3.5㎝を測る。前記したように，198は軍人専用の湯呑みである。

③　盃類（第42図－201～203）

201～203は盃である。201は口径4.9㎝。底径1.6



第42図　Ⅰc層掩体壕内出土統制食器実測図(1)

第43図　Ⅰｃ層掩体壕内出土統制食器実測図(2)

㎝を測る。高台内には小さく銘が記されている。202は「支那事変記念」と右から左書かれ，銃を構えた兵士と中国の主要都市名が書かれている。口径5.5㎝，底径2.0㎝を測る。203は「忠」の字で高台が作られており，内面には「支那」の字と，不明瞭だが桜の花弁の中に日の丸が見られる。202，203は兵隊盃と呼ばれるものである。これらは太平洋戦争以前，３～４年の兵役期間を終えた者が満期除隊する際に，記念として肉親などに配ったものであるらしい。染付には様々なバリエーションがあるということも判明した。

④　皿類（第43図－204～207）

204～207は皿である。204は肉厚のコバルト釉を施した深皿である。口径15.0㎝，底径8.8㎝を測る。205は口唇部付近に草花のイラストをプリントした皿である。当初，胎土や染付方法などから，現代のものと判断したが，高台内に統制の番号が記されていてため図化した。206は山水紋を施した皿である。底部のみ残存し器高は不明であるが，底径は5.6㎝を測る。207は口縁部が多弁花状を呈した深皿である。口径は15.5㎝，底径は9.6㎝を測る。鮮やかに朱色で染付られており，中央に「壽」の字が見られる。高台内には統制番号と，許可番号が確認できる。

⑤　その他陶磁器（第43図－208）

208は薩摩焼系の流れを組む，川内の平佐焼のカラカラ（注口付徳利）である。胴部最大径12.5㎝，注口最大幅1.0㎝を測る。明治時代以降のものであることが判明した。209は陶磁器製のビンと思われる。口径2.1㎝，胴部最大径5.8㎝を測る。底部に「新案登録　第八二〇一九」とあるが，どのような意味であるのか判明できなかった。

第12表　Ⅰｃ層弾頭・薬莢観察表

挿図	遺物番号	種類 / 部位	素地 / 所属	法量（㎜）		備　考
39	167	機銃	合金製	最大長	62	40.0g
		弾頭	米国	最大径	14	ライフリングが右回りに８条入る
	168	機関砲	真鍮製	最大長	162	290.0g
		薬莢	日本	最大径	44	20㎜対空機関砲
	169	機銃	合金製	最大長	100	57.0g
		薬莢	米国	最大径	20	12,7㎜米軍航空機銃弾
	170	機銃	合金製	最大長	100	49.0g
		薬莢	米国	最大径	20	口径部欠損
	171	機銃	合金製	最大長	76	42.0g
		薬莢	米国	最大径	20	肩部より上部欠損
	172	機銃	合金製	最大長	95	50.0g
		薬莢	米国	最大径	20	12.7㎜米軍航空機銃弾
	173	機銃	合金？真鍮？	最大長	94	47.0g
		薬莢	不明	最大径	20	使用国不明
	174	機銃	合金？真鍮？	最大長	89	43.0g
		薬莢	不明	最大径	20	使用国不明
	175	不明	合金？真鍮？	最大長	56	12.0g
		薬莢	不明	最大径	12	口径より7.7㎜弾と判明

第14表　Ⅰｃ層掩体壕内出土統制食器観察表

挿図	遺物番号	材質	種類	内訳	口径㎝	底径㎝	備　考
42	190	磁器	碗	一部欠損	11.2	4	高台内に「岐270」の銘あり。
	191	磁器	碗	一部欠損	11.5	3.7	高台内に「岐80」の銘あり。
	192	磁器	碗	一部欠損	11.2	4.3	高台内に「中山」の銘あり。
	193	磁器	碗	一部欠損	10.2	3.2	高台内に「瀬672」の銘あり。
	194	磁器	碗	半分以上欠損	11.5	3.3	高台内に「岐10？」の銘あり。
	195	磁器	湯呑み	一部欠損	7.2	2.8	高台内に「岐429」の銘あり。
	196	磁器	湯呑み	一部欠損	7.4	3.3	高台内に「岐429」の銘あり。
	197	磁器	湯呑み	胴，底部	7.5	3.3	高台内に「九谷」の銘あり。
	198	磁器	湯呑み	一部欠損	8.6	3.5	口縁部付近に緑色の二条圏線。高台に「岐391」の銘。
	199	磁器	湯呑み	一部欠損	5.6	3.1	高台内に「岐273」の銘あり。
	200	磁器	湯呑み	一部欠損	6.6	2.7	銘，不明瞭。
	201	磁器	盃	一部欠損	4.9	1.6	高台内に「岐199」の銘あり。
	202	磁器	盃	一部欠損	5.5	2	支那事変記念品。高台内に「許　27405」の銘あり。
	203	磁器	盃	半分以上欠損	5.3	1.3	支那事変記念品。高台が「忠」の字で作られている。
43	204	磁器	深皿	一部欠損	15	8.8	銘，不明瞭。
	205	磁器	皿	一部欠損	20.5	10.5	高台内に「岐511」の銘あり。
	206	磁器	皿	一部欠損	－	5.6	高台内に「有32」の銘あり。
	207	磁器	深皿	半分欠損	15.5	9.6	銘，不明瞭。
	208	磁器	カラカラ	一部欠損	－	6.5	胴部最大径12.5㎝。注口最大径0.7㎝
	209	磁器	ビン	一部欠損	2.1	6	胴部最大径5.8㎝。口部最大径1.9㎝。高台内に「新案登録　第八二〇一九」の銘あり。

第13表　Ⅰｃ層掩体壕内出土ガラス製品観察表

挿図	遺物番号	種類 / 部位	素地	法量（㎝）		特　徴
40	176	飲料水ビン	ガラス	器高	14.8	大きい球の径　3.1㎝
		完形		最大径	3.1	小さい球の径　1.8㎝
	177	アンプルビン	ガラス	器高	6.9	下部に陽刻あり
		完形		口径	1	
	178	アンプルビン	ガラス	器高	6.7	
		完形		口径	1.5	
	179	アンプルビン	ガラス	器高	5.9	
		完形		口径	1	
	180	化粧ビン?薬ビン?	ガラス	器高	8.3	表に「わかきみ」。裏に「定量線」の陽刻あり。
		完形		口径	1.6	
	181	薬ビン	ガラス	器高	14.8	青色ガラスを使用。表に「木谷神薬」の陽刻あり。
		完形		口径	1.7	
	182	薬ビン	ガラス	器高	14.8	表に目盛と，「磯病院」の陽刻あり。底部に轡十字の陽刻あり。
		完形		口径	1.8	
	183	薬ビン？	ガラス	器高	16.2	底部に「百湯撰」の陽刻あり。
		口部欠損		口径	－	
	184	殺虫剤ビン	ガラス	器高	17.2	アルファベットの陽刻あり。
		完形		口径	2.5	
	185	殺虫剤ビン	ガラス	器高	20.5	肩部に「専売特許フマキラー　専売本舗大下回春堂」の陽刻あり。
		口部欠損		口径	－	
	186	殺虫剤ビン	ガラス	器高	17.3	肩部に「専売特許　ハイカチール」とロゴ，底部にロゴが陽刻。
		口部欠損		口径	－	
	187	殺虫剤ビン	ガラス	器高	23.4	肩部に旧字とアルファベットの陽刻あり。
		完形		口径	2.2	
41	188	ビールビン	ガラス	器高	28.2	肩部，下部に陽刻あり。
		口部欠損		口径	－	
	189	その他ビン	ガラス	器高	18.5	白色すりガラス製。肩部，底部，下部に陽刻あり。飲料水ビン?酒ビン?
		完形		口径	2	

第Ⅷ章　科 学 分 析

第１節　放射性炭素年代測定結果報告書

１　㈱加速器分析研究所観測結果（平成18年実施１点）

⑴　測定の意義

前畑遺跡のⅢ層の年代と植生を明らかにする。

⑵　測定対象試料

測定対象試料は，前畑遺跡のⅢ層から出土した炭化物（№２：IAAA－62504）１点である。

⑶　化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～１Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。

３）試料を酸化銅１ｇと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し，グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

⑷　測定方法

測定機器は，３MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により^{13}C/^{12}Cの測定も同時に行う。

⑸　算出方法

１）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

２）BP年代値は，過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

３）付記した誤差は，次のように算出した。

複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

４）δ^{13}Cの値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。

δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - ^{14}A_R)/^{14}A_R] \times 1000$

⑴　$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - ^{13}A_{PDB})/^{13}A_{PDB}] \times 1000$

⑵　ここで，$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$ または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}Cは，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S$＝^{13}C/^{12}C）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に^{13}C/^{12}Cを測定し，標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，$\triangle^{14}$Cは，試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$(‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。⑴式の^{14}C濃度を，δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1+\delta^{13}C/1000))^2$（$^{14}A_S$として^{14}C/^{12}Cを使用するとき）

または

$= {}^{14}A_S \times (0.975/(1+\delta^{13}C/1000))$（$^{14}A_S$として^{14}C/^{13}Cを使用するとき）

$\triangle^{14}C = [(^{14}A_N - ^{14}A_R)/^{14}A_R] \times 1000$　(‰)

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしないδ^{14}Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており，$\triangle^{14}$Cとの関係は次のようになる。

$\triangle^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000$　(‰)

$pMC = \triangle^{14}C/10 + 100$　(%)

国際的な取り決めにより，この$\triangle^{14}$CあるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age; yrBP）が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln[(\triangle^{14}C/1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln(pMC/100)$

５）^{14}C年代値と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

６）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

⑹　測定結果

前畑遺跡のⅢ層から出土した炭化物（№２：IAAA－62504）の^{14}C年代は，3040±30yrBPである。暦年較正年代（１σ）は，№２が1380BC～1260BCであり，縄文時代後期後葉に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey C.(1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy:the OxCal Program, *Radiocarbon*, 37(2)425-430

Bronk Ramsey C.(2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43(2A)355-363

Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 43(2A)381-389

Reimer, P. J. et al. (2004)IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

第15表　ＢＰ年代および炭素の同位体比

IAA Code No.	試料		BP 年代および炭素の同位体比				
IAAA-62504	試料採取場所：	鹿児島県鹿屋市郷之原町	Libby Age(yrBP)	:	3,040	±	30
		前畑遺跡	δ13C(‰)、(加速器)	=	-25.56	±	0.83
	試料形態　：	炭化物	Δ14C(‰)	=	-315.2	±	2.9
	試料名(番号)：	2	pMC(%)	=	68.48	±	0.29
			δ14C(‰)	=	-316.0	±	2.6
	(参考)	δ13C の補正無し	pMC(%)	=	68.40	±	0.26
#1610			Age (yrBP)	:	3,050	±	30

第16表　暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age(yrBP)
IAAA-62504	2	3041　± 33

ここに記載するLibby Age(年代値）と誤差は下１桁を丸めない値である。

２　㈱パレオ・ラボ測定結果（平成19年度実施６点）

⑴　はじめに

鹿児島県に位置する前畑遺跡より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料の調製は廣田，瀬谷，Lomtatidze, Jorjoliani，測定は伊藤，丹生，小林が行い，報告文は伊藤，中村が作成した。

なお，同じ試料を対象として樹種同定も行っている。

⑵　試料と方法

測定試料の情報，調製データは表１のとおりである。

試料は，1号竪穴住居跡の５点（試料№１～５：PLD－10736～10740），１号集石（本報告書では集石遺構６号と改称）の１点（試料№６：PLD－10741），計６点の炭化材である。試料の部位は，№１が最外年輪の可能性がある部位，№２・３・５が最外年輪以外，№４・６が部位不明である。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

⑶　結果

表２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値，慣用に従って年代値，誤差を丸めて表示した^{14}C年代，^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を，図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値，誤差を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお，暦年較正の詳細は以下の通りである。暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお，1σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に２σ暦年代範囲は95．4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち，その確率が最も高い年代範囲については，表中に下線で示してある。

⑷　考察

試料について，同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。２σ暦年代範囲（95.4%の確率でこの範囲に暦年代が収まることを意味する）に着目して結果を整理する。１号竪穴住居跡出土試料５点（試料№１～５）の^{14}C年代はほぼ一致しており，５点の２σ暦年代範囲は350calBCから47calBCに収まる。この結果は，春成・今村編2004や西本編2006・2007に照らすと，おおむね弥生時代中期に相当する。１号集石出土試料（試料№６）の２σ暦年代範囲は6226～6081calBCである。この結果は，キーリ・武藤1982や小林2008に照らすと，縄文時代早期後半に相当する。なお，今回の試料は，確実に最外年輪と言える部位は無く，いずれも枯死・伐採年より古い年代を示している可能性を考慮する必要がある。

参考文献

Bronk Ramsey, C.（1995)Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy：The OxCal Program. *Radiocarbon*, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C.（2001)Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon*, 43, 355-363.

キーリ C. T. ・武藤康弘（1982）縄文時代の年代．縄文文化の研究第１巻，雄山閣，246-275.

小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．縄文時代の考古学２　歴史のものさし　縄文時代研究の編年体系，同成社，257-269.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代．３-20.

西本豊弘編（2006）新弥生時代のはじまり第１巻　弥生時代の新年代，雄山閣，p.143.

西本豊弘編（2007）新弥生時代のはじまり第２巻　縄文時代から弥生時代へ，雄山閣，p.185.

春成秀爾・今村峯雄編（2004）弥生時代の実年代，学生社，p.253.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G. , Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.

A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

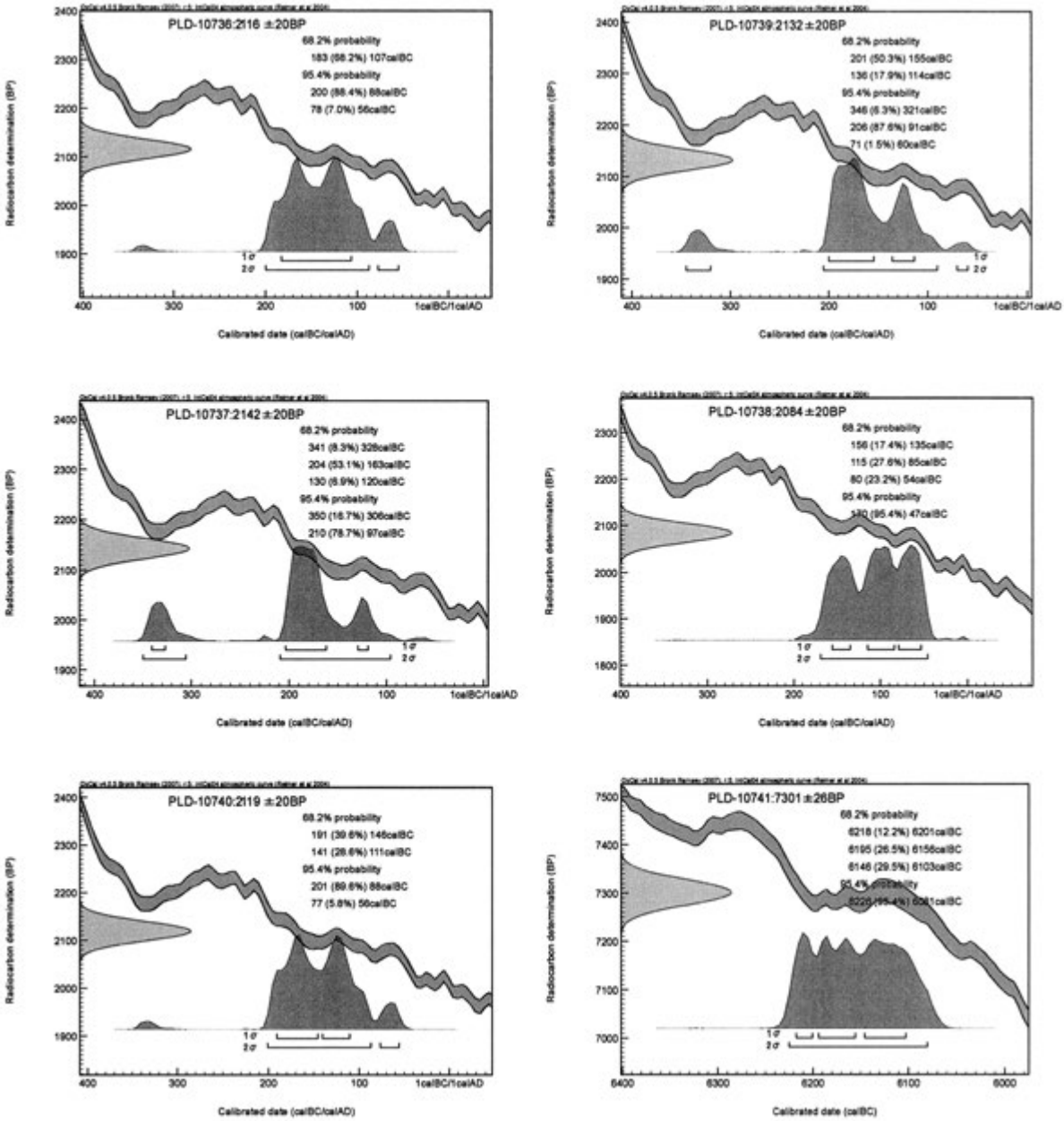
第17表　測定資料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-10736	調査区：C-23 区 遺構：1 号竪穴住居跡 試料No.：1 遺物No.：154	試料の種類：炭化材(シイノキ属，最外?～5 年輪分) 試料の性状：最外年輪? 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-10739	調査区：C-23 区 遺構：1 号竪穴住居跡 試料No.：2 遺物No.：155	試料の種類：炭化材(アカガシ亜属，より外側～5 年輪分) 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-10737	調査区：C-23 区 遺構：1 号竪穴住居跡 試料No.：3 遺物No.：156	試料の種類：炭化材(シイノキ属，より外側～5 年輪分) 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-10738	調査区：C-23 区 遺構：1 号竪穴住居跡 試料No.：4 遺物No.：157	試料の種類：炭化材（シイノキ属） 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-10740	調査区：C-23 区 遺構：1 号竪穴住居跡 試料No.：5 遺物No.：160	試料の種類：炭化材(シイノキ属，より外側～4 年輪分) 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-10741	調査区：C-1・10 区 遺構：1 号集石 試料No.：6	試料の種類：炭化材(散孔材，2 年輪分) 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)

第18表　放射性炭素年代及び暦年較正の結果

測定番号	δ13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	14C 年代 (yrBP±1σ)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-10736 遺物No.：154 試料No.：1	-25.64±0.13	2116±20	2115±20	183BC(68.2%)107BC	200BC(88.4%)88BC 78BC(7.0%)56BC
PLD-10739 遺物No.：155 試料No.：2	-26.07±0.21	2132±20	2130±20	201BC(50.3%)155BC 136BC(17.9%)114BC	346BC(6.3%)321BC 206BC(87.6%)91BC 71BC(1.5%)60BC
PLD-10737 遺物No.：156 試料No.：3	-25.90±0.20	2142±20	2140±20	341BC(8.3%)328BC 204BC(53.1%)163BC 130BC(6.9%)120BC	350BC(16.7%)306BC 210BC(78.7%)97BC
PLD-10738 遺物No.：157 試料No.：4	-25.17±0.15	2084±20	2085±20	156BC(17.4%)135BC 115BC(27.6%)85BC 80BC(23.2%)54BC	170BC(95.4%)47BC
PLD-10740 遺物No.：160 試料No.：5	-26.83±0.17	2119±20	2120±20	191BC(39.6%)146BC 141BC(28.6%)111BC	201BC(89.6%)88BC 77BC(5.8%)56BC
PLD-10741 試料No.：6	-26.21±0.11	7301±26	7300±25	6218BC(12.2%)6201BC 6195BC(26.5%)6156BC 6146BC(29.5%)6103BC	6226BC(95.4%)6081BC

第19表　暦年較正結果



第２節　炭化材の樹種同定

１　㈱パレオ・ラボ測定結果（平成19年度実施６点）

⑴　はじめに

前畑遺跡の調査では，１号竪穴住居跡及び１号集石が検出された。ここでは，これら遺構から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお，同一試料についてAMS法による放射性炭素年代測定を行っている（年代測定参照）。

⑵　試料と方法

炭化材試料は，１号竪穴住居跡から出土した炭化材５点，１号集石から出土した炭化材１点の合計６試料である。

試料は，すべての炭化材について，カッターなどを用いて３断面（横断面・接線断面・放射断面）を作製し，直径１㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し銀ペーストを塗布した後，金蒸着を行った。観察および同定は，走査型電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM－5900LV型）を使用した。

⑶　結果

炭化材の樹種を検討した結果，常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属（以下，アカガシ亜属と呼ぶ），シイノキ属，散孔材の３分類群が検出された。

１号竪穴住居跡から出土した炭化材は，シイノキ属が４点とアカガシ亜属１点であった。

１号集石から出土した炭化材は，散孔材１点であった。

第20表　出土炭化材の樹種同定結果

試料№	調査区	遺構	遺物№	樹種
7	C-23区	1号竪穴住居跡	154	シイノキ属
8	C-23区	1号竪穴住居跡	155	アカガシ亜属
9	C-23区	1号竪穴住居跡	156	シイノキ属
10	C-23区	1号竪穴住居跡	157	シイノキ属
11	C-23区	1号竪穴住居跡	160	シイノキ属
12	C-9･10区	1号集石	－	散孔材

以下に，同定根拠とした材組織の特徴を記載した。

①　コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科　図版１　1a-1c（№８）

小型～中型の道管がほぼ単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は，同性単列のものと集合放射組織からなる。

アカガシ亜jn属は，常緑高木であり，主に暖温帯に分布するアラカシ・アカガシ・シラカシ，関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ，海岸や乾燥地に多いウバメガシ，寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は，弾性および耐湿性があり，農具として利用される。

②　シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科　図版１　2a-2c（№７），3a-3c(№９)，4a-4c(№10)，5a(№11)

年輪の始めに中型の道管が配列し，晩材では小型の道管が火炎状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性と集合放射組織からなる。

シイノキ属は，暖帯に生育する常緑高木であり，関東以西に分布するツブラジイ（*C. cuspidata*）と福島県と新潟県佐渡以南に分布するスダジイ（*C. cuspidata* var. *sieboldii*）がある。材は，一般的に重硬であるが，切削などの加工はあまり困難ではない。建築材や器具材などに利用される。

③　散孔材 *Diffuse-porous wood* 図版１　6a-6c(№12)

小型の道管が単独または２～３個斜めに複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単一または階段状である。放射組織は，３細胞幅程度である。材組織が明瞭でないことから，散孔材とした。

第Ⅸ章　発掘調査のまとめ

本稿は，（前畑遺跡1990）の発掘調査の成果を概ね踏襲し，資料を追加するものとして位置付けることができる。また，（前畑遺跡1990）の刊行から20年の時を経て，部分的ではあるが新たな考古学的知見を付加することもできたように思う。

第１節　縄文時代について

本稿で資料を得ることができたのは，Ｘ層（早期相当層）であった。（前畑遺跡1990）で報告のあったＶ層（縄文晩期相当層）には，遺構・遺物等確認されなかった。

遺構に関しては，集石遺構が６基追加され，前畑遺跡全体で12基を数えるに至った。（前畑遺跡1990）では「調査区内は遺跡の北端である」と記されたが，北側隣接区に位置する本稿調査区内での集石遺構や散礫状況の把握により，集石遺構はさらに北側に伸びる可能性が高くなったと言える。「南側の用地外に広範囲に広がる」可能性をも考慮に入れると，本遺跡の平栫式土器期における集落規模は，より広範囲に及ぶと捉えられる。（前畑遺跡1990）では「集石遺構は時期を特定するものは無いが」との注釈付きで「層位的にⅣ類土器（本稿Ⅲ類土器：平栫式土器に相当）に伴う」可能性が指摘されていたが，集石１号内炭化物１点の放射性炭素年代測定により^{14}C年代で「7300±25年BP」と「縄文時代早期後半に相当する」結果を得た。少なくとも集石１号については，出土土器の比定時期と符合するデータを得たと言える。捉えられた集石遺構周辺の夥しい散礫状況の要因について，「包含層の形成時に流失した可能性」を述べている。本遺跡の土層には，本来は下層に位置するはずの権現山火山灰が，Ⅺ層（薩摩火山灰）より上位のⅨ層を形成している可能性[1]や，Ⅵ層（アカホヤ火山灰二次堆積）が後続するⅦ層（池田降下軽石堆積物）の上位に位置する[1]点など層位の逆転現象が指摘されている。北隣の高隈山堆積物の本遺跡への流入の可能性を示唆するものとして，降雨等を含め，散礫状況の要因に挙げられよう。新たな可能性として注目したいのが，城ヶ尾遺跡の事例である。本遺跡の集石は平栫式土器の時期に相当し，城ヶ尾遺跡の集石は塞ノ神Ｂ式土器を中心とする時期であり，若干の時期差は存在するものの，土器編年上は近い時期にあると考えられる。（城ヶ尾遺跡Ⅱ報告書2003）では，集石と散礫（散石）の接合を試みており，その結果，「散石は集石の外方向に分布している」状態を捉えている。「集石の配置状況，散石状況，土器，石器の分布状態を統合すると，（集石の）環状ブロックは累積的な廃棄行為の結果として形成され」「遺跡を形成した人々の活動域が環状ブロックの内側に展開して」「活動領域の痕跡を確認できるエリアが環状に形成され，さらにその外周に廃棄場が展開する景観」が想定されている。本遺跡では，集石及び散礫の礫接合を試みていないため断定できないが，散礫も被熱により赤化・黒変・熱破砕しており，使用後の廃棄礫である可能性がある。加えて，集石・散礫の分布状態を概観すると，Ｂ－11区辺りの散礫の疎域を中心として集石が環状に配置されている状況にも捉えられ，城ヶ尾遺跡との類似性を感じる。今後，その関連性を検討していく必要性があると思われる。

Ｘ層出土遺物については，現況の土器編年観を基にⅠ類土器（前平式土器？），Ⅱ類土器（山形押形文土器），Ⅲ類土器（平栫式土器）の３つに分類して整理した。なお，（前畑遺跡1990）のⅠ類土器（石坂式土器）・Ⅴ類土器（塞ノ神Aa式土器）は，本稿掘調査では出土が確認されていない。

Ⅲ類土器は，Ｘ層包含遺物中，最大量を誇る中心的土器群である。出土区はC－９～13区が中心で，前述の集石遺構と共伴関係にある可能性が高い。平栫式土器資料群の細分類については，（前畑遺跡1990）で肥厚口縁の幅広タイプとタイプとの細分を試みている。本稿ではその後の編年研究の成果を加味し，肥厚口縁の幅広タイプを，肥厚の程度に着目して幅広口縁（深厚）と（浅薄）とに細分した。その違いを突帯添付による肥厚部作出と削り出しによ

る肥厚部作出との製作技法の相違に見出した。深鉢形土器及び壷形土器が出土したが，その施文形態や施文部位の相関から，両器種とも古い段階から新しい段階まで[8]一定量出土している可能性がある。他に特筆すべき資料として，壷形土器中，口縁部が多角形状を呈する資料（35）が本遺跡中，唯一出土した。他遺跡の同型式資料中には，僅かであるが確認されている。複数の遺跡で確認されたことにより，土器製作者のアクシデンタルな個性の顕現というより，交流の在り方や用途を含めた器種組成に広がる可能性をもつ資料とも考えられる。他に，平栫式土器のメルクマールである。口縁部の肥厚帯及び胴部の結節縄文を有しない資料（20）が１点確認された。本類の分類上，極めて特異である。平栫式土器に比定される資料群と後続する資料群との間をつなぐ可能性を有する貴重な資料であり，今後の類似資料の増加を期待したい。

Ｘ層出土の石器について述べたい。（前畑遺跡1990）で出土した石器（打製石鏃，石匙，磨製石斧，磨石，敲石，凹石，石皿，棒状敲石）中，磨製石斧，磨石，敲石，棒状敲石の他に異形石器の完形品が１点出土した。石材も西北九州産と思われるサヌカイト製である。平栫式土器に伴う西北九州産サヌカイト製異形石器の出土は，上野原遺跡に続く発見であり，平栫式土器と異形石器，西北九州産サヌカイトの関連が注目される[8]。サヌカイトの剥片は１点確認されており，本遺跡で製作された可能性も否定できないが，現況では不明である。西北九州地域と本遺跡，若しくは上野原遺跡と本遺跡の交流の可能性を示唆する資料と言える。平栫式土器と異形石器，西北九州産サヌカイトの分布域を捉え，その関連を検討する必要性があると思われる。

第２節　弥生時代

弥生時代はⅢ層を包含層とし，Ｘ層共々本遺跡の中心的遺構・遺物が確認される層である。遺構は，竪穴住居跡１基（（前畑遺跡1990）では３基），溝状遺構を伴う掘立柱建物跡１棟（（前畑遺跡1990）では８棟，付属溝状遺構は３基），土坑１基を検出した。（前畑遺跡1990）検出の円形周溝は，本稿では確認されていない。

竪穴住居跡の検出及び出土遺物の分布状況から，同時代の集落の最も西端はC－24・25区に位置し，北西側には，更に広がる可能性を捉えることができた。

また，本稿及び（前畑遺跡1990）検出の遺構の多くが切り合いを持たない点や共伴する土器が型式学的に１型式（山ノ口式土器）にとどまる点，掘立柱建物跡の建築方位も一定である点などから，比較的短期間に存在した遺跡である可能性が高い。これに関しては，「（近隣の）鹿屋市王子遺跡をはじめ南九州における同時期のいくつかの遺跡でのあり方と類似している」[4]との指摘もある。

次に，遺構の検出状況について述べてみたい。炭化材を伴う竪穴住居跡が１基検出されたが，張り床をもつ点や南西側にステップ状設備を有する点，プラン上一辺の中程に土坑が接するという，その個別の特徴は，弥生時代中期後半期の竪穴住居跡としては一般的特徴を有する。しかし，ステップ状設備に炉跡の可能性も考えられる土坑が接する形態の類例を，筆者は確認できておらず，少なくとも本遺跡では初めての形態である。（前畑遺跡1990）では，検出された竪穴住居跡３基ともが「１本柱の小型住居（１号），一辺に張り出しを持つ住居（２号），外側に支柱を支える住居（３号）とそれぞれ異なる」形態として報告されており，本稿掲載の竪穴住居跡も異なる形態の更なる追加例と捉えることもできる。このことは，多様な建築形態の偶発的な顕現の可能性も否定できないが，形態ごとに異なる要素（人数・家族構成，機能等）を有していた可能性も一考であろう。なお，竪穴住居跡内出土炭化材５点の^{14}C年代測定の結果から，2140±20年ＢＰ～2085±20年ＢＰの年代を得ており，共伴土器（山ノ口式土器）の比定時期（中期後葉）に符合する。炭化材の樹種同定の結果からは，４点は，「重硬であるが切削などの加工はあまり困難でなく，建築材や器具材などに利用される」[1]シイノキ属ブナ科（ツブラジイ，スダジイ），１点は「弾性及び耐湿性があり農

具として利用される」[1]コナラ属アカガシ亜属ブナ科との結果が示されている。樹種の違いは，柱や梁等建築物の部位の違い，若しくは農耕具等木製品の焼失等によると考えられる。

掘立柱建物跡について，C－18・19区内に４基のピットを確認したが，ピットが続くと想定される東側部分は現国道下に位置するため調査はできなかった。建物の方角等は，（前畑遺跡1990）の掘立柱建物群同様，概ね北側を向く。検出された区は「平地式建物の上屋構造」による「作業場所」[7]の可能性が考えられた５棟の検出隣接区（C－18区）であり，溝状遺構が付属する点（付属位置は異なる）等類似点がある。しかし，棟持ち柱の柱穴が確認されない点や桁行間の異なる点など相違点が見られ，構造的には「高床倉庫群」[7]として捉えられた建物群に類似する。以上のように，本遺構の特徴については両者の折衷的要素が強く，現況では用途や位置付け等断定するに至らない。

出土遺物は土器・土製品・石器があるが，C－18～22区の竪穴住居跡及び掘立柱建物跡周辺域に集中する。在地系土器はいずれも山ノ口式土器の範疇に収まる資料群である。後続すると想定される高付式土器への変化も視野に入れて，口縁部のＬ字状口縁の傾斜具合や口唇内面側の張り出し，口唇部の凹みの有無，口縁部と胴部の接合部の質感等をもとに，５つに口縁部形態の分類を試みた。また，本型式資料中，甕形・壷形土器の口縁部が一部剥落し，口縁部と胴部の接合面が露出している資料が一定量確認された。（76・121・122・136・141参照）。

器種的に特徴的な資料として，161が挙げられる。（前畑遺跡1990）では類似資料が高杯の脚部として紹介されていたが，本稿出土資料と接合し，スス付着や使用痕，熱による胎土の色調変化から甕形土器の蓋に器種変更を行った。「中期後半には同型式のものが王子遺跡などでも一定量出土しており，この時期に増える」可能性を指摘する意見もある[4]。

他に移入土器の存在が挙げられる。「在地系土器の山ノ口式土器に伴って出土する移入土器の関係が遺構によって明らかにされた」（前畑遺跡1990）。赤色顔料を伴う須玖Ⅱ式の袋状口縁の長頸壷が出土し，分割ミガキの技法・胎土の類似性，頸部の暗文施文の相違点から「北部九州の極周辺部か熊本・長崎が候補」地の須玖Ⅱ式新段階に絞られた[4]。他に移入土器として，甕の須玖Ⅱ式の最後の段階の土器が確認された。口縁部先端を外反させて丸くおさめるタイプ（123）で，北部九州遠賀川以西系の特徴として捉えられる。他に外面のハケメ調整の質感や縦方向の調整，口縁部のハケメ後のナデ幅等など北部九州の要素をもつ[4]。ただし，同一個体の可能性のある（前畑遺跡1990）－417の底部の特徴（分厚く底部内面に平坦面を有しない）や胎土中の有色鉱物の多さ等北部九州との相違も見られ，南筑後など北部九州の極周辺で製作された可能性もある[4]。

石器については，扁平磨製石鏃が未製品を含めて５点確認された。形状や大きさの異なる未製品の出土により，器形変化を比較することで，磨製石鏃の製作過程として捉えた。

以上，弥生時代相当層の遺物中，在地系土器の分類及び移入土器の出自を中心に述べてきた。（前畑遺跡1990）を補強する資料の他に，一部は新たな課題につながる資料や分析結果も提供することができたように思う。周辺地域を含め，今後の資料増加を期待したい。

第３節　中世

本時代については，（前畑遺跡1990）では表出して取り上げられてはいなかった。C－11・12区で明確な硬化面を伴う溝状遺構が１条確認され，現国道220号と並走して古道が所在する箇所があったことが明らかとなった。また，（前畑遺跡1990）で近世墓として分類された土坑中，墓域や埋土内遺物等で時期差（時代差）が指摘されていた２基の近隣に同様な土坑が新たに１基検出された。埋土内遺物により，上記２基を含め中世相当とし，近世墓と異なる墓域を有していた可能性を指摘したい。

第４節　近世以降

C－15～17区で，縦走・横走する幾条もの溝状遺

構が検出され，硬化面を伴う古道が１条確認された。

戦跡遺構としては，（西原掩体壕1990）で確認された掩体壕外壕及び誘導路の延長上に連なる溝状遺構が，2条確認された。C－３区では誘導路の西側に接して土坑が１基確認され，（西原掩体壕1990）のB－１・２区で誘導路の東側に接する土坑と同じ水溜池（沈砂地）の機能を有する土坑と考えられる。

砲弾や薬莢，陶磁器等の掩体壕内出土遺物について，その形態や用途，出自の整理を行い，遺物の多様性を明らかにした。特に不定型な金属製品１片については，砲弾着弾により飛散した鉄片であることを確認し，戦争の一端を明らかにすることができた。

注

⑴　鹿児島県立埋蔵文化財センター　1990『前畑遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（52）

⑵　小林氏哲夫氏の御教示による。

⑶　対面のミガキ痕が縦のブロック単位で施され，同一ブロック内では，横位若しくは斜位のミガキ痕が上方から下方に向けて平行して施される。結果的に，右下りのミガキ単位と右上がりのミガキ単位が，結果的にギザギザに重層して残される。須玖式土器のミガキの手法とされる。

⑷　中園聡氏の御教示による。

⑸　「『ガラスびんのある風景』あびこ電脳考古学館」より引用。

⑹　「株式会社パレオ・ラボ」の樹種同定結果による。

⑺　新東晃一氏の御教示による。

⑻　八木澤一郎氏1998「平栫式土器の再検討」『九州と縄文土器編年の諸問題－早期後半土器編年の現状と課題』九州縄文研究会鹿児島大会

吉本正典氏「妙見式土器の検討」

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター　1990『前畑遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（52）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2002『城ヶ尾遺跡Ⅱ』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(60)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　1990『中ノ原遺跡(Ⅱ)中原山野遺跡　西原掩体壕』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（52）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003『城ヶ尾遺跡Ⅱ』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(60)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2000『上野原遺跡（第10地点）』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(27)

八木澤一郎氏1998「平栫式土器の再検討」『九州と縄文土器編年の諸問題－早期後半土器編年の現状と課題』九州縄文研究会鹿児島大会

吉本正典氏「妙見式土器の検討」

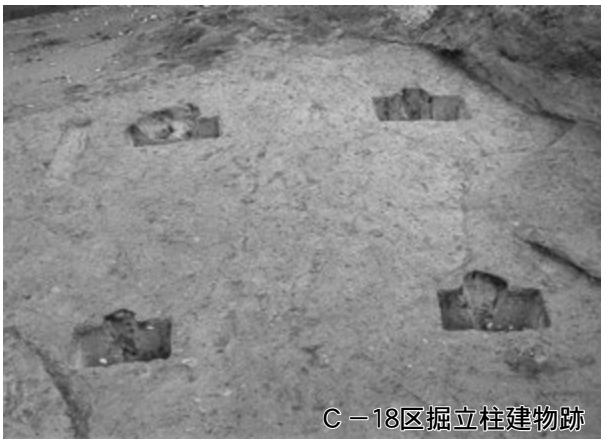
南風原町教育委員会　2000『南風原陸軍病院壕群Ⅰ』南風原町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書（第３集）

南風原町教育委員会　2008『第三二軍司令部　津嘉山壕群　津嘉山北区旧日本軍壕群』南風原町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書（第７集）

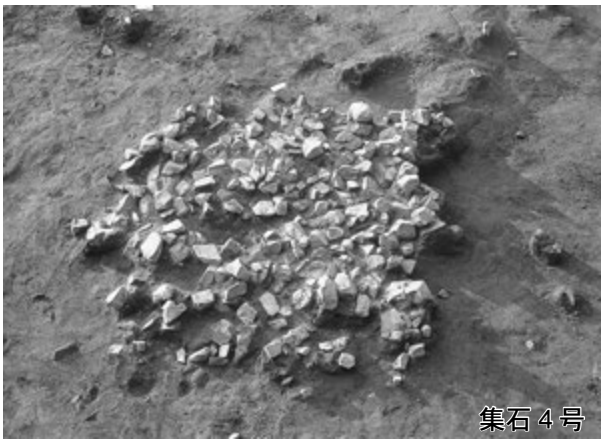
『ガラスびんのある風景』あびこ電脳考古学館

写　真　図　版

Ｂ－６区土層断面


Ｃ－18区掘立柱建物跡

集石・散礫検出状況


集石４号

異形石器

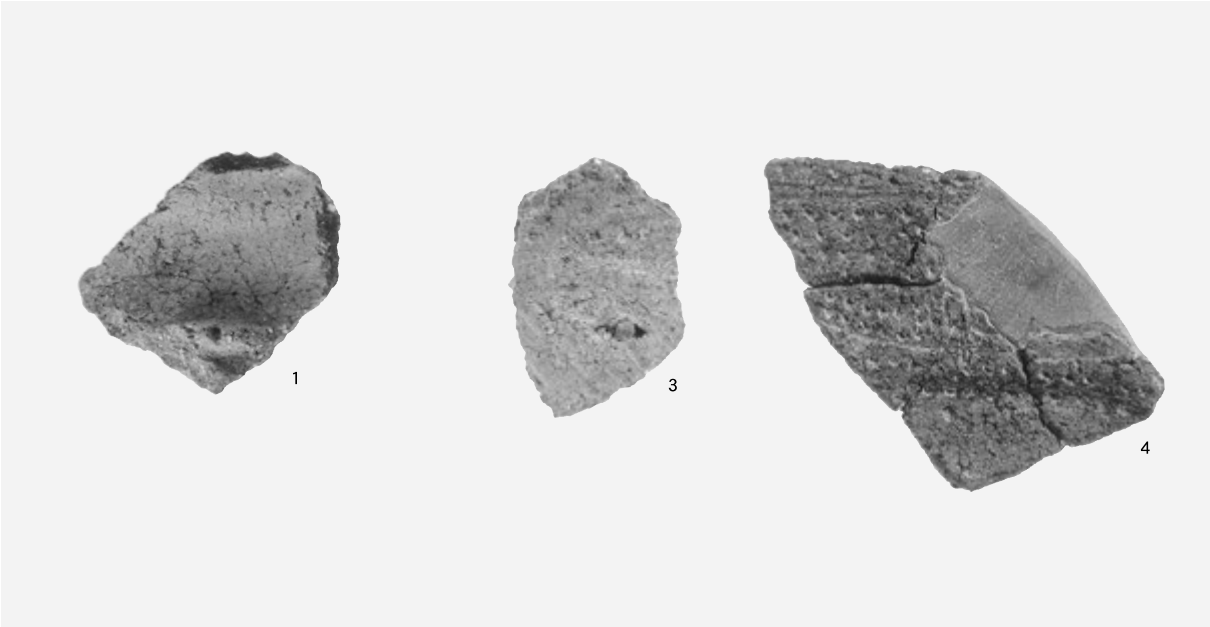
Ｃ－21・22区竪穴住居跡周辺遺物出土状況

Ｃ－21・22区竪穴住居跡

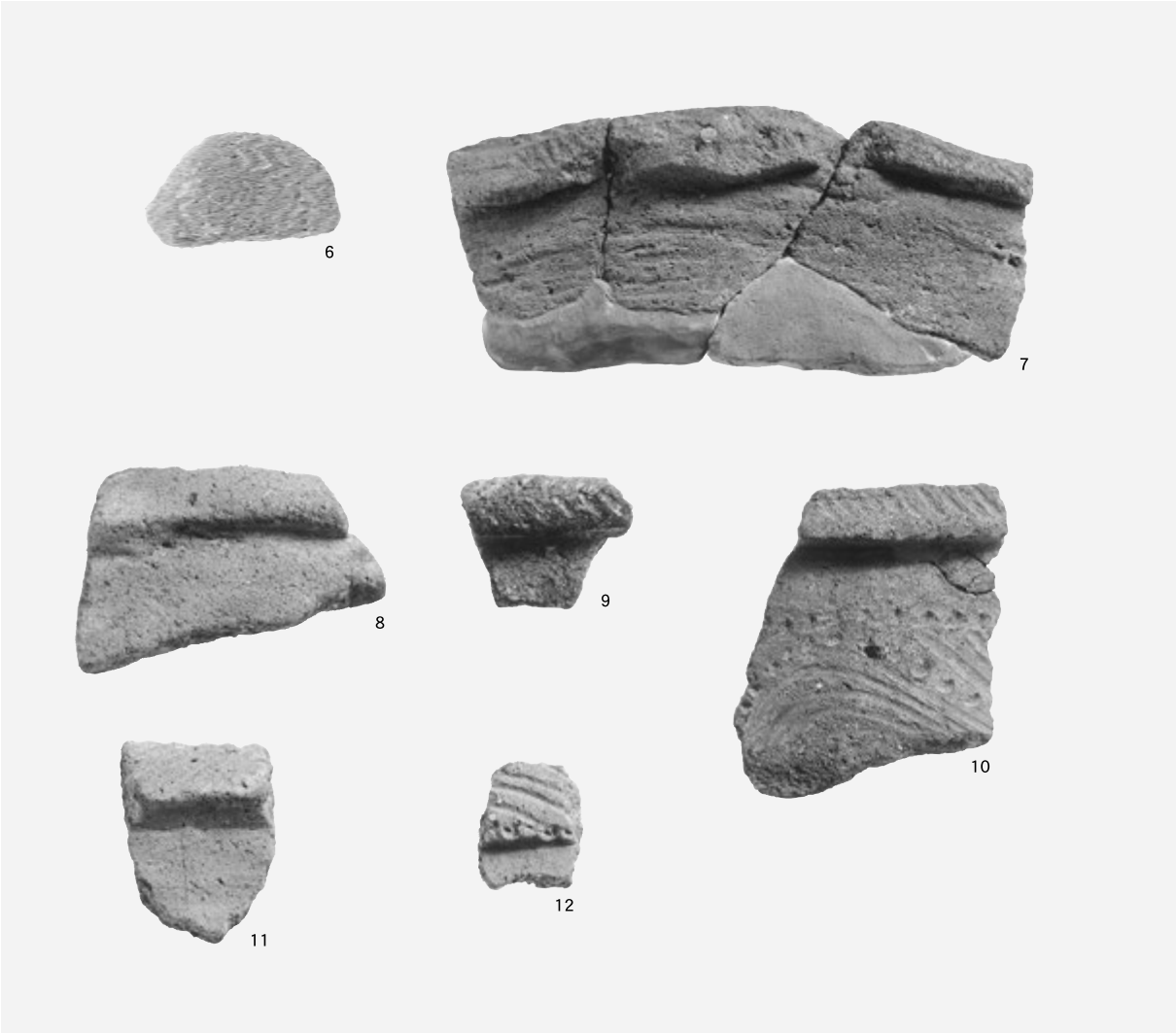
Ｃ－21・22区竪穴住居跡炭化材出土状況

前畑遺跡現場写真１～８

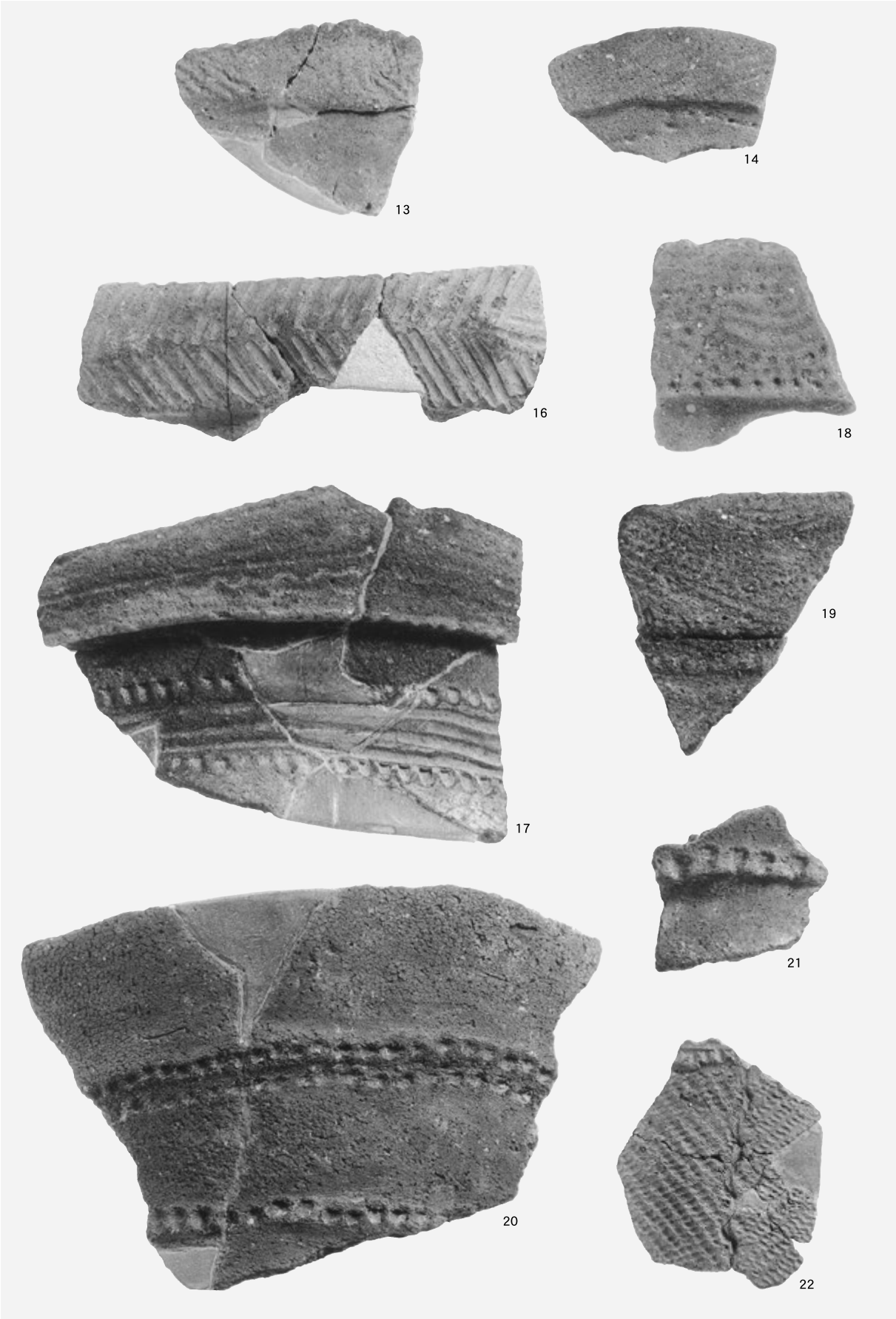
写真図版２



Ｘ層集石遺構３・４・６号出土遺物

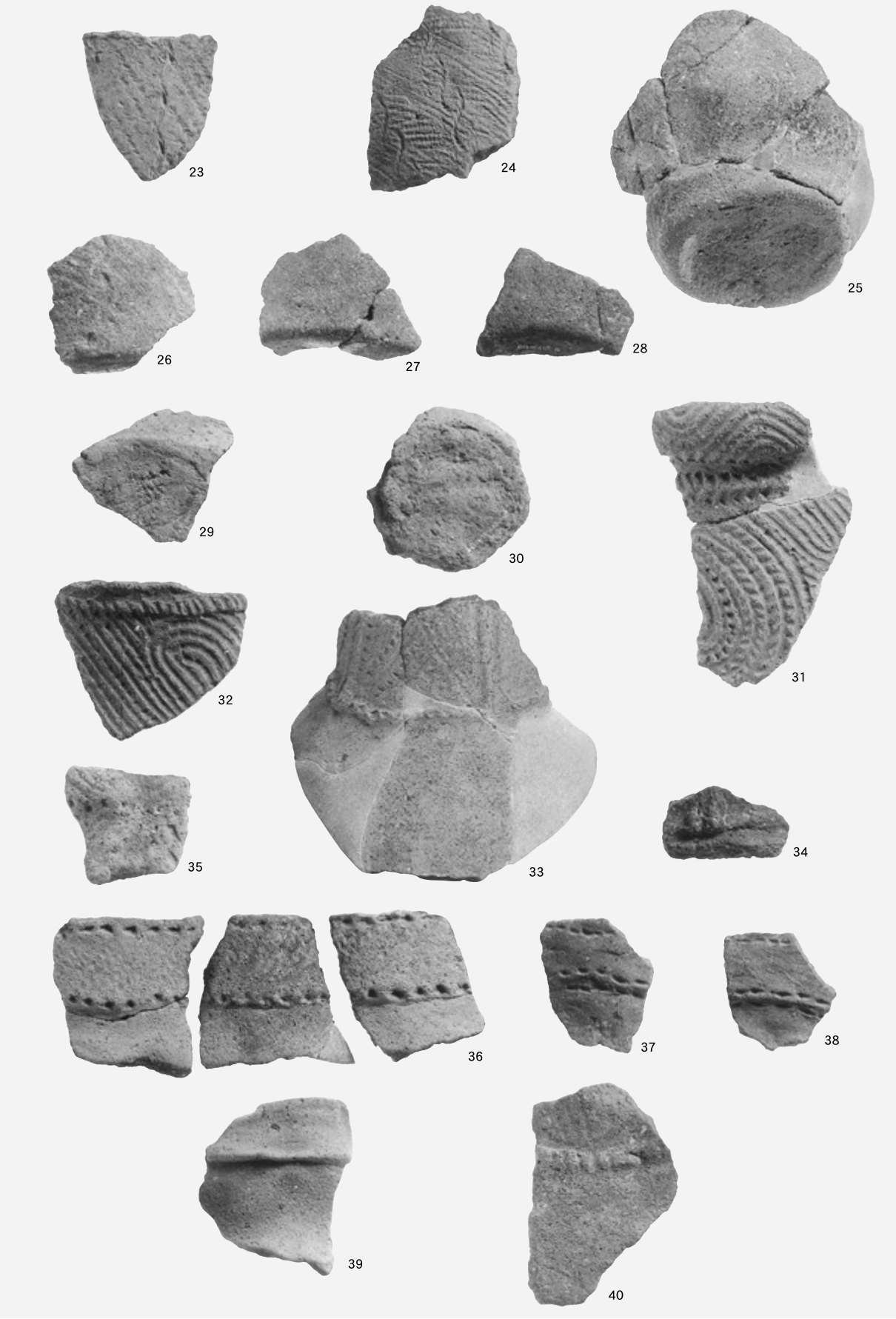


Ｘ層出土土器(1)

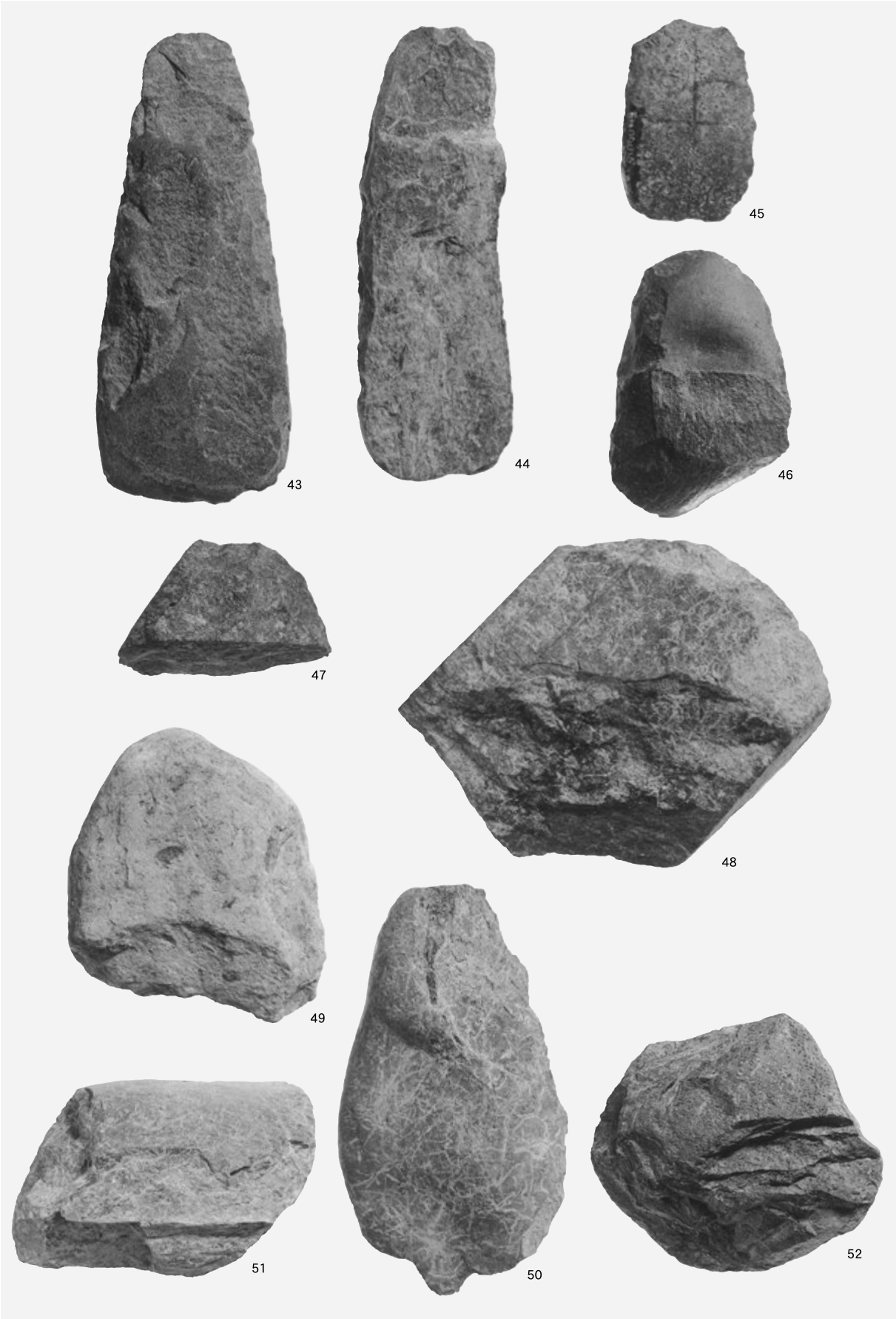


X層出土土器(2)

写真図版４

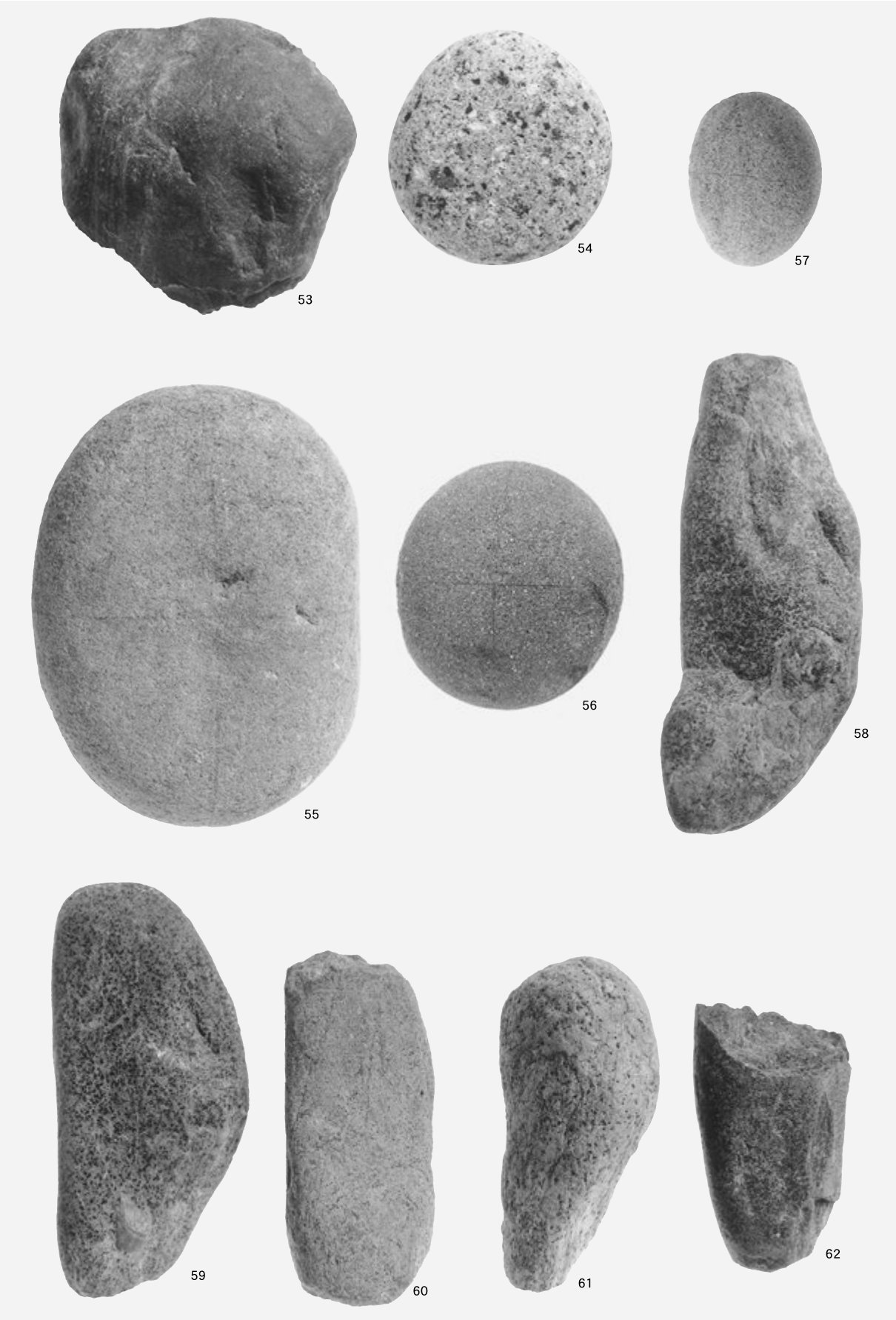


X層出土石器(1)

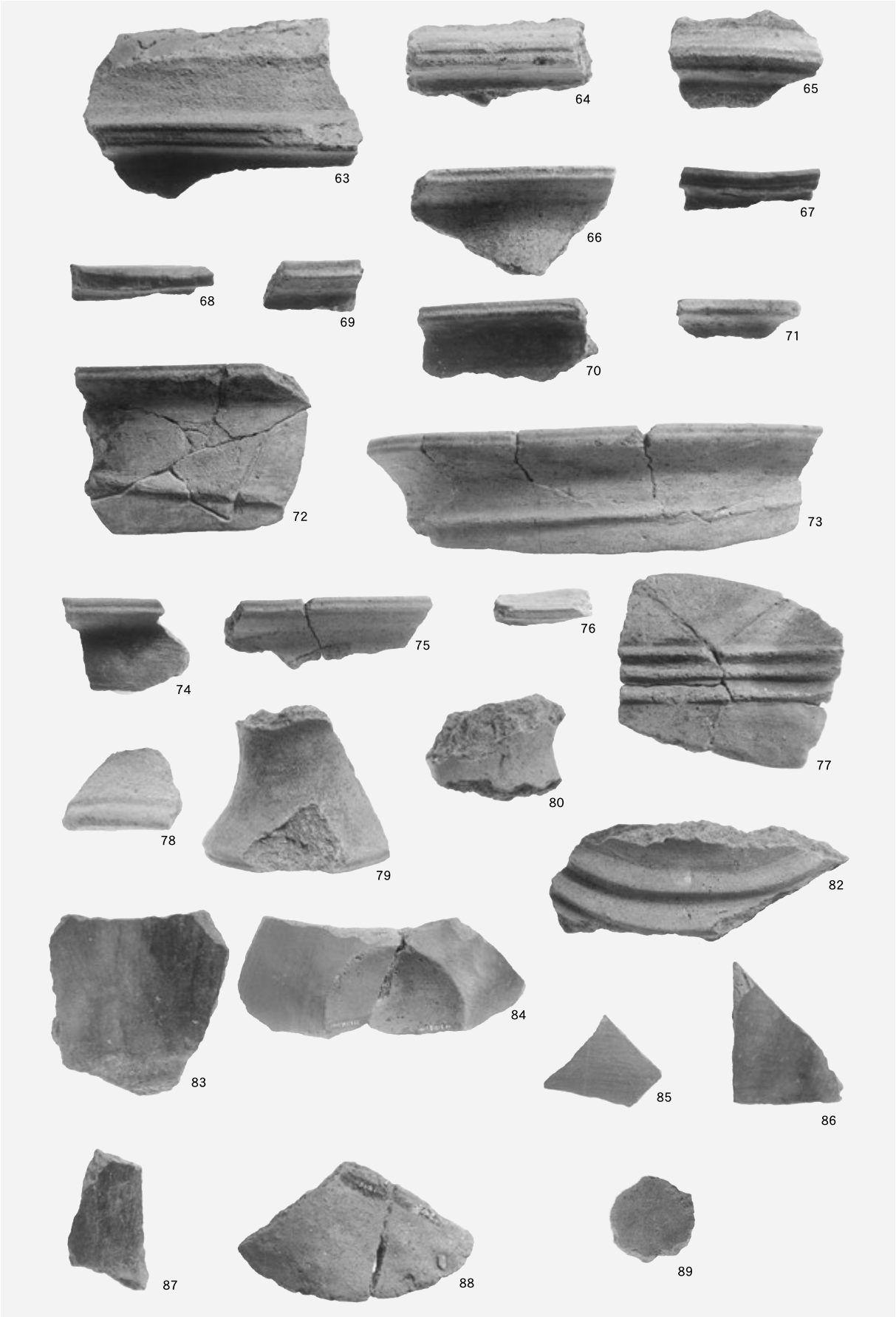


X層出土石器(2)

写真図版 6



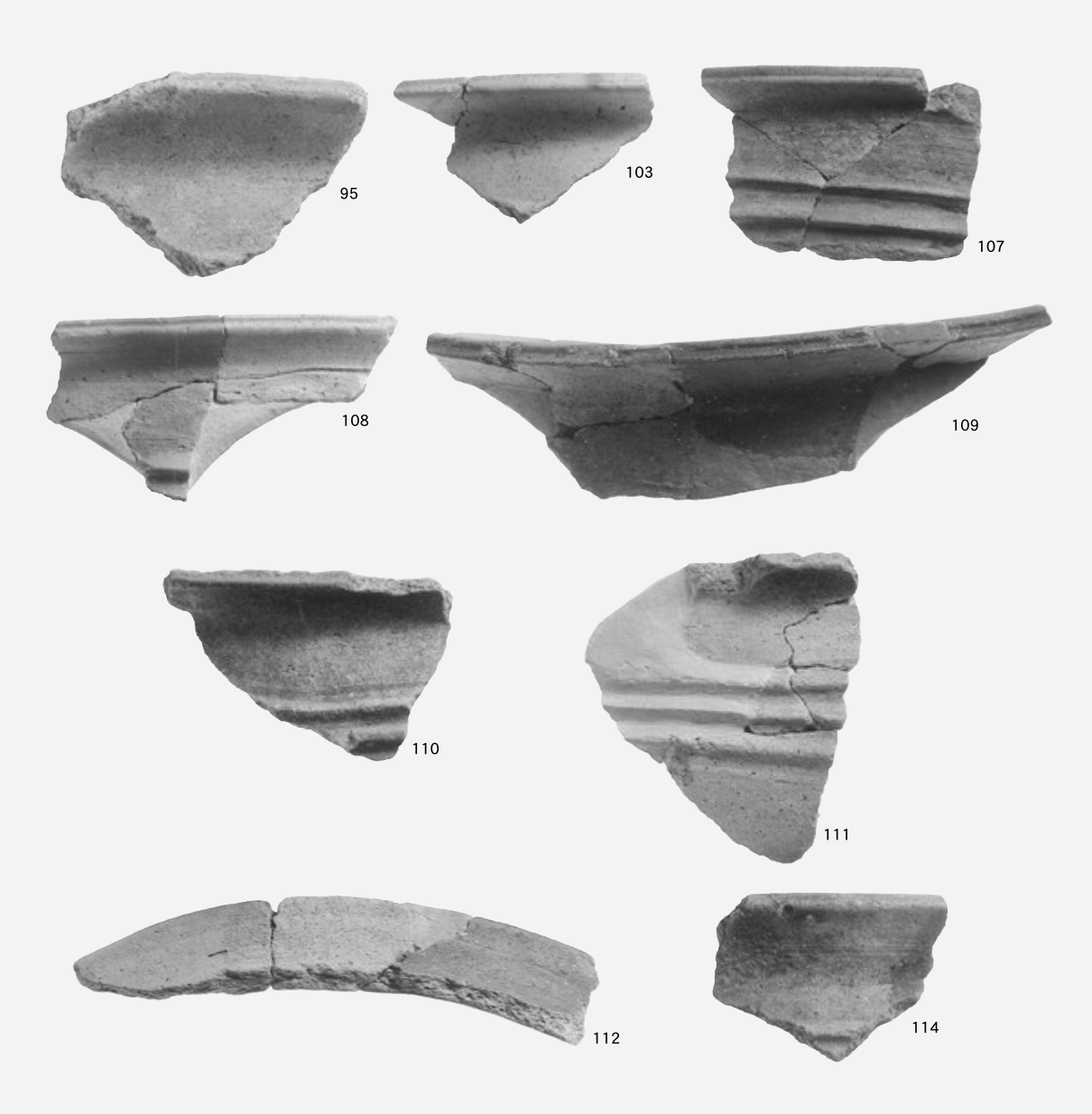
X層出土石器(3)



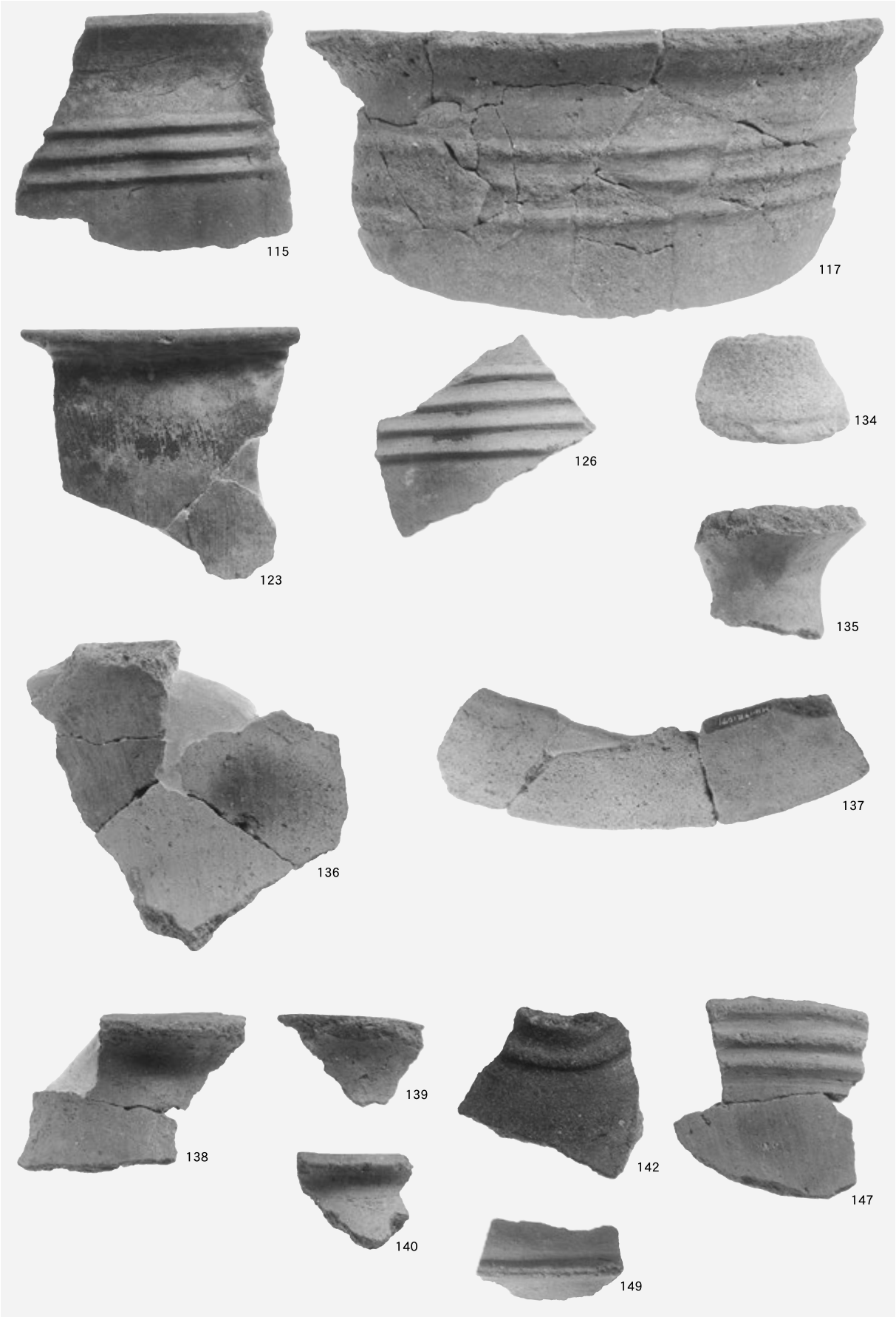
Ⅲ層竪穴住居跡内出土土器

写真図版８

Ⅲ層竪穴住居跡内出土石器



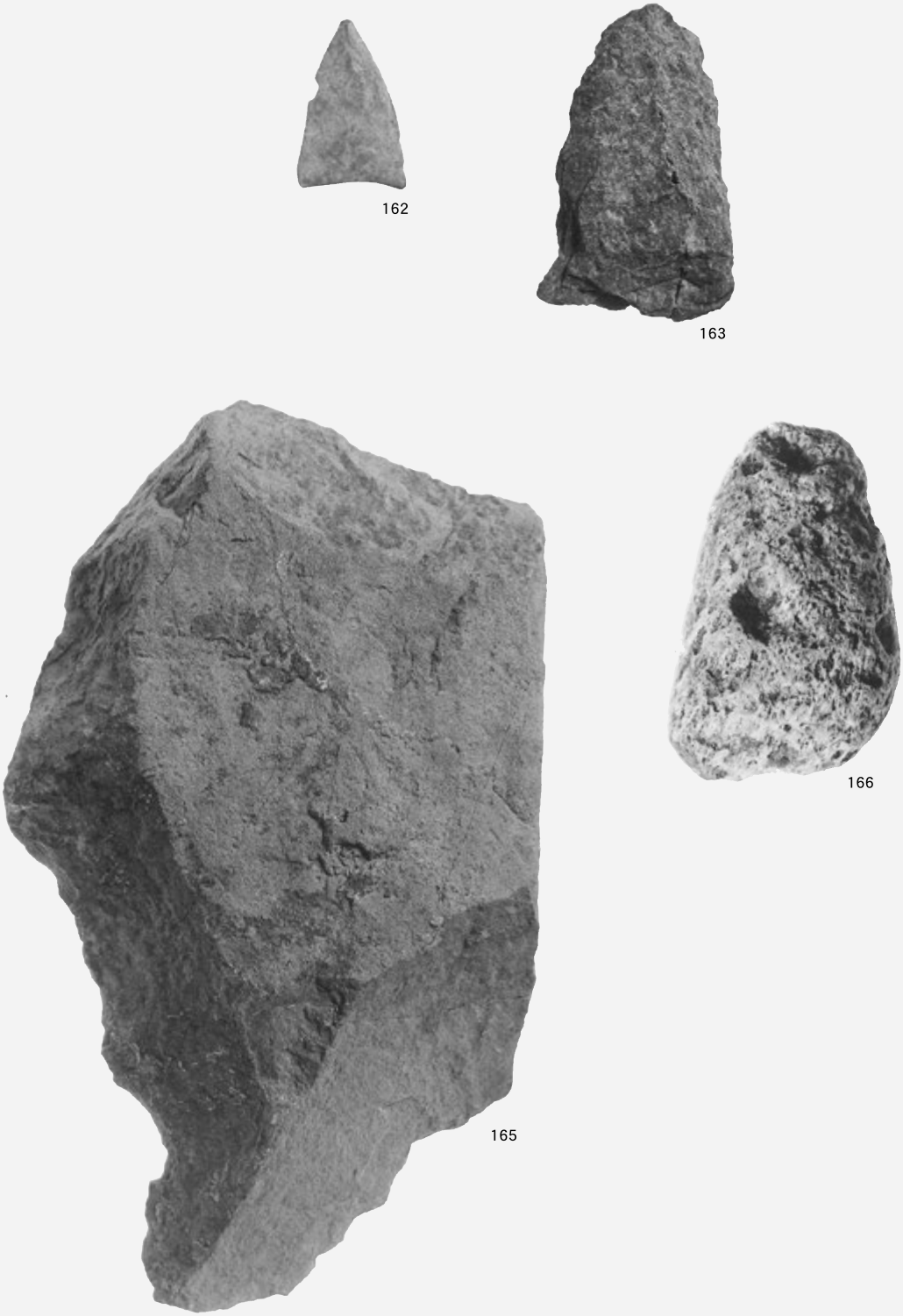
Ⅲ層出土石器(1)



Ⅲ層出土土器(2)

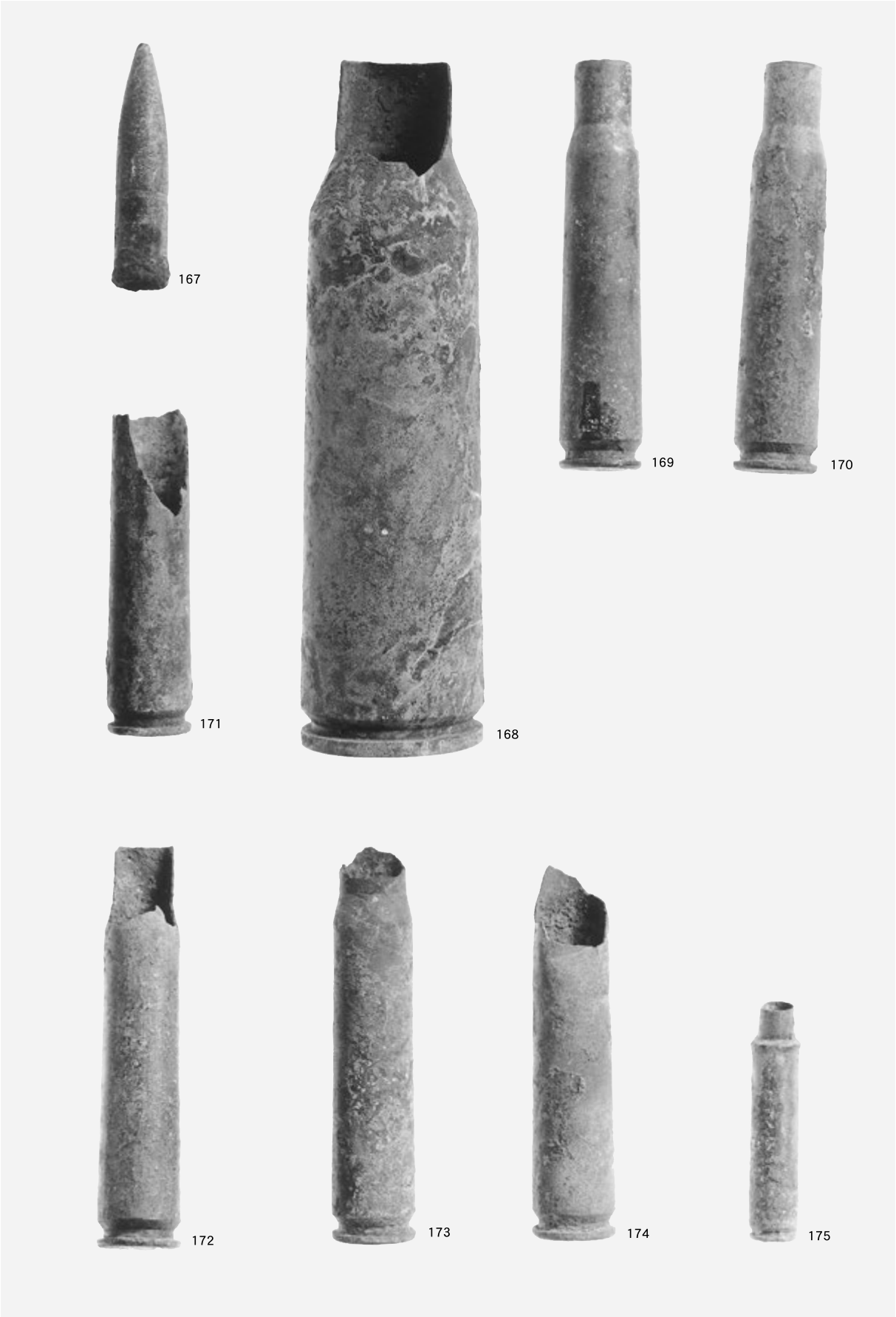
写真図版10

Ⅲ層出土土器(3)



Ⅲ層出土石器

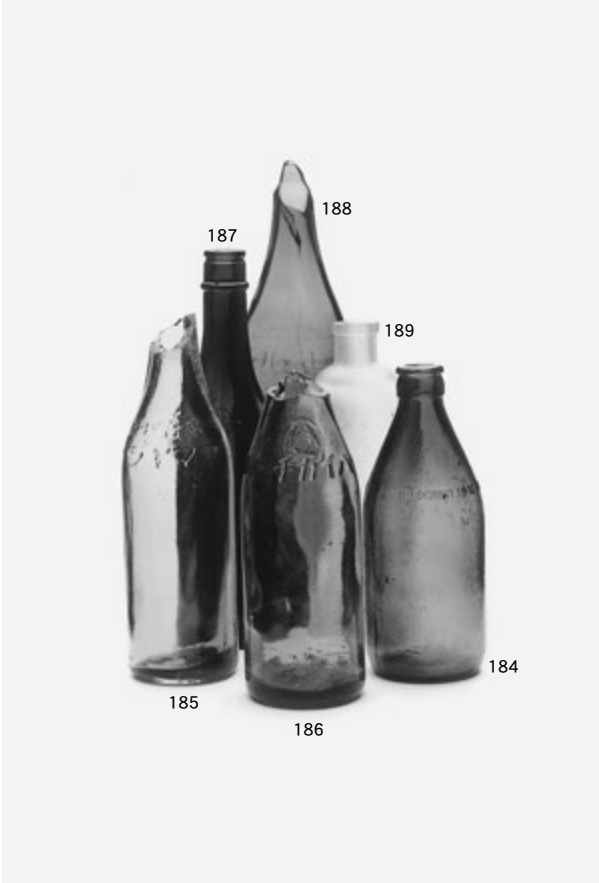
写真図版12



Ⅰc層出土弾頭・薬莢

X・Ⅲ・Ⅰc層出土遺物

写真図版14



Ⅰｃ層出土ガラス製品・統制食器

あ　と　が　き

前畑遺跡に関する報告書は，1990年から凡そ20年ぶりの２巻目の刊行となる。発掘量の増加に伴う資料蓄積や技術革新に伴う科学的手法の導入等で，この間の考古学における研究は大きく前進したと思われる。しかし，今回この報告書を刊行するにあたり，20年の月日を経ても大きな修正等もなく，追認・補強する分析結果や考察に至る現況に，（前畑遺跡1990）の編者をはじめとして，関わられた諸先生方の知見に改めて敬服するばかりである。

縄文時代早期後半の，多様な平栫式土器の出土は，同型式における編年研究の貴重な資料として重要である。また，６基の集石遺構に壷形土器２点，西北九州系サヌカイト製の異形石器１点の追加資料は，祭祀との関連が指摘される上野原遺跡出土の平栫式土器の壷形土器や異形石器との関連性を検討する良質な材料となるだろう。集落構成（集石遺構や祭祀施設）の在り方や，九州南北間の広域交流の可能性等，縄文早期後半における研究に大きく寄与するはずである。

弥生時代では，1990年刊行報告書の既発見の集落跡に，竪穴住居跡１基，掘立柱建物跡１棟，土坑１基が追加された。既検出の遺構共々，その多くが切り合いを持たない点など，従来指摘されてきた山ノ口式土器期における遺構群の特徴と共通する。集落存続期間が比較的短期間であったと想定される山ノ口式土器期の集落の出現や伸長・衰退，農耕形態等考える上で重要であろう。また，竪穴住居跡内出土の炭化材の^{14}C年代測定・樹種同定結果から，共伴する山ノ口式土器及び外来系の須玖Ⅱ式土器の展開時期や建築材の樹種の特定も成果の一つである。

中世では，（前畑遺跡1990）で近世土坑墓群中，相違が指摘されていた２基の近隣に，土坑１基が追加され，本遺跡検出の土坑墓が２時期の墓域を有していた可能性を補強するものとなった。

近代では，掩体壕等遺構検出以外に，砲弾や薬莢，統制食器等掩体壕内出土遺物の用途や出自調査を行った。雑多な鉄片資料中，砲弾の着弾飛散による鉄片が見出されたことは，戦争の残酷さを伝えるに十分な重みをもつ資料と捉えられた。

一人の作業員が，ブラシで竪穴住居跡内の炭化材に付着する埋土を丁寧に除去している最中のこと。周囲に居た職員・作業員が皆一斉に１点を見つめた瞬間があった。その視線の先は，ブラシにより露出した黒光りの炭化材。辺り一面に木材の焼け焦げた匂いが広がったのである。竪穴住居が燃えたであろう弥生時代と2000年経た現在が，同じ時空でつながっていることを実感した。発掘調査が，そこに逞しく生きた人々の生きざまに光を当て未来につないでいく重要な職務であることを再認識させられた瞬間でもあった。

最後に，発掘調査や整理作業において，国道交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿屋市教育委員会，発掘調査・報告書作成に従事していただいた作業員の皆様に心より感謝申し上げます。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（133）
一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（X）

前畑遺跡（II）

発行日　平成20年12月

発行者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
ＴＥＬ（0995）48－5811

印刷所　株式会社あすなろ印刷
〒899－0041　鹿児島市城西2－2－36
ＴＥＬ（099）214－3757